

臨濟宗妙心寺派

長光山 陽岳寺

長光山 陽岳寺
護寺会便り

No.118副住職ごあいさつ

陽岳寺護寺会便り 平成22年12月1日No.118副住職ごあいさつ

みなさん、はじめまして。陽岳寺の副住職です。

本来ならば、皆様のご自宅へ挨拶に伺うところですが、この護寺会便りにかえさせていただきます。

ほぼ毎月刊行の護寺会便りは、私の師匠、父・陽岳寺住職の作であります。その護寺会便りにて、私の動向はお知らせしていました。

2007年の春、鎌倉は円覚寺の修行道場にいったこと。今年の春3週間ほど戻ってきたこと、そして今年の夏に帰ってきたことなどをです。

深川の陽岳寺に帰ってきたのだから、すぐ皆さんにお伝えしようかと思ったのですが、8月の時点では私はただの修行僧でありました。

そこで、皆さんに報告するのは、陽岳寺の副住職になってからにしようと思ったのです。

修行道場での経験に加え、陽岳寺の本山であります京都の妙心寺にて、9月に2泊3日の研修をおこない、11月15日に副住職の任命式（垂示式といいますが）をおこなってまいりました。2泊3日の研修や、本山での辞令があるなど、まるで会社のようななと思ったものですが、これも時代の変遷のようです。

さて、陽岳寺では大事にしている行事があります。5月の第4土曜日のお施餓鬼と、11月の最終日曜日の祈祷会および演芸会です。

本年も無事11月28日に、祈祷会および演芸会を行うことができました。また、総代の方々が発起人となって、時期世代和尚の衣・袈裟料にと寄付を募り、415万5千円もの御寄進をいただきました。

祈祷会にお集まりいただきました皆さん、また護寺会員の皆様、そしてご寄進いただきました有志の方々には、厚くお礼を申し上げます。ありがとうございます。

祈祷会が私の初お披露目となったわけですが、そのときにお話ししたことがありました。

それは、お墓参りにいらっしゃるとき、ドアホンを押して、「〇〇から来ました〇〇です」と、ただそれだけでいいですから。顔を出していただけたら、ということです。

私は小さいころから本堂の隣の庫裡に住んでいましたし、お彼岸のときは皆さんの前に姿を見せていました。けれども、鎌倉にいておりました3年半の空白は大きく、皆さんの顔と名前を覚えることが仕事のひとつでもあります。どうか、皆さんお姿を見せていただけたらと思います。

そして、この挨拶には、それだけではない理由があるのです。

お寺という言葉からイメージできることは、葬儀や法事といったことだと思います。死んでからお世話になる場所、周囲にいたろう死んでいった人たちのためにある場所でしょうか？

そして、お寺とどう付き合えばいいかわからない。分かってはいるけれども、近寄りがたい。

実際、檀信徒の皆さんにとって、お寺との関係とは、親族らが死んでから始まる関係となっているように思います。通夜・葬儀、そして、お骨にして、納骨、時が経てば年回忌のお勤めをする、と。

しかし、お寺としては、そこまでに至る長い時間を共有して、ゆっくりと形成していく、お寺と檀信徒の皆さんとの共通理解・共通認識を深めていきたいと思うのです。

この時間感覚は、現代のような効率や合理性を優先する考え方とは相いれないものかもしれません。



通夜・葬儀・法事が少しずつ自分の気持ちを整理する場であると気づいてくれればと、住職は決まり切った法要では意味がない、つらい体験を乗り越えていく「過程」にしようと考えてきました。

本来、日本の葬送儀礼は、遠慮なく悲しみなどの感情表現ができる数少ない場であったのだと思います。故人を知る人が集まること。家族の知らない故人の一面を教えてもらうことによって、遺族にとって気持ちを整理できる場なのだ。そして、新しい家族に伝えていくためにも。

そのためにも、お墓参りのついででもかまいません。お寺のものと、もちろん家族親族の方々とも、話しをしてほしいと思うのです。その「過程」が、法要の内容として皆さんに返っていきます。

陽岳寺の先祖供養や年中行事などが、失われつつある絆を再生していく拠り所となるか、その役割は小さくないと思っています。

すこし難しい話しでしたが、思い出したときで結構ですので、お寺、お墓との繋がりを大事にしてほしいのです。今年もいろいろありましたと、来年もまた見守ってほしいと。

皆さんが健康でいらっしゃることが、なによりのご供養であるということです。

仏壇やお墓は、祈り願う場所です。しかし、その祈りや願いは届くことはないのでしょうか。それならば、祈り願うわれわれが、私たち自身の祈りや願いを聞かなければならないのかもしれないかもしれません。その気づきや確信によって心が充たされる。このことを心の中に生きるとのことだと、陽岳寺は考えています。

わたし達の生や死は、この広い心の世界に、産まれれば、縁が広がり、亡くなれば、また縁が広がっていることを気づくことです。

住職が言っていました。「父や母を子が思う心は、父や母が亡くなれば子の心の中に広がります。でもよく考えてみれば、その父や母も、自分を産んで育てた父や母を思っていたのだ。それが分かれば連鎖して広がっていくはずだ。そうしたら、今度は自分の源から追ってみれば、この繋がりが分かるし、自分以外の人も同じだ」と。

先日、法事の際、「新しい和尚さんのことは、なんという名前と呼ばばいいのでしょうか？」と聞かれたことがありました。宗派では、新たに命ずると書いて「新命（しんめい）さん」「新命和尚」という呼び名があります。この呼び名は、私たちお坊さんにはしっくりくるのですが、世間では知られていません。

そして、住職は答えました。「私はこう思っています。これからたくさん、新命さんと接するでしょう。接した人たちが、彼を、お寺の次の世代だと、多くの人が認めたとき、自然と呼び名が決まってくると思っています」と。

新命さん、副住さん、和尚さんとなんでも結構です。どうぞ皆さん声をかけていただければと思います。

（陽岳寺新命 合掌）

No.119 かんかんのう

陽岳寺護寺会便り 平成23年1月1日No.119 かんかんのう

成田山不動寺のご開帳が、文政四年(1821年)に深川永代寺であったとき、唐人踊りの見世物が催されました。

この唐人踊りは、一気に江戸中に広がったということです。この唐人踊りの歌が、「かんかんのう」という歌でした。

「看々那(かんかんのう)九(きゅう)連子(のれんす)九(きゅう)九連子(はきゅうれんす)。九九連々(きはきゅうれんれん)三叔阿(さんしょならへ)財副備官様(ざいおほうにかんさん)……………」

歌の文句は、ちんぷんかんぷんですが、同じ年に、両国に見世物として出され動物がひとこぶ駱駝(らくだ)で、ユーモラスと異国情緒をあおり、全国に面白おかしく広がっていったと思われるのです。やがて、庶民は、大きくのっしりとした人を、「らくだ」と呼ぶようになり、落語「らくだ」が誕生したのでしょうか。

落語に登場する”らくだ”は、名前を馬という男ですが、物語に登場がすでに死体ですし、題名があだ名ですから、考えてみれば斬新な落語でもあります。

死んだらくだの生き様は、登場人物によって語られるだけです。語り部は、屑屋の久六、やくざの半次、びんぼう長屋の月番である下駄の齒入屋、家主、八百屋です。

お話しは、面白おかしく、大笑いしながら、月番に香典を集めさせ、大家からは酒と、どんぶりに大盛りの煮染めに飯二升、八百屋からは菜漬け用の四斗樽を棺桶として、天秤に荒縄をせしめます。

二人で通夜をしてどんちゃん騒ぎながらも、朝方まで語り明かすも、翌朝、二人が棺桶を落合の焼き場まで担いで行くのです。しかも、到着した落合では、古樽だったので底が抜け、死体を落としたことを告げられ、探しにもと来た道を戻ります。ようやく見つけたものの、見つけたらくだは間違えの願人坊主の酔っ払いで樽に詰めてしまいます。落合で火葬しようと火を点けたところで、落ちになります。

笑いながら、三遊亭円生のCDを聞きながら、今だったら、きっと”らくだ”を見つけた人は、福祉事務所や警察に電話するだろうなどと考えてしまうのです。その後はどうなるのか、気にはするものの、日常のあわただしさに追われて、いつしか忘れられることでもあるのでしょうか。

江戸末期より明治に至るこの時代、今の時代より、もっともっと住まいも、モノの少なさ、種類の少なさ、不便さも、比較にならないほど貧しかった時代だったはずだ。

それにしても、落語の話ではあるものの、この時代の世界は、なんと生き生きしていたのだろうかと思います。だいたい死体を背負い起こして、「カンカンノウ キュウノレンス」と踊らせることが許されるというのか、その許すという点を突破した人間の自由さ、おおらかさをです。今の笑う自分を考えてみると、虚しく思うことでもあります。もっとも創作の世界ですが……。

らくだの財布の中身は年中からっけつで、長屋に住んでいながらも、住人とは、嫌われて、怖がられる存在。生きて係わっていた人は、らくだの死に、赤飯を炊いて喜ぼうとするものの、らくだの最後にささやかな長屋生活の庶民の花を咲かせています。

半次と久六は、酒を飲みながらも、立場が逆転するさまは、庶民の逆襲のようであり、ここにおいて半次と久六は同じ立場となります。久六は、半次に言い付け、同じ棟の店子の女房からカミソリを仮受け、らくだの頭を剃りあげ旅立ちの準備をします。しかも、その剃り上げたことが、翌日の願人坊主(がんにんぼうず)との取り違えに発展するから、見事な伏線です。

ちなみに願人坊主とは、宗派本山に僧籍を持たない僧侶の姿をした人で、当時は、怪しげな旗を立てたり、施主に変わって願掛けや水垢離をしたり、お経を読んだりもしたのでしょうか、穴を掘って暮らしていたとも言われますが、今の時代なら、どんな穴になっているのでしょうか。

三遊亭円生の通夜。

《そのらくだは、買え買えと、「狸の毛皮一枚を買わないか」と、こう言ったことがあるんです。何度も煮え湯を飲まされながらも、そこには、貧乏根性があるのか、狸の皮なら儲かると、のった私が悪かった。買うならすぐに手付け五百をよこせと、狸の皮を見せるのが先だと、すったもんだをくり返し、男は度胸だと出した五百。

その五百をもぎ取り、らくだは外に、買ってきた酒と肴で、「さあ飲め、食え」で、酒にありつけて「有難てえ、有難てえ」と。

そのうち狸の皮を思い出し、らくだにせがむと、らくだは、畳を上げ根太をはがして、「ここにあるから見て見ろ」とらくだが言う。縁の下をのぞき込むと、らくだが、久六の頭の上に畳を敷き、ドカツと座って、久六は床下で動けない。「馬鹿なことしちゃいけない。どこにあるんだ」と。

らくだは、「お前の前にある。長屋に年古く住んでいる狸がお前の前にいる。二、三間先に穴があってそん中にいるから、そいつを穴から出してトツつかめえて持って行くんだ」と。「生きていちゃイヤだ」というと、「こう言うのを捕らぬ狸の皮算用」てんだ、お前を出すには、あと金五百よこせ」と、とうとう半次さん一貫を不意にしちまった。》

古今亭志ん生の演じた、通夜。

《心一、親方、あんたも偉いね。それでこそ兄弟分てんだ。金があって葬式出すのはだれだってできらあ。なくて出すんだ。仏になったやつを悪く言いたかないが、らくだってやつはひどいね。こないだなあ、左甚五郎の蛙を売るってんだ。さすが甚五郎だね、良く出来てるね。これなら十円で買うってたら、売るって俺の手の上に置いた。生きていやがる。チクショー。

もっと（酒）注げよ。釜の蓋が開かないだろうって？ 冗談じゃね～や。雨の二日や三日振ってもなあ～、おう、家族を飢えさせる久六さんじゃねえんだよ。見損なうな。このお酒はおめえ一人でとった酒じゃねえぞ。ケツを上げろい。てめえのケツじゃねえんだ。徳利のケツをよ。こんなしみつたれた大家の家から来た煮メだけじゃあなく、魚屋行ってマグロの中トロのブツでも持ってこい。いやだのと言ったらカンカンノウを踊らせる、と言って持ってこい。》

桂文珍のらくだは、半次が脳天の熊五郎に変わって、紙屑屋との通夜。

《熊五郎が、山水画の雪舟の鼠が手に入ったという。それを買えという。そんな鼠が手には入ったら、わて、買いますわという。生きた鼠を手に乗せられました。

今の紙屑屋になった顛末を、すべて酒のせいで貧乏所帯になった話しは始める。日常の生活の中の情愛を語る紙屑屋に、熊五郎はすっかり聞き役にまわり、うつむいて泣く熊五郎に、兄弟になって二人してらくだの湯灌をし、ひげを剃ろうとするが、カミソリがない。この先の店子に娘三人が暮らしているから、そこで借りてこいと。貸してくれなかったららくだを連れて行って、カンカン踊りをしてやるぞと下げる。》

立川談志は、この通夜に独特の人情を添えます。

《久六が酔うほどに、怒り、悔しさ、情けなさ、必死さ、涙と笑いを誘いながら、ある時、通り雨がやってきて雨宿りを二人でしている時がありました。

すると、らくだが、「この雨を買え」と言い出して、「そんな出来もしないこと言わないでくれ」と、いうつもりで黙っていた時のことです。あたしが黙っていますとね、何を思ったんでしょうね。らくださんがあたしの頭をコンとこづいてね、その後、じっと雨をみつめているんですよ、あのらくださんが。寂しかったんでしょうかね、らくださんも。》

通夜で語る、らくだと屑屋の行状。酒が入ったとはいえ、そこに小市民的な久六の思いと無法者のらくだがあぶり出されています。そして、庶民の通夜やしきたり、野送りの姿を原型として彷彿させるのです。落語の、人の不幸を、こういう形であぶり出し、笑いにするすごさに敬服します。

今年もよろしく願い申し上げます。

◎正月は誰にでもやって来るモノです。その正月に一休禅師は、歌を創って人に渡したそうです。門松や冥土の旅の一里塚 目出度くもあり目出度くもなし

No.120 『断捨離』のすゝめ？

陽岳寺護寺会便り 平成23年1月1日No.119 『断捨離』のすゝめ？

2011年のお正月は、2010年の8月に鎌倉・円覚寺から、東京は深川の陽岳寺に帰山して最初のお正月。年末、年始と多くの方が墓参にいらっしゃいました。その際、私は副住職として、これから宜しく申し上げますと申しあげました。皆さんから、あんなに小さかった子が大きくなって・・・、今年も宜しく申し上げます、護寺会便りを読みましたよ！また、新命（しんめい）さんって呼ぶんですね！との言葉をいただきました。皆さん読んでくれているんだなと嬉しく思い、また、住職がこれまで連綿と続けてきたことの意味を考えさせられるのでした。

今回も住職が年賀状の文面を考えていました。

昨年末、新聞の川柳や投稿欄を見ていると、年賀状についてのもが多く見られました。

『年賀状 生きてる証に 投函し』

これは第23回サラリーマン川柳にあったものです。

まるで年賀状は「元気で生きていますよ！」という安否確認手段のようです。やめようと思えば、やめられることです。

それでも、手をつなぎたい、つないでいたい。そう思わせるものは、いったい何でしょうか。

陽岳寺の法要の回向に「生まれれば縁が広がり、亡くなれば、また縁が広がる」とあります。

生きることは、命とは、生きるためにあるのだと思います。なんびとたりとも、その生を邪魔することなど出来やしないのです。たとえ臨床の立場から死んだのだと判断されても、その人を知る人々の心のなかで彼（女）は生きています！

縁あって、鎌倉の円覚寺専門道場にて、3年4か月という時を過ごしました。年賀状を出すことは叶いません。3年もの間、誰とも連絡を取らずにいたので、元日わたしに届いた年賀状の枚数はたったの1枚。さすがに寂しかったです。

つながりがバツサリ断ちきれていた結果なのだろうと。こうして縁は薄れていくのかと、しかし復活する縁もあるだろう。切っても切れない縁もあるだろうと、思ったのでした。

2010年の新語・流行語に『断捨離（だんしゃり）』という言葉が選ばれました。

最初にこの言葉を知ったとき、仏教用語かと思ったのですが、どうやら違うようでした。断捨離とは、ヨガの「断業」「捨業」「離業」という考え方を応用したもので、自分にとって不要なモノを「断」ち、「捨」て、モノへの執着から「離」れる。

単なる整理術ではなく、身辺を整理することで、そこから更に心も整理すること。10年ほど前、金沢市に住む主婦が提唱したものだそうです。

この『断捨離』という考え方は、インターネットで普及しはじめ、今ではテレビ番組や雑誌で特集をされるほど。私の見たNHKクローズアップ現代（2010/12/16放送）では、「片付かない部屋の断捨離」と「親の遺品の断捨離」について放送していました。

「片付かない部屋」にたまった物を整理していく夫婦、「親の遺品」を数カ月かけ片付ける娘にカメラを向けていました。

子供服にしても、本にしても、遺品にしても、そのものに対する思い入れ・親子や家族の物語・自己投影の結果があるのでしょう。

そっとしておきたい自分がいて、片付けられなくて、そのままにして置いてある。いつかはやろうと思っていても、それが出来ない。

断捨離は、物を捨てるだけではない。その心が正されていないのだから、片付けられず、物が集まっていくばかり。物を整理することで、心の整理もしてしまおう。執着を取り払ってこうと考える。過去の後悔・未来の不安にとらわれ、家の中には物があふれる。今の自分には必要ないものたちばかりなのに、片付けられないと嘆く。

そして、片付けたいことは物だけではなく、人間関係にも及ぶのだとか。

人間関係の断捨離とは、どのようなことでしょうか。縁を切ること？執着を持ってはいけない、自分にとって必要ないものならば縁を切ってもいい、という自己本位な考え方ではない！と思います。

仏教では、諸行無常・諸法無我・涅槃寂靜を教えの特徴としています。そして、無常・無我の世界に、常住や自我を追い求めるために、苦しむ。過剰な執着を良しとしません。

しかし、その執着も縁なのだと思います。「こだわり」という縁です。

片付けられない部屋も、遺品も、心からのこだわりを「捨てる」「無くす」「消す」のではなく、「大切にする」「意識する」「思い出す」「思いなおす」ことで認めてあげる。断捨離は縁の仕分けではなく、物と向き合うことによる自分との会話なのでしょう。

遺品との会話は、先に逝った懐かしい人たちとの会話、そして自分との会話。それは、遺品ではなく、思い出でもいいはずです。「こだわり」も受け入れる。とらわれてもよいではないか！

生まれれば縁が広がり、亡くなれば、また縁が広がる。そう考えると、人はなかなか死ねないのだとも思います。

昔はあったかもしれない繋がり。バツサリ断ちきれていたとしても、それは無くなったのではなく、薄れているだけのだと考えます。別の道からの縁もあるでしょうし、以前よりも太くなる縁もあるはずです。

縁あって自分が今ここにいる。縁あって自分がここからいなくなる。

お骨の有無にかかわらず、お墓参りにいらっしゃる方々を見て、先に逝った親しい人たちの命は、今ここに生きているのだなと。千の風はそこかしこに、みな平等に吹いているのだなと思ったのでした。

49日忌法要の回向には、こうあります。「人と人とのあいだ、縁とは、根拠、相即といえるものでもあり、抛り所といえわかりやすいでしょう。だから、貴方から私へのあいだは途絶えてしまいましたが、私の貴方へのあいだは、途絶えていないのです」と。

人は生まれながらにして、貴賤の上下などありません。しかし自分がたくさんの人に守られ、支えられていながら、そのご縁に感謝をしない。自分の満足したいが為にご縁を破っていくのはおかしい。縁を大切にしない人は、ずっと縁を気付かず暮らしていくのでしょうか。

それでも自分で命を「断」つことはできても、つながりは自分では「絶」つことができない。そう信じています。陽岳寺ができることとは何なのだろうと思います。

学問のすすめでは、学問（さらに言えば実になる学問）の実人生にたいする影響力を述べています。『断捨離』のすすめとは、自分にとって不要な物だと断ちっぱなし、捨てっぱなし、離れっぱなし、～っぱなしにするのではなく、ひとつひとつの縁を大切にすること、受け入れることなのだと思います。

護寺会員の皆様からの年賀状を一枚一枚見ておりますと、住職、母宛とともに、副住職宛ともなっている年賀状を見つけました。昨年、護寺会便りをお送りしてよかった、副住職として私のことを認めてくれているのだなと、嬉しく思いました。ありがとうございます。

今年こそ、よい年であったと、誰もが言えるような、そんな一年の箇であることを願っています。

（陽岳小副住 真人合掌）

陽岳寺護寺会便り 平成23年3月1日No.121あるの、ないの、それとも……

谷川俊太郎の詩に、『黄色い鳥のいる風景～ポール・クレーの絵による「絵本」のために』があります。

とりがいるから そらがある
そらがあるから ふうせんがある
ふうせんがあるから こどもがはしってる
こどもがはしってるから わらいがある
わらいがあるから かなしみがある いのりがある ひざまずくじめんがある
みずがながれていて きのうちときょうがある
きいろいとりがいるから すべてのいろとかたちとうごき
せかいがある

この詩を読むとき、「鳥がいるから、空がある」と、実は、「つながっている」と詩を書いている詩人こそ、ものがたりを想像する、それは、つなげていることに気がつくでしょう。しかも自由にです。

でも「鳥がいるから空がある」とは、普通書かないのではないかと思うのです。「そらがあるから、とりがいる」と……。

鳥の進化の歴史からは、空があったから、何ものかが鳥となったはずです。谷川俊太郎という詩人は、そんなことお構いなく、結びつけてゆくことを遊んでいると、思いませんか。しかもまったく自由にです……。

人は世界とつながりながら、自分自身を存在するモノとして意味づけているともいえます。意味づけなければ、人は生きていけないとも考えることができます。世界で起きている出来事を見ているとつくづく思うのです。独裁者がいるから自由が欲しいのであり、自由ばかりだったら、もしかしたら、強烈に導いてくれる指導者が欲しいかもしれせん。

だからこそ、「すべてのいろとかたちとうごき せかいがある」と、谷川俊太郎の詩はここから先は、読者のイメージに任せています。

現実のつながった世界は、心ともいえるものです。現実には、憎しみやねたみがあり、保身や欲望があり、自我を強大にした結果、戦争があり、多くの善良な人の死もあることは歴史の事実です。

さらに、つながった世界を見れば、死後もあるのだと思いたいし、死後のその後も、ずっとつながってゆくことに気づかないでしょうか。極楽も天国も地獄もです。

でもこれは、自由に在るでつながったことで、かえって、人を不自由にもたらしつつあるわけです。仏陀釈尊は、もしかして、そんなことを考えたかどうか、解らないけれど、存在と所有

という問題に道筋を描いてくれたと思っています。

そのつながりを考えてみると、心の世界では、選択であり束縛あり、意味と無意味、価値と無価値、もっといえば、善いことと悪いこと、幸福と不幸、死と生、順逆の関係の中に、よくいう自由とは、何と自分に対して責任を問うことかと思うのです。

意味づけは、評価という形で表現することもできます。その評価に一つでも傷がつけば、その傷を多数の人は問題にします。自分でその傷を消そうとすれば、その世界からアウトしなければ、傷は消えないこともあります。しかも、評価の履歴はその世界に入会したときから記録となり、まるで、その人物を意味づけています。評価の履歴こそがつながっている人であると意味づけるからです。

インターネットのヤフーやAmazonドットコムにしても、その評価が自分の価値を意味づけてくれることに気づきます。

考えてみれば、怖いことでもあります。意味づけられた私は、私であって私でないからです。なぜなら変わり続けることを本質とするならば、一瞬の今を生きる私は、過去の私や未来の私ではないはずだからです。

そんな価値を保つことを考えてみれば、つながっていることが不幸になることもあります。それは、人の価値こそが、インターネットの世界に生きる財産だとしたら。例えば、今流行のフェースブック、何億という人間がフェースブックの中でつながることを意味あることと、自分の価値を築こうとしているからです。その価値に縛られることになります。人生は相対的なつながっている世界に生きるゆえに、得たり失ったり、保守や革新、富や貧富、その結果が歩みであるかのように。

そのつながった歩みの悲喜こもごもを、般若心経では、縁起はないのだと否定しています。本来縁起はないとです。悲喜こもごも有ると思っていることは、本来無いのだと、これは仏陀釈尊と、深く般若波羅密を行じた観世音菩薩の言葉でもあるのです。

さて、仏教はもう一つの見方を提案しています。

「とりがいなかったら そらが無い」、「そらがなかったら ふうせんがない」です。

でもです。在ると無いに共通する心のはたらきは、無いと在ると心に画いたモノであるならば、これも意識による意味づけです。在るということ、無いということ意識において持ち続けることこそ、無明あるいは無知と仏教はいいます。確かに初期仏教では、無いことを求め続けて涅槃にたどりつくことを考えた人々もいました。でもそれでは、自由さも無くなってしまいます。自由とははたらきだからです。怒ったり、笑ったり、喜んだり悲しんだりという自由さ、しかも、その怒りや笑い、喜びや悲しみとらわれない自由さこそ、禅の目指す道であり、般若心経の教えなのだと思います。

「わらいがあるから かなしみがある いのりがある ひざまずくじめんがある」と。

実は、谷川俊太郎は、何も無い、真っ白なキャンバスに、言葉で鳥を描き、空を画き、風船を画いていることに気づきました。

そう、最初は真っ白な、何も無いモノに在る、あるいは、居ると書き付けていることです。何も無いトコロに、空という、無というところから、在ると居るが浮かび上がり、紡がせているモノは、存在でしょうか。存在だとしたら対照的な事物なはずです。

自由につながっている世界は、もともと何もかも束縛されない世界であり、対象として捉えることができないモノのようです。あえていうなら真っ白なキャンバスと。

しかもその真っ白なキャンバスには、たくさんのモノが書いてあるけれども、谷川俊太郎が創作したこの詩を読むことによって、浮かび上がってくるような、初めから私の心は「わらいがあるから かなしみがある いのりがある」と、真っ白なキャンバスには描いてあるような気がするのです。しかも、在ると居るで、つながっているものは、もっと考えてみると、空間だけではなく、時間もつなつながらっているし、歴史も含めて記憶や行為まで、すべてつながっていることに気づきくのです。だからこそ、すべては自由につながっている。空であり無であることが前提となっているのではないのでしょうか。だから、どうせ描くなら、与えられた善いことをたくさんたくさん描きたいものです。真っ白なキャンバスのはたらきとしてです。（住職）

◎寒さと暖かさが互いにせめぎ合いながらも、春彼岸を、迎えようとしております。

お彼岸は、3月18日(金)から24日(木)までで、21日が彼岸の中日です。

陽岳寺護寺会便り 平成23年3月19日No.122東北地方太平洋沖地震 回向

地震から数日、テレビでは、社団法人ACジャパンのCMばかり流れています。ホームページを見ると、全国・支援・地域・NHK共同キャンペーンとキャンペーンごとに種々CMがあり。地域によって、流れるCMが違うんだそうです。

種々、CMが放送されているわけですが、「見える気持ちに。」「こだまでしょうか」からそれぞれ詩を引用させてもらいました。

ACのCMをみて、回向文をつくりました。回向とは、自分が積み重ねた功德を相手にめぐらしふりむけて与えることです。そのために読む文を回向文と、ここでは言います。お経と回向は、セットになっているのです。

東北地方太平洋沖地震 回向-思い祈り願い、般若心経を読む

2011年3月11日金曜日の午後3時前、東北地方太平洋沖で、1000年ぶりといわれる巨大地震がおきました。いまま余震がおこり、日本だけでなく世界全体が注目しています。

今回の地震では、揺れだけではなく、津波の被害も甚大でした。10mをこえる津波が各所を襲いました。津波が、海や川から陸地へと向かっていったのでした。

港や防波堤をこえ、土砂や車、家々を巻き込み、黒い津波となって、いたるところを呑み込み、浸水したのでした。人々は建物や高台などの高いところに逃げ、津波を知る・知らずに関わらず逃げ遅れた人々がたくさんいました。地震と津波で交通が分断され孤立する場所がたくさんありました。海や川をただよい、たどりつく人々もいました。先に逝った親しい人たち、安否不明の人たち。

そこから離れた場所では、電車がとまり、建物や道路が倒れたり、壊れたりしました。遠い家まで歩いて帰る人たち、帰れない人たち、ガス・水道が止まり困る人たち。

連日、テレビやラジオでは被災地の様子が放送されています。

被災地の光景を実際目にしたら、わたしたちは何を考えるのでしょうか。すべてを為す気がおきず、どうしていいか分からず、ぼんやりとしているのでしょうか。

テレビやラジオで被災地の様子を見聞きして、わたしたちは何を思うのでしょうか。しばらく経ち、ふと我に返って、心配になって、自分を忘れて、不安に振り回されて、目的もなく、本能のままに、衝動的に動き回るのでしょうか。

自分の意志で、自覚した心で行動することが、いかに難しく、大事なことなのか。空しさを埋めようと、ただひたすらに、やみくもに行動するから、自分でも收拾がつかなくなるのでしょうか。不安にかられ食べ物の買い占めに走り、デマに惑わされる。空しさにさいなまれる。なぜあの人はいなくなり、なぜ私は生きている。

その空しさは、形ある物はいつか壊れ、移りゆくことに気付かされた証なのだと思います。人

が空しさを感じることは、人生を歩むことです。そして次に、心の空しさを感じ、その心の空しさを充たすために必要なことはなんですか。

心とは、よりどころがなく、かといって決して無いとはいえないもの。あるようでない、ないようであるのが、心なのだと思います。

その心の空しさを、どうにかしたい。正しく充たすためには、どうしたらいいのでしょうか。

詩人の宮澤章二さん作で、ごま書房新社が出版している「行為の意味—青春前期のきみたちに」という本の中に次のような詩があります。

「こころ」はだれにも見えないけれど

「こころづかい」は見える

「思い」は見えないけれど

「思いやり」はだれにでも見える

仏壇やお墓は、祈り願う場所です。しかし、その祈りや願いは届くことはないのでしょうか。それならば、祈り願うわれわれが、私たち自身の祈りや願いを聞かなければならないのかもしれないかもしれません。

「こころ」「思い」はだれにも見えません。それでも、祈り願わずにはいられないのは、空しさを充たそうとする「こころ」「思い」によるのでしょうか。そして、その「こころづかい」「思いやり」という行為として、だれにでも見えるとき、その空しさは、気づきや確信によって心が充たされ、心の中に生きるということになるのだと思います。

般若心経とは、心を学ぶお経です。「こころ」「思い」の本質とは、空しさを感じ、さらに空しさを生きることなのだと思います。

仏壇やお墓だけが、祈り願う場所とは限りません。あなたが思うところは、いつでも、どこでも祈り願う場所になります。テレビの前も、ラジオの前も、布団の中も。

「こだまでしょうか」という詩があります。詩人の金子みすゞさん作です。

「遊ぼう」っていうと

「遊ぼう」っていう。

「ばか」っていうと

「ばか」っていう。

「もう遊ばない」っていうと

「遊ばない」っていう。

そうして、あとで

さみしくなって、

「ごめんね」っていうと

「ごめんね」っていう。

こだまでしょうか、
いいえ、だれでも。

ことばは、人から人へと「こだま」します。ことばだけではなく、祈りや願いも「こだま」します。

先に逝った親しい人たちは、わたしたちに、ことば、祈り、願いを届けてくれるのでしょうか。教えてくれるのでしょうか。自分の意志で、自覚した心で、ことば、祈り、願いを行動することが、心の空しさを正しく充たすことなのでしょう。

それでは、これから般若心経をお読みします。東北地方太平洋沖地震で亡くなられた方々、被災し避難している方々、自衛隊員、警察、消防、ボランティアの方々、津波にも地震にも遠い場所で生活している方々。日本、世界のすべての人のためにです。みんなの、みんなにより、みんなのため、ご冥福、ご多幸、ご無事をお祈りいたします。

読経 般若心経 (副住職)

陽岳寺護寺会便り 平成23年4月1日No.123

あの地震からテレビやラジオでは、ACジャパン（旧・公共広告機構）によるCMばかり放送されています。3月末になって、やっと震災に関連したキャンペーンがはじまったようです。ACのホームページを見ると、全国・支援・地域・NHK共同キャンペーンとキャンペーンごとに種々CMがあり。地域によって、流れるCMが違うんだそうです。

種々CMが放送されているわけですが、CMで使用されている詩を引用して、陽岳寺は回向文をつくりました（宮澤章二さん「行為の意味」、金子みすゞ「こだまでせうか」の詩）。

回向とは、自分が積み重ねた功德を相手にめぐらしふりむけて与えることです。そのために読む文を回向文と、ここでは言います。お経と回向は、セットです。こういうかたちでお経を読んでもいいと思います。

そして、その回向文をNo.122護寺会便りとして、お彼岸で墓参にいらっしゃった方々にお配りしました。

春彼岸号をお読みにになりたい方は、墓参の際、寺の者に言ってください。または、陽岳寺ホームページより掲載ページを閲覧してください（URL:<http://www.yougakuji.org/>）。

被災地の安寧と復興を念じ、般若心経を読む（東北地方太平洋沖地震回向その2）

東北地方太平洋沖地震で被災された皆様、関係者の皆様には謹んでお見舞い申し上げます。

あの日から、それなりの日数が経っていますが、日本列島全土に渡り余震は続いていますし、原発は白煙を吹き出し続け、停電・放射線についての情報が続々と入ってきます。関東以外の営業所の機能を強化する企業や、関東から遠くへと疎開する人々もいると聞きます。

それでも、我々は「きっと、そのうち何とかなるだろうし、なるようにしかならない」と自分自身を説得しようとするのだと思いますが、「テレビや新聞を見ていても、どうも良くなる感じがしない」と、鬱々とした気分の方も多はずです。

私たちの住む町は、日本は、このままどうにかなってしまうのではないか？東北・関東地方全域という広大な被災地の復興は、いつかは解決するんだろうと楽観的に思う気持ちもありつつ、漠然とした不安が心のどこかに沈んでいると思います。

さて、テレビや新聞によって、巨大地震という想定外の事態を憂い、社会には不謹慎、自粛ムードがじわじわと広がっているように見えます。

しかし、スッキリとしない心持ちのまま、心配や不安にさいなまれてまで、「我々には一体何が出来るのだろうか！」と考える必要はあるのでしょうか。『義援金の寄付、ボランティア、献血、節電、買い占めはやめよう、日本経済を潤そう』といった言葉に、あなたは協力しなきゃいけないな、何かをすべきなのだが、と感じていませんか。

おのれこそ おのれによるべ

おのれを措きて 誰のよるべぞ
よくととのえし おのれにこそ
まことえがたき よるべをぞ獲ん

これは、法句經にある言葉です。この言葉は、「私自身にしか私を救えず、この私を置いて誰が私を救えるだろうか、よく制した私しか本当に私を救ってはくれない」と、いいます。

「私のことは私が一番よく知っている！」と、思っている、テレビで被災地の様子を見続け、スーパーやコンビニで買い急ぐ人々を見続ければ、人知れず自分知れず「小さな不安・心配」はつものっていくのでしょうか。いくら自分で自分が正常だと思っても、それは本当でしょうか？はたから見ても分からない。まして、自分でも分からないものです。

私はお悟りを得た、と言いつつ輩を貴方は信じられますか。ただちに影響はない、という言葉は貴方は信じられますか。私は大丈夫だ、と言う自分を貴方は信じられますか。

信じるのも、疑うのも、心です。心とは、よりどころがなく、かといって決して無いとはいえないものです。あるようでない、ないようであるのが、心なのだと思います。

地震によって大きく揺れうごく大地に触れ、私たちの心も揺れうごきます。海から大地へと大きな波が押し寄せるように、心には不安・心配といった様々な波が寄せては返すのです。

そんな自分自身の揺れる心に触れたとき、人は、こころの水面が波打ったとしても、次第に収まること。水中に泥や土が舞い上がったとしても、いつか水は澄むこと。底深き淵には、揺るぎない心安らかなところがあることに気付くのだと思います。

底深き淵の 澄みて
静かなるごとく 心あるものは
道をききて ころろ やすらかなり

法句經にある言葉です。この言葉は、「底の深い湖は、澄んで濁ることのないように、賢い人々は、真理を耳にしているがゆえに自分自身の心を澄み沈めている」と、いいます。

地震や津波、報道によって、怒り・悲しみ・恐れといった感情がこころ波打ちますが、揺らす心は自分自身なのだと思えば、私には沈める心もあるはずだと気付きます。

心中がざわめき、よどもうとも、いつか心を冷静に見つめ正せば、なごみ、安らぎ、穏やかな心があることに気付くことができます。

哲学者・西田幾多郎氏の短歌に『わが心深き底あり 喜びも憂いの波も とどかじと思う』とあります。

想像もつかない人の心の奥深さを考えてみれば、我々はみな仏の心・無心を持っているのではないかと思うのです。底の抜けた先があると。無心とは心がないことではありません。

般若心經とは、心を学ぶお経です。

人は、般若心經の核心である、仏の智慧を対照的に悟ることはできません。ですが、その仏の智慧を生きることはできます。なぜなら、この世界で私が生きて、その同じ世界の中で、他人と交

流し、相い支えあって、そのすべてが、空を本質としているからです。

どこにも、本体をもつような存在はなく、すべてがつながっている。しかし、その繋がっているものを対象化して見れば、世界は固定されてしまいます。

般若心経の心とは、ただ生きることです。ただ一瞬一瞬を生きることです。ただひたすらに生きていること、きっと、それは自己が創り出した不安や恐怖を忘れることでもあると、気づくでしょう。

だからそんな自己が創り出した不安や恐怖に降り回されずに、大きく深呼吸することで、空っぽの心を私に訪れさせることも大切なことだとわかるでしょう。自分自身から逃れることができないことがわかったら、心の本質を学びましょう。『般若心経』の根本的な視点です。

1000年に一度という地震が起きて、テレビや新聞で被災地が、原発がと、日々刻々変化して報道されます。そのたびに私たちの心は揺れます。そんな揺れる心に従うことを知れば、少しでも安らぎが取り戻せればと思います。一瞬一瞬をひたすら生きるなかに、世界は仏心で溢れるでしょう。

それでは、これから般若心経をお読みします。2011-03-11東北地方太平洋沖地震で亡くなられた方々、被災し避難している方々、警察・消防・自衛隊員、ボランティアの方々、津波にも地震にも遠い場所で生活している方々。日本、世界のすべての人のためにです。みんなの、みんなにより、みんなのため、ご冥福、ご多幸、ご無事をお祈りいたします。みんなが助け合い、一生懸命に生きる姿から、改めて日本の素晴らしさに気付いた人は多かったはずです。そんな日本に住む我々だからこそ、必ず立ち上がれると、日本・被災地の安寧と復興を念じおります。

<読経 般若心経>

(陽岳小副住 真人合掌)

○彼岸、また終わった後にも、多くの方が墓参に来てくださいました。家の中に閉じこもるのではなく、お墓にお参りする功德とは、祈りですが、「とんでもないことが起きたね。だいじょうかい。ありがとう。そばに居るからね。ありがとう」と、こんな声を聞きたくて、もしかして、お墓参りをしたのではないかと思っています。

この地震で陽岳寺に大きな被害はなかったものの、多くの墓石が、地震に揺らいたようです。さお石や台石がほんの少し動いたもの、目地が取れてしまったものもあります。

今、石屋さんが調べています。中には台石をはずして石を据え直さなければならないものもあるそうです。次にも被害を出さないように、どうしたらよいかを考えております。早急に結論を出して、お知らせ致します。

陽岳寺護寺会便り 平成23年5月1日No.124

飯を食え、食い終わったら茶碗を洗っておけ！

今年も見事に、福島の上春の滝桜が咲いたと、新聞に写真が掲載されていました。東日本の誇る桜です。季節は大震災に被災された地域にもかかわらず今年限りの桜の到来を告げていました。

一方、東京の遅咲き桜は散り、若葉を繁らせ始めています。

咲く桜、残る桜も、散る桜でしょうか。季節にうながされて咲くのか、咲くことによって季節が生じるのか、いやいや同時と、考えさせられますが、人の思惑も同時に咲き、散ります。私と世界の入り組みに混濁しながら人は生きていきます。

我を忘れて桜に見入り、その桜そのものとなる。そのうち桜も忘れて、只たたずむ自分がいることに気づくこともあるでしょう。桜を見ながら食事をして、その食事を忘れて桜を見ていることも忘れることもあるでしょう。

桜もきれいだし、食事もうまい、一緒に見に来た仲間たちも喜んでいてと思うこともあるでしょう。

震災そして原発に汚染された地域で生きるお年寄りのインタビューに答える言葉を聞いて心が傷む。

「私はこの家で死にたい。この地域から離れない」と、枯れた涙が流れる。無人となった家や地域に、孤立を選択させるものは何なのか。震災そして原発に汚染されたことで咲くお年寄りの花は、死なのか、生きる希望の喪失か、余生・与生・預生とは何かを考えさせられる。

しかし、本当は、その生が誰に与えられたかなど、考える必要はない。人によっては、神や仏、家族、祖先や血筋から、民族や山河からと意味を見出す人もあるだろうが、それはそれで思うことは自由だし、比較して考えることも自由だ。だけれども、比較し意味を見出したモノからみると、生を奪うことも生じてくると、人は悩むこともあるし、与えられたモノに従属してしまうから厄介だ。預かった預世（よせい）もまた同じことだろう。

それでもその家で、その地域で、孤立しながらも人は生きている。

平成23年の3月11日の東日本大震災と津波、そして福島原発の災害から、季節は刻々と変化しています。困難な状況に不安と恐怖に悲鳴を上げる被災者たちの様子をテレビや新聞、また実際に炊き出しに行き、生活必需品を届けに行った人々の声を聞けば聞くほど、痛ましく思える。何かできることはないかと思いつつも、季節は変わる。

被災者の一人一人が、個別の悩みを抱えながら生きている。全体を見渡そうと思えば、個が消えて、個を思えば全体がかすむ。それでも何とか頑張っただけ欲しいし、無理をして欲しくもないし、明日はどうなるのだろうかと思われ、不安に駆られる。人は生きるしかない。

ふと、「衆生病むがゆえに、我もまた病む」の釈尊の言葉が響きます。私は釈尊ほどの人物ではないし、大それた悟りを持つなどと、とうてい思えないけれど、被災された人や地域を考えるだけで、「我もまた病む」と、同じ気持ちを持つことに気がつきます。

人だったら、誰もが持つこの「病む心」、もちろん、釈尊仏陀の病みとは、格段に異なるものだろうが、病むこと自体は同質なものだろうと、そこに、釈尊仏陀は居るのだと。自分の心の中に生きている。

仏教の解説本を読んでいると、釈尊には「自分」「我」がないからこそ、我もまた病むという心が生じると説明されています。無心とか空の心こそ、釈尊仏陀の心なのだと。

その無心と生きることについて、禅の語録は、何と自由さがあふれて、言葉の魔力に引きつけられることが多いでしょうか。もっとも、その言葉から生きる勇気をもらいます。

修行僧が趙州（じょうしゅう）禅師に尋ねた。「私の自己とは、どう考えたら、そしてどんなものでしょうか」

趙州禅師は尋ねた。「ご飯はすんだかね」

修行僧は答えた。「すみました」

そこで、趙州禅師は答えた。「すんだら鉢を洗っておけ」

さらに、臨済（りんざい）禅師は、日頃、みんなに語った。

『禅はあれこれ思案し造作を加えたりしようがない。ただありのままに在りさえすればよいのだ。衣服を着て、ご飯を食べ、糞をしておしっこをする。疲れたら横になる。愚かなものは私を笑うが、智者ならわかるであろう。古人も「外に向かって工夫をなすは、皆、愚か者だ」と。』

これらの言葉通りに私たちが行為するとすれば、雲泥の差があるかもしれません。飯を食べるときは、飯を食べることに成りきれ、食べ終わったらもっと食いたい、次の食事は何を食いたいと思いをせずにとということです。お掃除をするときは、目の前の掃除に成りきることで禅はいいです。

道元禅師は、「只今ばかりが我がいのちは存するなり」と話されました。それは、今生きている自己の自覚でもあるでしょう。百丈禅師は、「自分が生を受けて、何よりも大きな不思議なことがある。今ここに、坐(生きて)っていることだ(独座大雄峰)」と。時は今、その今は過去未来さらに世界の一切を含んでの今です。

その今が、行為としてお椀を洗っておけ、洗い終わったら拭いてしまっておけ。行為はつながっているようで、つながっていない。今の連続は連なっています。連続している行為に見えるけれども、実は、一つ一つの行為は独立していて、連なっていると教えられるのです。それも同時にです。それが生きることです。

「私はこの家で死にたい。この地域から離れない」と、ご飯を食べて茶碗を洗い、服を着て、

掃除に洗濯。震災そして原発に汚染されようとも、咲く花があります。しかし、そうは思っても、人は痛ましく悲しいし、憂いを持ちながらも力強い。 （住職合掌）

◎作詞家・新井満氏が震災1ヶ月後、「そろそろ、言葉の力が必要な時期がやってくるのではないかと思っていた。一番苦しい時に人の心を癒すのは、大自然の美しさとその感動ではないか。だからこそ、“希望”という心のパン、詩は命を救う心のパンである。」と新聞に寄稿していました。

◎そして、今年の施餓鬼会では、今年の夏に僧堂から帰ってきた新命がお話をします。

陽岳寺護寺会便り 平成23年お施餓鬼号No.125

お施餓鬼では僧堂生活について話します

昨年夏、深川に帰ってきて、秋のお彼岸、ご祈祷の会、年末年始、春のお彼岸と過ぎました。5/28（土）は、私にとって初めてのお施餓鬼です。

山門大施餓鬼会は、近隣の和尚様方を呼び、陽岳寺にとって長い過去をさかのぼっての有縁無縁の亡くなられた方々を、みんなで感謝し祈りを捧げようとする集まりです。

また陽岳寺檀信徒の縁につながるご先祖様も供養しようと催される法要です。今回は、東日本大震災津波等で亡くなられた方々、被災された方々、何らかの形で被災地に添ってかかわっている方々に対しても、ご冥福や、ご無事、ご多幸の回向をしたいと思っております。

昨年、ご祈祷の会にて、挨拶させてもらいましたが、本年のお施餓鬼では、陽岳寺副住職、新命（しんめい）和尚である私がお話させていただきます。修行道場での生活についてです。皆さんのご参加をお待ちしております。

参加にて、当日に出席の方は人数を明記して、欠席の方は「欠席」と明記して、はがきか、ファクスにてお早めにお知らせください。不参加・欠席の方は、はがきの投函およびファクスとも、ご遠慮願います。参加はするけれども、当日欠席の場合、和尚が代わってお参りいたします。

参加費1万円に卒塔婆1本含みますが、追加の方は1本につき3千円申し受けます。お塔婆に戒名を記入ご希望の場合は、戒名を明記して下さい。無記名の場合は、その家の先祖代々各霊位といたします。なお、お塔婆を複数申し込む場合も、戒名または、ご先祖家の名前を記してください。

さて、何回か護寺会便りをお送りしてきましたが、まだ書いていないことがあります。それは私の僧堂での生活について、です。

私がいた僧堂は、JR北鎌倉駅から歩いてすぐ、瑞鹿山円覚寺の中にあります。そして、おとなりには、巨福山建長寺があります。昔は喧嘩が絶えず、犬猿の仲になぞらえて、建円の仲と言われたようですが、いまでは行事があるとお互いに助け合っています。

奈良の薬師寺管長であった高田好胤師が、般若心経について、こうお話しされています。

「かたよらない心、こだわらない心、とらわれない心、広く、広く、もっと広く、これが般若心経、空の心なり」

とても少ない文字数で、仏の教えを余すところなく知ることができるお経として、般若心経があります。かたよらない、こだわらない、とらわれない心。

仏教では、諸行無常・諸法無我・涅槃寂靜を教えの特徴としています。そして、無常・無我の世界に、常住や自我を追い求めるために、苦しむ。過剰な執着を良しとしません。

しかし、その執着も縁なのだと思います。「こだわり」という縁です。

『断捨離』について護寺会便りを書いたことがありました。片付けられない部屋、遺品、心からのこだわりを「捨てる」「無くす」「消す」ことは『断捨離』のウワバミでしかなく、本当の『断捨離』とは、「断捨離しなければ！」と『断捨離』にこだわる心・自分をも認めることです。

いつのまにか、「かたよらない心、こだわらない心、とらわれない心」を持たねばと、自分で自分の首をしめるかのごとく、とらわれていた自分に気付くことが大切なのでしょう。

『我他彼此』・・・がたひし、と読みます。

「我」があって「他」があり、「彼」があって「此」がある。自分と他人、あれとこれ、と物事を対立してとらえることを言います。物事が対立して決着がつかない状態のことです。

戸の立て付けが悪い状態をガタピシ言う、ですとか。ガタガタ言うな、ガタがきたなァ、という言い回しも、この『我他彼此』から来ているそうです。

我を無くしましょう、執着から離れて柔軟に生きることが大事なのだと、お釈迦様は仰っているわけですが、建円の仲と言われた姿を見たら、どのように思ったでしょうか。いまでは一緒にソフトボールをする仲にまでなりました（それが良いことかまでは分かりませんが？）。

本来は一つだけども、我見によって、対立的に見えているだけ。平安が失われているように見えているだけ。健円の仲と言われていただけ。私たちはとにかく、白か黒か、好きか嫌いかと、物事を決めたりします。自分に出来たのだから、彼にも出来るはずだ。昔は出来たのだから、今も出来るはずだ、と。きっと、そんな自分に安心したいなのでしょう。その安んじたい心はどこに？

禅宗の書物「無門関」に「達磨安心（だるまあんじん）」という項があります。

初祖達磨（だるま）大師の弟子にしてもらおうと、後の二祖慧可（えか）大師が、坐禅をしている達磨さんを訪ねました。ウンともスンとも言わない達磨さんに、自分の意志を伝えんが為、雪の中、自分の左腕のひじから下を切り落としました。そして、問答をします。

慧可「私の心はまだ不安です。どうか安心させて下さい（子は心未だ安からず。乞う、師安心せしめよ）」

達磨「では、その心というものを持ってこい。そうしたら、お前さんのために安心させてやる（心を將ち来れ、汝が為に安んぜん）」

慧可「心をさがしましたが、見つかりませんでした（心を見むるに了に不可得なり）」

達磨「お前さんのために安心させたわ（汝が為に安心しおわんぬ）」

地震は大地が大きく揺れます。でもそのあとに揺れるのは自分の心です。心が揺れるのは、自分自身の意識が、対立的にモノや意味をとらえ、考えるからです。では、その心はどこに？

何とか暮らしていた、体も病気を抱えていたが、それでも家族に囲まれて満たされていた、いい生活だったとは、意味です。何かを失ったと思えるのは意味です。意識・心が作り上げたものです。地震前までは普通に生活できたのだから、これからも普通の生活が出来るはずだ、と。

津波がすべてを流しつくした意味は？いまなお地震が続く意味は？歩いて帰らねばならなくなった意味は？戻る家を失い、家族を失い、もはや自分を知るものは自分一人だけ、となった意味は？想定外の事態の意味は？家は傾き、ひび割れ、水もガスも電気も通じない。とてもじゃないが住める状況ではない、この家の意味は？道路はゆがみ、マンホールが飛び出て、満足に歩けない、この町の意味は？そんな被災地とほど遠い場所に私が住んでいる意味は？

無縁社会、孤独死、となりに住む人の顔も知らない今なんかよりも、昔の方が安心でしたでしょうか？原子力発電所のない時代は安心でしたでしょうか？

テレビやラジオもエアコンも無い。はだか電球、晴耕雨読の生活。お風呂を沸かすにも、ご飯を炊くにも、今ではスイッチひとつですが、昔はすべて薪。消し炭を取り、七輪で野菜を煮炊きする。そんな昔の生活が僧堂では続きます。僧堂とは、生活のなかで我を無くすことに集中する場所です。お施餓鬼では、もっと詳しく僧堂での生活についてお話しします。また、老師にとんでもない質問をしたことがありました。その内容とは？お楽しみに。 （副住職）

陽岳寺護寺会便り 平成23年6月1日No.126

あちら側とこちら側

東日本大震災後、多くの人が、人が生きる意味の問いに直面したのではないかと思います。その結果、今までの普通に暮らしていた日常の普通さを疑い、物質よりも絆、友、家族の意味を再構築しようとしているようです。

去年は、無縁社会が話題になっていましたが、震災以降は、何が人を動かすのか、動かされた私に意味を見出そうとしてるようです。あの津波の映像を繰り返し目撃した者にとって、寄せては引く波に、流され翻弄されたのは、また、私たちの普通の暮らしだったのではないかとも思えるのです。

自然の驚異と、制御不能となった人間のエゴが作り出した原発の暴挙を目の当たりにして、翻弄されたものは、私の中の死ではなかったか。誰だって、あんなにむごい現実を見れば考え方や生き方が変わるものです。

そして、振り返ってみれば、自分のことを中心に考えていた自分が、いかにいたらない人間であったか、物や自分に執着し、困惑して、悩み、さいなまれていたのかに気づいたということではないでしょうか。

本当に大切な物は、何だったのかと考えることを悟らせたような気がいたします。

そしてそこから、新たな希望や願いが生まれようとしているのだとも思いますし、生きるということが問われていることでもあり、それは自分の中の死が、働きかけているといえないでしょうか。

さて、人が誕生したことは、同時に死も含まれて、誕生したといえることから、人が生まれたということは、人の死も誕生したということです。そして、同時に誕生したものは、生まれた赤ちゃんとのあらゆる関係も同時に誕生したことになります。赤ちゃんにとっては、世界の誕生でもあるといえます。世界から見れば、新しい命の誕生の祝福です。

生と死は、同時に存在していることだと、そして生は死を根拠にしてあり、死は生を根拠にしてあります。

震災により、浮かびあがったのは、この関係なのだろうと、私の中の死が、人がいかに生きるかを、改めて気づかせてくれたのだと思いました。

そんな私たち日本に向かって、アウンサンスーチ女史は、《ビルマからの手紙2011（毎日新聞平成23年5月23日(月)朝刊）》で、終わらぬ「旅」という一文を日本人へ寄稿していました。

『長年にわたる自宅軟禁の間に、私は、旅が人生ではなく、人生こそが旅なのだと思い至った。過ぎてゆく日々の中で、一日を形作る1分、1時間という時の流れには、どれひとつとして同

じものがないことに気付かされた。

人生とは、微細な変化の日常を、長い年月をかけて積み重ねながら歩いていくものではないだろうか。自宅軟禁中に日課となった早朝の瞑想の中で、私は意識をいろいろな場所にさまよわせながら、自分の住所がまさしく「旅行中」なのだと感じるようになった。それからは折々に身辺を整理し、不要なものを処分するすべも覚えた。人生そのものが旅ならば、身軽なのに越したことはない。

おとぎ話の登場人物のように、時空を超えた輪廻転生の旅の道中に自分はあるのだと思えば、有刺鉄線を巡らせた高い塀だけでなく、果てしない距離さえも飛び越えて、かなたにいる仲間と手を取り合える気がした。

終着地がどこなのか、この旅がいつ終わるのかを知らずとも、旅人たちが時空を超え、言葉や文化の違いを乗り越えて理解し合えば、心は一つになれるはずだ。

未踏の地をゆく人々には信念や勇気を盾に冒険を続けた共通体験があり、それが旅人たちの互いを思いやる心を育てるのだ。』と、東日本大震災に見舞われた人々に対し、試練を乗り越えて欲しいとエールを送っていました。

生をこちら側といい、死をあちら側というなら、こちら側の人生の旅は、すべて「旅行中」、「旅なる人生の途中」にあると読み替えることができます。

だからこそ、こちら側の信念を、確かなものにしなければ、ただあちら側に流されて、本来の自分というものを失うことになるのかも知れません。あちら側のことは、こちら側の私たちによって決めるためにです。

臨済宗の祖、臨済禅師は、臨済録に於いて、「途中に在って、家舎（かしゃ）を離れず」と記しています。臨済禅師の生きた時代、この途中の意味するところは、輪廻転生の旅の途中で、生まれ変わりの長い時間だったようです。

アウンサンスーチ女史にとって、輪廻転生の生まれ変わり、死に代わりは、おとぎ話の世界のようですが、禅は、家舎を心の器と考えることで、慈悲や愛が宿り育つ心と考えることが出来ます。

その心は、私という自己が確立する以前の心なので、いくら私が考えても対照的につかまえることはできません。もしつかまえることが出来るとしたら、無心となることで、手に入れることが出来るのかも知れません。しかし、無心な私にとっては、手に入れるという意識もないはずで。

「途中に在って」とは、旅なる人生であり、「旅行中」です。「家舎を離れて」を、執着を捨てた無我や無心に置き換えてみますと、「途中に在って、家舎を離れず」とは、一瞬一瞬の今を、無心に生き続けることです。臨済録には、さらにその先を目指して、「家舎を離れて、途中に在らず」こそ、人天の供養を受ける人だと付け加えております。

自己の歩んできた道を、歩みを忘れると、「未踏の地」を行けと叱咤します。それは、実績とか物を持っていること、あるいは蓄積した知識に価値や意味を持ち続けることを戒めています。人は知らずに、自己を認めてもらいたいものですが、そこは、普通の価値観です。

そこにおいて、道は消えて、死も消えて、終着駅も消えて、あちら側もこちら側もない人生が輝いていると思うのですが、人生の輝きが問われているともいえるのではないのでしょうか。

そんな無心の心を、禅は幾世代にもわたって、伝えてきたともいえます。

仏陀釈尊は、今も生き活きと生きている。

祖師である達磨も、宗祖臨済禅師も、妙心寺開山関山慧玄禅師たちも、今も生き活きと生きている。

祖父や祖母、母も父も、今も生き活きと生きていると。それは、無心なる心が、私たちにはあるからではないのでしょうか。無心なるがゆえに、呼ばれば、母となり、友となり、妻となることができるのです。

今を生きるということは、時に、辛く苦しく、悲しく寂しく、不安や恐怖に、いらいらすることも、それを取り除けない今の私なのだと思えることが、今を生きている、豊かに潤いのある姿ともなるのです。

人は誕生したときから、私たちの目や耳腕や足までも含めて、すべてあちら側に向い、歩むということを説明できるものです。年を重ねるという意味を、旅や歩みに書き換えてみますと、終着駅や死が見えてきます。

生き続けるという価値は大きな意味を持ちます。それは、「あちら側のことは、こちら側によって決まる」ことだと示唆できるものです。

だからこそ、こちら側の信念を、確かなものにしなければ、あちら側に流されて、本来の自分というものを失うことになるのかも知れません。あちら側のことは、こちら側によって決めるためにです。

(和尚)

◎5月28日の山門大施餓鬼会には、前日梅雨入りとなって、雨が降り続けたにもかかわらず、当日欠席も1組、当日飛び入り参加2組と、盛況に勤め上げることができました。これもひとえに、皆様のお陰と思って感謝しております。

本施餓鬼会より、お経の前半と後半を、普通の口語体の文章にしてのお施餓鬼会でした。そして、副住職の話がありました。修行から帰ってきて、10ヶ月ですが、次代を担うべく少しずつですが皆様の期待に応えられるよう努力している姿が見えてきました。

本当に有り難うございました。

◎平成24年より、お施餓鬼会は、5月第3土曜日となります。

陽岳寺護寺会便り 平成23年7月1日 No.127

気づくところが美しい

7月です。一年の半分が過ぎました。

今日までの時間の流れを、「もう」一年と考えるか、「まだ」一年と考えるかは、人それぞれです。

あの地震からは、1、2、3ヶ月、100日と過ぎ、もうすぐ4ヶ月となります。この月日が、長いと感じるか、短いと感じるかも人それぞれ。

考えもつかない事件が起きます。

9.11、神戸・中越地震、池田小・酒鬼薔薇・地下鉄サリン事件、イラク戦争、東日本大震災、福島原発。

映画や小説にあるような出来事です。

テレビ・教科書で、3.10東京大空襲、8.6・8.9広島長崎原爆投下、8.15終戦記念日など繰り返し、私たちの目には見えるけれども、どこか遠い世界の話に感じます。時間の経過でしょうか。

考えもつかない事件・戦争の起きない世界は無いのです。・・・諦めてはいけません。

東日本大震災はどうなるでしょう。忘れられていくのでしょうか。語り継がなければなりません。

地震の影響か、猛暑への対応か、世間では盛んに節電が叫ばれています。電力会社が節電を呼びかけるのはオカシナ話です。

冷蔵庫・洗濯機・白黒テレビ、カラーテレビ・クーラー・自動車。レンジ、薄型テレビ、食器洗い乾燥機など、新商品として、便利なものとして、続々と電化製品が世に出ています。

電気を自由に使えるようにと。便利に、新しい機能をと。我々の求めに応じて、電気・電化製品は作られてきた、とも思います。

しかし、歴代の政府と電力会社の責任は明確で、天災(?)だから免責、となるはずがない。責任も大切ですが、これからが大切です。ひとりひとりが日本を考え、行動しなければならないと、再度明らかになりました。明日では「もう」遅く、今なら「まだ」遅くはない。責任もつ生活。

極端な節電も問題でしょうか。節電だ！と、マンションの高層階に住む人が、エレベーターを使わずに暮らそうと思えば、階段の往復で一日が終わってしまいます。

電車などの交通機関を使わなければ、何駅と離れた会社・学校に毎日通うことは出来ません。

テレビやラジオもエアコンも無い。はだか電球、晴耕雨読の生活。働く場所は、住む家のすぐ

近く。お風呂を沸かすにも、ご飯を炊くにも、今ではスイッチひとつですが、昔はすべて薪。消し炭を取り、七輪で野菜を煮炊きする。そんな昔の生活は、今よりも良かったでしょうか？

5月の陽岳寺のお施餓鬼会で、修行道場での生活について話しました。

僧堂とは、生活のなかで我を無くすことに集中する場所です。我を無くせ、いままで持っていた知識も全部捨て去ってしまえと言います。放てば手に満てり、と曹洞宗の道元禅師の言葉ですが、いろいろなことに気付かされます。

「花も美しい 月も美しい それに気づく心が美しい」

円覚寺前管長の足立大進老師の言葉です。気付くことの大切さを教えてくれます。

私たちの周りには、美しいもの・ありがたいことに満ちています。しかし、気付かなければ。

修行道場で気付くこと。いちばんは「親切」です。感謝の念が起こります。

修行道場は、八百屋さんのように野菜を売って生計をたてたり、会社を経営して、お金を稼ぐことはできません。では、どうするか。・・・お布施です。町を托鉢をして、まわるのです。

托鉢の方法は、修行道場の場所によって違います。円覚寺の場合は、軒先に立って、一軒一軒短いお経をお読みします。鎌倉に住む方々をご存知なので、皆さん托鉢が来たな・・・と家から出てきて、おのおの負担のない額をくださいます。

托鉢に出ますと、お金をいただくことが多いのですが、果物やお米もいただきます。それが後々、自分たちの口に入るわけです。生きる糧です。無ければ、無いだけ。食べられないだけです。

果物やお米は重いです。また、小銭もたまってきますと重い！ひもが肩に痛いこみます。

しかし、重いのは物だけではありません。気持ちも、です。

親子で出ていらっしゃって、お母さんが子どもに小銭を手渡し、あげてきなさい、と下さいます。その姿に、思わず微笑んでしまいます。お札を頂戴することは稀で、硬貨の方が紙よりも重いですけれども。その気持ちは、重いのです。その重さは、親切です。ありがたいなと思います。

3/11の地震で鎌倉市は停電したそうです。ただ僧堂はいつも暗いですので、ろうそくがあります。いつも不自由なので、かえって何不自由なく暮らせていたようです。

水は横井戸からきていますし、ご飯を作るにも、お風呂を沸かすにも、ガスではなく薪ですから、停電・断水・断ガスは問題ありません。ただ、そういう生活なだけ、というわけです。

それでも、「ただ、そういう生活」を送ることができることは有り難いことなのだ。日々の生活への感謝に、気付くことができた。そんな地震だったと修行道場の雲水は話していました。

いま私たちは、便利なものに囲まれて生活できています。感謝しているかと問われたら？

「大いなる ものにいだかれ あることを けさふく風の すずしさに知る」

妙心寺管長でした山田無文老師の句です。無文老師が結核の療養中、縁側で風に当たっていたときです。風は空気が動いていると気付き、鉄の棒でガツンと殴られた気持ちになりました。

「私はこの空気に生まれ、養われていたのに、今まで空気のあることに気付かなかった。空気が寝ても覚めても休みなく抱き締めてくれていたのだ。泣けて泣けて仕方がない、俺は孤独ではないぞ。生きよ生きよとおれを育ててくれる大きな力がある。俺は治るぞ」と思ったそうです。

私たちは、さまざまなことやものに支えられて生きています。

エレベーターが動くのは、電車で通勤通学出来るのは、お施餓鬼に出席できるのは、お盆を迎えられるのは、今わたしが生きているのは。

護寺会便りを送ることができるのも、数え切れないご縁・無限のいのちのつながりの賜物です。今このときに繋がっている、わたしたちの命がとても偶然とは思えないことだと。ありがたいなァと、感謝して暮らしていければ。気付くことは、幸せなことなのではないかと思います。

修業道場での生活に区切りをつけて、深川に帰ってまいりました。祖先と皆様とのつながりを、現住職から後へと、つないでいきます。

お盆は、祖先とわたしとのつながりを思う、ひとつの機会です。先に逝った親しい人たちを偲ぶこと、毎日を送ることができると感謝することが、孝行・供養なのだと思います。 （副住職）

★お盆は7月13日(水)～16日(土)です。◎深川仏教会では、7月25日(月)午後7時より、深川高橋河畔（清澄通りと交差する小名木川）にて灯籠流しを行っております。一霊千円以上にて、仏教会灯籠に戒名あるいは先祖の名前を記して川に流します。陽岳寺で、受け付けております。

陽岳寺護寺会便り 平成23年8月1日No.128

無常

小説家の村上春樹さんが、6月9日にスペインのカタールニャ国際授賞式のスピーチ「非現実的な夢想家として」原稿全文が毎日新聞の夕刊に三日間にわたって掲載されました。

彼は、東日本で被災された日本人に対して、無常観という言葉を使っていました。

『我々は無常という移ろいゆく、儚い世界に生きています。生まれた生命はただ移ろい、やがて例外なく滅びていきます。おおきな自然の力の前にでは、人は無力です。そのような儚さの認識は、日本文化の基本的アイデアのひとつになっています……』と。

「しかし、それと同時に、滅びたものに対する敬意と、そのような危機に満ちたもろい世界にありながら、それでも、なお生き生きと生き続けることへの静かな決意、そういった前向きな精神性も我々には具わっているはずです』と、記していました。

そういえば、川端康成も、ノーベル賞のスピーチで、ものの哀れ、あるいは、ワビやサビの美意識をうたっていたことを思い出しました。無常観からわき出した言葉でした。

あの東日本大震災後、原発の暴挙も含めてですが、日本は大きく変わったことを考えます。陽岳寺も、3月、4月、5月、6月、7月と、法事の回向中にこの問題を大きく取り上げました。そして6月の回向に、何が変わらせたのかと仮説を立てました。

《「東日本大震災後、多くの人が、人が生きる意味の問いに直面したのではないかと思います。その結果、今までの普通に暮らしていた日常の普通さを疑い、物質よりも絆、友、家族の意味を再構築しようとしているようです。

昨年は、無縁社会が話題になっていましたが、震災以降は、何が人を動かすのか、動かされた私に意味を見出そうとしてるようです。

たとえ原発の事故が収束したとしても、不安は20年30年と日本を覆います。そして津波の映像を繰り返し目撃した者にとって、寄せては引く波に、流され翻弄されたのは、私たちの普通の暮らしだったのです。

それは、また、自然の驚異と、制御不能となった人間の欲求が作り出した原発の暴挙に翻弄されたものは、”私の中の死”ではなかったか。

誰だって、あんなにむごい現実を見れば考え方や生き方が変わるものです。

そして、本当に大切な物は、何だったのかと考えることを悟らせたような気がいたします。そこから、新たな希望や願いが生まれなければならないと、信じています。

それは、自分の中にわき起こる生きるという希望であり、自分の中の死が、必死になって訴え

、働きかけているといえないでしょうか？

自分の中の死は、普段生きていることに追われて、それこそ、全く見えないことです。でも今回の地震や、原発不安、放射線の自然に与える影響を考えてみれば、自分の死や、家族の死が、一人一人の心の中に叫び続けていると考えることが出来るのです」と。

そして自分の中の死を、あちら側と言い換え、あちら側はこちら側を根拠として在り、こちら側はあちら側を根拠として、同時に在ると喚起させました。その結果、あちら側のことがこちら側によって、決めなければならないと、それは、自分らしく生きよ！と心がけたのでした。》

そこに、平成23年7月9日、毎日新聞朝刊で、「さようなら、私はお墓に避難します」という、南相馬市の93歳の老女の悲鳴が届きました。

大きく破壊された町や村に住んでいる人たちの不安と悲しみは、未だに過ぎ去った傷を抱え込んでいます。惨状と悲惨さの中に暮らさざるをえない現実は、こだわり以前の悪夢のようです。その悪夢から一向に進まない現状では、今を生きることの辛さばかりが積み重なっています。

無常を生きる日本人は、どう生きたらよいのでしょうか？

村上春樹氏は、「我々は無常という移ろいゆく、儚い世界に生きています。生まれた生命はただ移ろい、やがて例外なく滅びていきます。おおきな自然の力の前にでは、人は無力です。」と書いていましたが、移ろいゆく世界を、どこで眼にしていたのか、聞いていたのかと、不思議な疑問を持ちます。

何故なら、自分自身の移ろいこそ、今回の東日本の大きな事件であり、渦中の中の流された私の移ろいこそ、悲惨だったからです。

東日本復興構想会議から、震災への提言が平成23年6月25日に発表されました。そのタイトルは、まさしく「悲惨の中の希望」がテーマでした。

これは、日本人おのおのにとって、悲惨の中の、混乱の中の、寂しさの中の、いたたまれない中の、辛さの中の、癒やされない中の、希望のことです。希望は芽であり、きっかけでもあるのでしょうか。もちろん大きな希望であれば幸いです、その希望は、つなぐことによって光がさしてくるといい、つながれていたとの気づきでもあります。

さて、仏教では、眼は、眼自身を見ることできないと説きます。無常も同じです。無常も無常自身そのものを見ることも、聞くこともできません。

なぜならば、移り変わるものを見つめる眼は、心は、移り変わらないものとしてあるからです。この関係を考えると、移り変わるものは、移り変わらないものを根拠として在り、移り変わらないものは、移り変わるものを根拠として、同時という世界に在るからです。仏教では、その同時を、中道（ちゅうどう）といいます。

この対立している構造を、言葉を変えていえば、次のようになります。

生きていながら生かされていることとは、生かされていながら、生きていることと同時です。これは、生きていることを自己肯定とすれば、生かされているは自己否定です。自己肯定しながら自己否定され、自己否定されたことで、自己が肯定されると。

含んでいながら含まれている。見守っていながら見守られている。包んでいながら包まれている。部分で在りながら全体である。結ばれているから独立している。離れていても連帯している。選んでいながら選ばれている。失っていながら得たモノが有る。無心となっていながら満ち足りている。この関係こそ、色即是空・空即是色という般若心経の要素です。そして、この有り様の同時という視点こそが、揺れる心の無常世界を生きる智慧となるものです。

なぜなら、これはすべてが、無心（自己否定という）を本質としているからこそですが、これはまた、金剛経の、AはAでないことによってAであるという関係です。

妻は妻を否定することで、妻となる。妻の根拠は夫に在るといえば、夫を根拠にして、妻という立場はあるといえます。これは、夫も同様な関係にあるといえます。

だから、妻は妻自身にはなれません。見えません。聞けません。無常と同じことです。

世の中の意味が、対立しているもので成り立っているならば、無常の根拠は、無常でないものを根拠としてある筈です。それは、移り変わらないものとして、絶対や永遠ともいえるものですが、移り変わらないものとした、私たちの思い込み、独断こそが、無常を際立たせるともいえます。

実は、本当に不思議なことですが、昨年から、断捨離というブームが、東日本大震災の伏線として、日本にあったのではと、奇妙に思えてなりません。この断捨離こそ、無常なるが故に、執着を離れるという発想でした。

無常を見つめる常なる自分自身は、無常を含んで生きているという事実、移り変わることが常とするなら、その常とする自覚から、我執や執着の事実から、解放されることこそ、無常を生きる智慧です。しかも解放された自己は、無常を根拠としながら、無常を離れている。

東日本大震災こそ、無常なるものとするなら、想定外や独断から出る偏見こそ移り変わらないものとして、また困惑極めるものとして、証明されてもいます。想定外や独断、思い込みは、自己を省みるという否定を忘れたものだからです。

またこうも考えることができます。無常は無常でないものに触れることで、無常を生きることができると。無常でないものとは、慈しみ、あわれみ、共に喜ぶ心、とらわれのない心とも考えることができ、突き動かされた私の心です。

◎7月のお盆は、暑かったものの、8月のお盆はどうなるのでしょうか？節電、放射線による汚染と、円高やユーロ不安、混沌とする世界を生きる智慧は、やはり、動かされた自分に気づくことでしょうか。それとも生きろと叫ぶ自身の死に気づくことからでしょうか。暑い夏、皆様ご自愛専一に、今するべきことに気づくことです。（和尚）

陽岳寺護寺会便り 平成23年9月1日No.129

「物欲は世界を救う」か？

新聞を見ていたら、下記の題をしたコラムがありました。

「物欲は世界を救う」

まさにキャッチコピー。世界経済を救うのは物欲だそうです。

3月11日の地震・津波から、もうすぐ半年です。東日本大震災は、2011年のキーワードの1つです。

とある現職知事は、震災に対する日本国民の対応について問われ、被災者の方はかわいそうだと言いつつ、「津波をうまく利用して、我欲を1回洗い落とす必要がある。（中略）これはやっぱり天罰だと思う」と語りました。のち発言を謝罪します。

いわゆる「天罰」発言について、どのように扱うかは私たちの自由です。けしからんと切り捨てる、見て見ぬふりをする、前後文脈を見ないことには判断できないと保留する、よくぞ言ったと賛成する。何・だれに対しての、どのような発言か、見定める。

たいせつなことは、どのように受け取り、どのように処理するか。

本屋さんに行くと、スピリチュアル系(?)の書籍コーナーがあります。そして、そこに並んでいるのは、お坊さんたちの本。

「心のお医者さん」、息苦しい世の中を生きるためのよすがを、お坊さん・仏教に求めているのでしょうか。

日本の仏教は、最初の最初・・・お釈迦様がお悟りを得た時代のものとは、だいぶ違ってきます。大変な幅がありますし、それを許すゆとりがある宗教なのだと思います。しかし根本は同じです。

その根本とは、人生とは悩むことであり、その苦しみからの解脱・お悟りは得ることが出来る。悩まなければ救われない。そこに禅宗の特色を出すならば、解脱・お悟りの方法は「坐禅」であるということです。

では、お坊さんにしか解脱・お悟りは得られないのかというと、そうではありません。

「行住坐臥」、動いている時も、静かにしている時も、すわっている時も、横になっている時も、いついかなる時も坐禅。ふだんの暮らしが坐禅・修行と言えます。

臨済宗中興の祖、白隠禅師は「動中の工夫は静中に勝ること百千億倍す」とも言うほどです。

最初の最初、原始仏教では、人の苦しみの原因を、自らの煩惱ととらえました。そして、解脱・

お悟りへの道を求めます。

三毒（さんどく）とは、仏教において克服すべきものとされる最も根本的な三つの煩惱、すなわち貪・瞋・癡（とん・じん・ち）を指し、煩惱を毒に例えたものです。

貪とは、むさぼる心。瞋とは、怒りの心。癡とは、真理に対する無知の心。

三毒にとらわれると、必要以上に求め、自分のちからが及ぶ範囲を知らず、怒り憎み、また求めます。その繰り返し、悪い循環におちいります。

他人は自分をうつす鏡といいます。ひとは、ものや他人の姿を通して、自分と対話、客観視します。比較することではありません。

坐禅も同じだといえます。姿勢・息・心をみつめることで、自分をみつめること。世界と一つとなり、また、一つ一つは別個の存在だと尊敬することです。

坐禅とは、日常を点検、意識をもってみることです。

「自分」にアプローチする方法として、『調身、調息、調心』という言葉があります。

『姿勢を調べて、呼吸を調べて、心を調える』

坐禅をする上での方法として、『調身（姿勢）→調息（呼吸）→調心（こころ）』という順番を意識することは、効果があると思います。覚えやすいですし、何より・・・もっともらしい！

ちなみに、『調身、調息、調心』は順番ではない、と思います。それぞれが自然・自分・世界への気付き・アプローチです。

生きるために必要なこと「息をする」。

いやいや、「息をする」だなんて、意志に関係なく呼吸はしている。当たり前のこと。条件として挙げるまでもないことでしょうか。

食う着るところに、住むところ。人間の営みとしての衣食住は、お金が必要ですし、用意するのも消費するのも大変です。

なればこそ、衣食住以前の問題として、「息をする」ことは当たり前ではありません。

生きていることを保証された時間とは、一息の呼吸間だけですから。

一息の間に、ひとは、動き、とどまり、休み、眠りにつき、楽しみ、悲しみ、生き、死に。地震・津波は起き、火災・水害も発生します。

禅の考え方は、手の届かないところにあるのではなく、自分の日常の中にあります。

そして、点検をしていきます。他人のことをいう前に、自分を見つめるようにいきます。

人は知らずに鬱憤とした気持ちを抑えていたり、ストレスを抱えていたりするかもしれません。何かがかきかけで、抑えきれなくなることもあるかもしれません。

出来ないときは出来ないし、嫌な感情が起こるときもあるでしょう。そんな自分が嫌で認めたく

ないことも。自分は他人より優れているはずだ。もしくは、自分という存在なんて毛ほどの価値も無い。

どちらも同じことです。他と比較してしまうが故のところです。

あとになって思うことって、あると思います。なんであんなことを、あんなにこだわっていたのか、怒ってしまったのか。もちろん後悔したっていい。怒ったっていいんです。

物欲がありすぎても、なさすぎても、いいのかもしれませんが。ただ、そんな自分もいるのだと、気付くことが出来れば。どちらも同じ自分です。どのように受け取り、どのように処理するか。では、いざ自分が選ぶとき、どうしましょうか。

「物欲は世界を救う」でしょうか。

部屋がもので溢れないと分からないでしょうか。全部捨てきれないと分からないでしょうか。

どちらも、同時に、存在します。選んだのか、選ばれたのか。不安定で、揺れるところを鎮めることは大切です。立ち止まることです。同時存在という成り立ちの中に、人は生きています。

その成り立ちを考えると、先に逝った親しい人たちを思い、仏壇・遺影・墓前の前にたたずむの
かもしれません。 (副住職)

◎秋の彼岸は9月20日（火）から26日（月）までで、お中日は23日（金曜日・祝日）です。

陽岳寺護寺会便り 平成23年10月1日No.130

ドジョウ

平成23年8月29日、菅直人首相の後継を決める民主党の代表選で、述べた野田佳彦氏が、詩人相田みつをさんの作品を述べられました。（相田みつを作品集「おかげさん」ダイヤモンド社）

どじょうがさ

金魚のまねすることねん

だよなあ

— みつを —

「ドジョウはドジョウのままで、いいんだ」と、泥の中にひそむドジョウの泥くささに強烈なアピールとして心ひかれた人が多かったのではないのでしょうか。

ダイヤモンド社には、この作品集に対して問い合わせが殺到したと聞いております。もっとも、ドジョウには、シマドジョウとフクドジョウがいて、おとなしいドジョウと金魚に食いつくドジョウから、噛みつき方がささやかれるほどでした。ペット業界や、どぜう屋さん、安来節までもが一時的にブームとなったそうです。

この作品は、政界という足の引っ張り合いに見える、泥くささの世界に生きる野田氏を、そのまま清新なイメージに転換させる響きがあります。

マスコミの解説では、「他人と比較しなくてよいのだ」と、その背景には、何か独善という、独り善がりな思いがただよっているような気もいたします？

この詩に登場する、ドジョウと金魚は、金魚は優れたもの、ドジョウは土の中に生きることしか能のないモノにたとえられそうですが、本当にそうでしょうか？

「ドジョウがさァー」と、ドジョウは自分のことをドジョウとは言いませんし、自分を指すこともしませんが、指すのは人間のなせることです。

しかし、このドジョウは、金魚をめざしたことは確かです。金魚がうらやましかったのか、ドジョウのままでは居られない心があったということでしょうか。擬人化して、もがき苦しむのも、金魚に根拠を持てば、気持ちは理解できます。

人も同じように、夢を持ちながら達成する人もいるし、いつの間にか忘れてしまう人もいます。お金持ちにあこがれ、何かのきっかけでそのようになる人もあるでしょうし、思い続けながら、なれない人もいます。人生を達観した言葉にも見えます。

でも、子どもに、最初から「ドジョウは金魚のまねすることねんだよなあ」、「ドジョウはドジョウのままでいいんだ」とは言えないことです。もしかして、金魚のまねをして、金魚に成ったドジョウもあるかもしれませんから。

この作品は、思いを抱いた「ドジョウがさ、金魚のまねすることねんだよなあ」と、元のドジョウに成ったとき、今までのドジョウと違う、高らかにドジョウを謳歌するドジョウの誕生と見えるのです。

今の自己を否定したことから、肯定にたどり着いたプロセスが見えます。きっとその時のドジョウは、フナやアユ、ハヤやウナギにナマズも、それぞれが輝いて見えたのではないのでしょうか。

妙心寺のホームページに、宗旨（しゅうし）について記してありました。

~~~~~

お釈迦様は、「生老病死」の命題に悩み、出家した後、初めは苦行を修しました。

やがて、この6年(または7年)間の苦行では道は開けないとして、12月1日から一週間、深い禅定に入られました。

そして、12月8日に、暁の空に光る明星を見て「山川草木悉皆成仏（さんせんそうもくしかいじょうぶつ）」などの言葉を発せられ、悟りを開かれたとされています。

自分と他が一つ、「自他不二（じたふに）」という境地からこの世を見たとき、今、この地球や宇宙は皆自分の家であり、その中の生きとし生けるものは皆自分の家族である、という大いなる慈悲心が開けるのです。

それまでは苦行に耐え、自分を磨こう、善いことをしよう、生老病死の苦しみを超克しようという自己本位の行いがありました。

しかし、自他不二を体得し、その大いなる眼（まなこ）で眺めると、この世のすべてのものは「あるがまま」なのだ、「気付いた」のです。それがお釈迦様の悟りです。

~~~~~

ドジョウという自己が、現実において金魚のドジョウか、ドジョウの金魚か不明ですが、成りたいと、金魚という対立する関係において自己を否定したとき、ドジョウのままが良いのだと気付かされます。

真理が見えた、現実の世界構造が見えたからこそ、否定から肯定へと向かう道となります。別の言葉で言えば、スマレはスマレのままでよいし、ぺんぺん草はぺんぺん草を生きる道があることが見えてきます。

そこには、世界にただひとつの独立した、ぺんぺん草、ドジョウ、スマレと、そして自も他も。この構造こそ、相対的な世界を生きるすべとなるはずです。

「山川草木悉皆成仏（さんせんそうもくしかいじょうぶつ）」とは、スマレはスマレのまま、ドジョウはドジョウのまま、自他無二とは、世界が一つと成ることで、逆にそれぞれが独立した存在であることを表現した言葉のはずです。

それを人生に喩えてみれば、老いてまだ坂を登るが如くあるから、老いが豊かであるのではないのでしょうか。老いて、若さに立てば老いは姿を変えるものですと.....だから、ドジョウはドジョウのままでもいいんだと.....

ドジョウやスマレ、ぺんぺん草やタンポポとして、空間的に独自のモノとして存在しています。それは、他と区別されて、各々が差別によって数々と存在するという事です。これが世界の有り様なのだ、この現実の世界を一とすれば、不一と、一つに非ずと、多の方向を示します。

春になれば梅や桜の花が開き、秋になれば黄色く色づき、冬には枯れてと、人もそのように生きているはずなのです。人も植物も生きとし生けるもの百花繚乱として、それがそのまま一となります。

家族も、学校も仕事場も、国も、一にして多、不一にして、異に非ずの関係こそが、現実の有り様となっているはずです。学校のクラスが一つに成るためには、生徒である多の個別は、それぞれが独立とした存在であり、そして、障（さわ）りや妨（さまた）げのないモノとしてあって、はじめて一つであるといえます。

この同時という視点こそが、「ドジョウはドジョウのままに」生き、スマレはスマレのまま花を咲かすことが、世界は慈悲に満ちあふれている表現となるはずです。

大乘仏教は、よく「自位に住す」「法位に住す」といいます。それぞれの真理、如実の真理に拠り所を持って生きると。そこに、ドジョウは、真の自己となります。これを、あるがままに生きる、住す、または、あるがままを拠り所とするといえます。

一は多に、多は一に（まるで三銃士の言葉のようです）、これこそが、「自他不二」ということです。体得しても、しなくても、無心となって働き、生きる行為や姿こそ、自他不二と思っています。（和尚）

◎早いもので副住職が、修行から帰って1年2ヶ月です。地震があり、津波があり、放射線の汚染も、台風15号の災害、そして円高による日本の不景気は、雨に添い、風に添ってと、何とか年月を過ごしてきました。

そんななかにも、10月8日、副住職が結婚します。総ては命の営みのなかのこととして、目出度くもあり、目出度くもなし。だけれども、やはり親としては目出度くもあり、二人して担う責任という見えない重さに目出度くもなしか.....、ここは悩むのです。

陽岳寺護寺会便り 平成23年11月1日No.131

「それでも人生にイエスと言う」

「それでも人生にイエスと言う」

V.E. フランクルという方の本があります。内容については触れません。書名を知り、とても良い言葉だな、と私は思いました。

この言葉は、イエスと言いつけることを示します。

そして、その「イエスと言う」ことは、主体性を持ちつつも、自然につむぎだされることと思えます。

「イエス」を人生の何に対して言いつけるのか。それは「出会い」です。

人は、おのずから、みずから、生きている。

「人生」とは、イエスと言いつけること。出会うことの繰り返しだと思えました。

独りよがりかもしれない出会いです。

生きていれば、色々なことに出会います。人だけでなく、動植物、事件、考えなど、すべてです。

自分だけが、また、多くの人と、出会うこともあります。

気付かずに過ぎ去ること、また、とても衝撃を受けることもあります。

報道や教科書など伝聞により出会うこと、また、直接見聞きして出会うこともあります。

直接・間接に関わらず、なにかに出会うこと。

目を開けていれば、視界は入ってきます（こんにちは副住職です）。鼻が詰まっていれば、嫌なにおいも、芳しい香りも入ってきます。胸に手を当てれば、鼓動を感じます。音がします。風を感じます。重力を感じます。

これらすべてを出会いとすれば、「いま、ここにいる、わたし」を大切にしようと確信します。しかし、出会うからこそ、「いま、ここにいる、わたし」の確信が揺れることもあるでしょう。

目の前にある事実。それが、自分の考えていた世界を逸脱していたとしたら？

実は、まだ出会っていただけ。それでも人生にイエスと言えるのが私たちです。

先日、同宗連（『同和問題』にとりくむ宗教教団連帯会議）主催による、第60回「同宗連」研修会に参加しました。2日に分けて、講師の方3名（トランスジェンダーの方々）の講演を聞きました（「セクシュアル・マイノリティについて」上川あや氏（東京都世田谷区区議会議員）、「宗教者とセクシュアル・マイノリティ」森なお氏（日本基督教団牧師・兵庫教区主事）、「性同一性障害について」虎井まさ衛氏（作家））。

お話を聞いて思ったのは、「性・性別とはなにか」ということでした。

男であるか女であるかは誰にでも分かることではなく、医学的にも性別の判定が難しいのです。とりあえず、分かりやすさとして、性を男・女で別にすることが続いています。

「性別」には社会制度がついてまわり、枠から外されているままの人たちは、婚姻・医療・仕事など、とても苦勞をし続けていきます。

自分の性を考えることは、人生をどのようにして歩いていくか考える上で、とても大切なことです。「いま、ここにいる、わたし」は何なのか。ふと立ち止まって、点検することは大事です。

見たくないもの、嗅ぎたくない臭い、聞きたくない音、親しい物事との別れ。受け入れたくない出会いがあるでしょう。しかし、受け入れないためには、受け入れなければ出来ないことです。

だからといって、すべての出会いを受け入れることはできません。殺人や無意味な開国はいけません。イエスと言いつける「主語」を遮ることはいけないことなのです。「人は、おのずから、みずから、生きている」ことを遮ることは、人の尊厳を傷つけることです。この「人」は、他人でしょうか、自分でしょうか。

「主語」とは？誰が出会いにイエスと言いつけるか？それは、「自分」以外にはいません。

私は外向的か内向的かと聞かれると、内向的だと思います。外で遊ぶことは、あまり好きではありませんでした。小学校では、担任の先生のおかげで、やっとプールに慣れることができた記憶しています。中学校に入って、バレーボール部に数ヶ月いましたが、やめてしまいました。大学生に入って、いわゆるガテン系のアルバイトをしようとも思いませんでした。

子どものころと、26となった今を比べるのはナンセンスかもしれませんが、外向的傾向は増したとは思いません。私よりももっと外向的な人もいるでしょうし、大人になってより内向的になる人もいるでしょう。

外向的なら、自分から進んで出会うことが多い、イエスと言う数が多ければ人生が豊かである、とは申しません。出会いの多さと人生の豊かさに相関関係はないでしょう。ただ、機会の格差はあるかもしれませんが。

外に出ていけば、視野が広がるでしょう。それでも、外向性に関係なく、（滅多にない）出会いもあるはずです。運まかせの出会い、といえいいでしょうか。

陽岳寺は、皆さんとの月一回の出会い、この護寺会便りを大切にしています。顔を突き合わせてとなると、墓参・お盆などでしょうか。ツイッター、ホームページや電話をすれば、いつでも出会うことは出来ます（<http://www.yougakuji.org>、<http://twitter.com/yougakuji/>）。

人は、親と出会えば息子・娘となり、祖父母と出会えば孫となり、夫・妻と出会えば妻・夫となり、子どもと出会えば父親・母親となり、孫と出会えば祖父母となり、と。姿や形を変えていきます。しかし、その関係性にある自分を見れば、親の前では息子・娘でしかなく。息子・娘の前では父親・母親でしかない。

変わる世界を諸行無常と言い、変わる自分を諸法無我と言うならば、目指すところの涅槃寂靜は

、ただ一瞬一瞬を生きること。一瞬という時間は、終わりと始めという一瞬の繋がりです。その時をただひたすらに生きることが、禅宗の心。無心なる心です。

気付かない出会いもあるでしょう。でも目をこらし、耳を澄ませてみれば、世界は輝きに満ちているはず。すべてはシグナルを出しています。何かがあったはずなのに、報道されない。この目の前の人は、自分たち少数者に寛容かどうか。

お釈迦様は無言という答えを出すことがありました。それでもイエス。無言が正解になることもあるでしょう。どんな出会いも、正解だったと、幸せだったと思う願い。それでも本当にそうかと考える。「日々是好日」「直心是道場」「喫茶去」などの禅語が私たちに示してくれています。

最後に、「それでも人生にイエスと言う」にも掲載されている、タゴールの詩を紹介します。

私は眠り夢見る、
生きることがよろこびだったと。
私は目覚め気づく、
生きるとは義務だと。
私は働く、すると、ごらん、
義務はよろこびだった。

(副住職)

◎先月の護寺会便りにて、結婚報告をしました。多くの方にお祝いの言葉、ご祝儀をいただきました。ありがとうございます。

◎11月27日(日)ご祈祷と演芸会です。ご参加ください。

参加ください。

陽岳寺護寺会便り 平成23年11月27日No.132

ご祈祷

11月20日ブータン国王夫妻が、福島県相馬市の桜ヶ丘小学校を訪問しました。皆様もご存じの如く、小学生を励ましました。

「自分の体験の上に存在し、経験によって大きくなるという心の中の龍。自分の龍を鍛錬して、感情などをコントロールすることが大切」ですと。

王妃と国王の結婚秘話は、王妃がまだ7才のとき、当時17歳だった国王に「大きくなったら結婚してください」とお願いした時にさかのぼります。

「大きくなっても覚えていたらね」と伝えた国王は、10年後、17歳になった王妃ペマさんに求婚したのだそうです。

長い年月を超えて育てた結果のご結婚だったというのです。これも、心の中の竜を育てることと考えられます。

その10年かけて育てた竜は、怠ると、自分をも襲う竜となるから、用心に越したことはありません。

その竜の住む人間の身体と心を、私たちはどう所有しているのでしょうか？

竜を鍛錬し、その竜に感情をコントロールさせるとは、竜とはどういうものなのでしょうか？

竜とは、経験を蓄積させる記憶でしょうか。その記憶を考えさせるモノなののでしょうか？

竜とか、心とか？身体とか、それは、持っているといえるものなのでしょうか？

私と発言するものは、私とモノ、身体は、どういう関係において有るのでしょうか？

考えれば考えるほど、解らなくなりますが、解らなくなっても、私そのものが命であることは解ります。

本来、命とは瞬間瞬間存在するという、存在そのものです。鳥や植物、昆虫や魚がそうであるようにです。

それでは、私たちが動物や昆虫、植物と、命として同じで、人として生きるなら、瞬間瞬間どう存在することがよいのでしょうか？

動物や昆虫、植物が教えてくれるのは、生きる時は生きるに徹して、枯れるときは枯れるに徹して、死ぬときは死ぬことに徹して生きることを教えてくれます。それが瞬間瞬間をどう生きるかの答えです。

人は、その都度の人生に於いて、今・ここを徹して生きる。悲しみは悲しみのまま、喜びは喜びのまま、考える時は考えるままに、災難に逢ったら災難に逢ったままに、今・この、身と心を一つにしてです。

ブータンの仏教も大乘仏教である限りは、仏性を基として、智慧・空性を理解し、方便・仏性を究めることと、慈悲の実践を説きます。中国に渡ったインドの密教は、日本に渡った以降、中

国では消えてしまいました。ですが、日本とチベットには残りました。そのブータンに残ったチベット仏教は、幾度もインドとの交流により中国の影響を受けない直伝の密教文化を形成いたしました。

しかし、大乘仏教で有る限りは、何よりも、仏性を問題とすることから、その竜は、仏性そのものであると考えることができます。

その竜は、禅宗の心と同じです、空っぽの心をいい、それは清らかな心であり、このご祈祷の祈りそのものです。今・この命です。

さて、祈りはすべての人間に与えられた宝ものです。

祈るという行為が、今・ここにあったからといって、世界が平和になったこともないし、戦争がなくなったことはありません。

むしろ、世界が平和になって、戦争や争いがなくなったとしたら祈りはどう変わって行くのだろうかの問いに、答えがあるように思えるのです。

ご祈祷、祈りとは、心を開くことです。心が開いていればこそ、本来開かれている世の中を受け入れることができます。

その開かれた心で世の中を受け入れるとき、世の中と自分が一つになって祈りが実現するといえます。

心は私たちが生活している日常の中にあるのであって、どこか特定の場所だけにあるのではない。開かれた心とは、透明な心であり、清らかな心であり、平穏な心でもあります。

透明で清らかで平穏な心が世界をものごとを見分け、正しいことと間違ったことを区別できる竜にたとえることができるのでしょ

う。たとえ明日、私たちの住む世界が滅びるとしても、日本が世界で最も貧しい国になったとしても、今日、日々新たに生きることを祈ります。

しかも、善く生きる。そこに天国があるとしたら、それは、どんな災難に遭っても、困難に出会っても、生きる喜び、楽しみを忘れないことではないかと、これこそが無常を生きる知恵なのだと思うのです。

さらに善く生きる、楽しく生きるとは、自分と世界の関係が、喜びや楽しみそのものであることと気づくでしょう。

だから、祈りは何かを求めることではなく、ただひたすらなる希望という存在そのもの、それが竜でもあるのだと。来年は、この竜の年、辰年です。

その竜を育てるために最も必要なことがあります。それは、多くのお経の冒頭にある言葉、「如是我聞」という、聞くという言葉です。聞く対象は、声なき声も含めてです。耳を傾けて聞くということは日頃の鍛錬です。ここにとある禅僧の詩を紹介します。

《空っぽで聞け、耳を傾けて聞くということは、沈黙を身につけるということだ。

沈黙は、自己内面の海だ。

真実の言葉は、内面の海で育つ。

聞くということは、外のものを媒介にして、自分の中で眠っている声を、呼び覚ますことだ。

耳を傾けて聞くことのできる人は、その言葉から自己の存在を発見する。

しかし自分の言いたいことだけを主張する人は、自分自身を見失ってしまう。

こんな言葉がある。「星たちがしてくれた話を伝えるには、それに必要な言葉が、まず私たちの中で成長しなければならない」

言葉になるまでは私たちの中で、植物の種子（たね）のように成長しなければならないということだ。

したがって何かを聞くということは、自分の主張を空にするために、沈黙を身につける時間なのだ。》

◎ご祈祷の司会、冒頭の言葉を記してみました。

陽岳寺護寺会便り 平成23年12月1日No.133

お祝いの言葉の交換

お寒うございます、副住職です。

この護寺会便りが、みなさんの手元に届く前には、寺族に読んでもらうというチェックがあります。誤字脱字、読みやすいか分かりやすいか。一般？の意見を聞くわけです。

さて今年、私はお嫁さんを迎えましたので、読んでもらっています。護寺会便りの内容について貴重なご意見をいただきました。

「大丈夫だよ、いいんだよ。～してくださいね、という許可が多いような気がする」と。

大丈夫だよ、～してもいいからね、と許可を与えるばかりでは、傍若無人・野放図でもいいんじゃないか、と思われても仕方がありません。勉強しなくてもいいんだよ、命を粗末にしてもいいんだよ、人を傷つけてもいいんだよ、という極論も許されるかに見えます。

そんなことはありません。「許し」は同時に、「誓い」も必要となります。この関係は、義務と権利の関係とは違います。

9月末、ブータンのティンレイ首相が、被災地・福島県相馬市の桜丘小学校を訪問しました。そして11月18日に、同じ地へ訪れたブータン国王夫妻。

「君たちは龍を見たことがありますか？私は見たことがあります。龍は私たち一人一人の中にある。自分の経験を食べておおきくなるんだ。年を重ねれば、その龍は強くなる。自分の龍を大事にしないといけないよ」と、ブータン国王は小学生を、日本国民を励ましました。

3月の震災以後、現地の方々の心から溢れる思いは、如何ばかりかと思えます。

そして、震災直後、日本全国において、テレビやラジオや新聞、悲惨な状況や、神妙な面持ちの人間ばかりの放送が続きました。日本に住む人々は、強い人間ばかりではないでしょうが、連日連夜ひどいんだひどいんだ、とだけ流されたら。

みんな無縁社会などネガティブキャンペーン好きな面はもうお腹いっぱいなはずでした。神妙な面持ちをしていなければ不謹慎だ、と暗に臭わすテレビやラジオや新聞。

みな不安なのです。この一言につきます。

自分は大丈夫、普通の精神状態、ちゃんと判断できている。・・・通常では起きないことが起きているのだから、みな不安になるのは当たり前です。

一呼吸を置こうとしても、テレビ・ラジオ・新聞の報道、余震がどんどん来ていました。そして

、揺れは、外側からの揺れだけではありません。

気持ちの動揺は動揺を呼び、不安は不安を呼び、大きく育ちます。心が揺れると冷静さを失ってしまい、揺れを重ねてしまう。それは何故か？

揺れた後は、揺れる前よりも事態は複雑になってしまうから。どうしたらいいのかと選択肢が増えて、どうにもならないんじゃないかと固まってしまうからです。みずから困難に困難を重ねてしまう。難易度を上げてしまう。

我々は、経験という栄養を、不安という枝葉に伝える為、生きているわけではありません。自分という樹幹を育てたい。喜びの種をまきたい。

経験は知識のままならば、役に立ちません。歴史を繰り返す。不安から買いだめしてしまうし、ご飯が美味しいから食べ過ぎる。分かっちゃいるけど、やめられない。

その場その場で絶っていかねばなりません。一呼吸置く。それは、お茶を飲んでもいいし、深呼吸でもいいし、窓の外を見てもいい。ミスが続いていると思わなくてもいい。

年賀状も震災仕様になっているとニュースで聞きました。

今年の年賀状は「寒中お見舞い」として出す。「一日も早い復興を心より祈念いたしております」などと災害や復興を気遣う文例にする。賀詞・祝詞や「お慶び」など祝いの言葉を使わない「年始状」と位置付けたデザイン。

情けは人のためならずという言葉があります。ひとこと、感謝のことばを言ってみれば、重い気持ちは軽く。暗い気持ちは明るくなるはずです。そして、心からの感謝の言葉となって、まわりめぐって、自分へと返ってきます。

あと1ヵ月で2011年も終わり、2012年となります。節電・自粛で喪中のようなかと思えば、イルミネーションやクリスマスの飾りで町が彩られ、年末年始・お正月ムードにがらっと変わります。「旧年中はお世話になりました。今年も宜しく願います」と新年のあいさつ、お祝いのことばの交換です。

そのことばの交換の意味は、期待と現実との葛藤からです。不幸に対して強くあろうと、来年も良い年としよう。誓わずにはおられず、心から溢れる思いが形となっているのだと思います。幸せを、復興を、自身の心の平穏を誓ってください。

前後際断。忘前失後。3月のあなたは、3月のあなたの思い。今のあなたは、今のあなたの思いです。それ以上でも、それ以下でもない。

悲しみも、苦しきも伝播します。しかし、希望や幸福も伝播するのです。交換しましょう！

『バスのなかで』 坂村真民

この地球は一万年後

どうなるかわからない

いや明日

どうなるかわからない
そのような思いで
こみあうバスに乗っていると
一人の少女が
きれいな花を
自分よりも大事そうに
高々とさしあげて
乗り込んできた
その時わたしは思った
ああこれでよいのだ
たとい明日
この地球がどうなろうと
このような愛こそ
人の世の美しさなのだ
たとえ核戦争で
この地球が破壊されようと
そのぎりぎりの時まで
こうした愛を失わずに行こうと
涙ぐましいまで清められるものを感じた
いい匂いを放つまっ白い花であった

坂村真民さんの『バスのなかで』という詩です。このような愛を、私たちは持っているのだと、失わずに行こうと。それぞれに、どこかに、夢も希望もあるのだと。

雨にも負けず、風にも負けず。どうぞ、よい年でありますよう、祈念申し上げます。

◎11月の最終日曜、本年も無事、ご祈祷と演芸会を終えることが出来ました。ありがとうございました。

陽岳寺護寺会便り 平成24年1月1日No.134

年頭に.....

東日本大震災に遭い、陽岳寺のあらゆる昨年の法事一つ一つに、下記の言葉を添えて、般若心経や金剛般若経をおよみいたしました。

《東北地方太平洋沖地震と津波の影響で亡くなられた方々、人知れず今も多くの悲しみを秘めた心を持つ方々、未だに立ち直れない方々、あれから時が止まった方々、その方々のために、「忘れない、日本！」が寄り添うことになると思います。

今も被災し避難している方々、除染作業に携わる自衛隊員、警察、消防、ボランティアの方々、津波にも地震にも遠い場所で被災しなかったけれど、痛みとして心が共鳴し見守ってくれる方々。その方々のために、「頑張れ日本！」が必要と思うのです。

もちろん、今日の法事の主人公のためでもあります。みんなの、みんなにより、みんなのため、ご冥福、ご多幸、ご無事、ご健闘を、般若心経にて心よりお祈りいたします。皆様も一緒に大きな声でおよみ下さい》と。

3月11日の大震災が発生したとき、陽岳寺にとっても正面から見据えて、法要の内容にして向かわなければならぬと、新命副住職に話しました。新命副住職は、「もう考えているよ」と、彼が作った上記の内容を、お彼岸の法要から試み続けています。

あの津波の映像を繰り返し見たと、被災した山や川や海、そして街の写真や映像、現地にて目撃したものにとっても、繰り返し繰り返し、被災地にこの言葉を発することが私たちの日本人の務めであるように思ったからです。幾度も祈ったとて、祈りに終わりがあるように思えない大災害でした。そして毎月、被災地の状況に合わせて作り替えました。

もちろん原発の暴挙に苦しみ、さいなむ人たちに向けてもです。東日本大震災で被災し亡くなった人を含めて、生きている人たちのためにも読むべきだと強く思いました。

そして、被災し非難し、復興にたずさわる人たちを含めて、また心配して心を痛める人たちのため、毎回毎回、お経を読んだきっかけを、東日本大震災が創ってくれたことに気づきました。通夜や葬儀にも、このお経を読むときは、必ず被災地のことを思いました。

一昨年前のお施餓鬼会の法要に向けてのことでした。この震災を予感したわけではないのですが、地球温暖化や、無縁社会が叫ばれるようになってです。格差社会や鬱病にあえぐ姿が見受けられるようになってです。背後に、人間の弱さや愚かさが大きく見えていました。そのとき、神さまのことを考えたのです。

禅宗のお坊さんとしては、珍しいかもしれませんが。でも日本に生まれて、日本で育ったものとしては、ごく普通のことだとも思っています。それに、もともと回向の中に「三世の諸佛諸菩薩、もろもろの天界に遊びし神々、地上に住まう神々精霊」という言葉を捧げていますので、今さら、なのですが「どうして、こうも不幸なことが起こるのだろうか」とです。

もともとインドでも中国やアジアでは、多神文化の地です。その神々の地に仏教は誕生しました。神々がいたからこそ、誕生したともいえます。

それは、人間の絶対的な平等、迷信や不合理・占いなどを排除し、造られた倫理観を説かず、人間として真の自己に目覚めることを重視したともいえます。

そのために、正しく見て、正しく考え、正しい言葉を使い、正しい行い、正しく生き、正しい務めをして、正しく思い、正しく心を修めることが必要だと説いたのです。もちろん、その時代は身分差別や、生まれや職業、障害、貴賤による差別の社会だったからです。

社会のあらゆる差別に対して、その差別を直視し、「正しいこととは？」と、みずから考えて、行うことを説いたのです。それが苦しみから遠ざかることだからです。

そのために、「人は行為によって……自己である」という言葉が誕生したわけです。仏教は、そんな状況の世界に、絶対の自由や平等を宣言したのです。

東日本大震災の引き金を引いたものについては、科学の進歩を待たなければどうしようもないことです。もし予見できたとしても、予知できても、人間の知恵で備えることはできますが、こうした大震災を止める手立てはありません。地球を自由に科学で操ることなど、今は、考えることもできないことです。地球は生きているのですから。昔から、神々という言葉で、人間は祈っていました。

《仏教は神々を、縁起の法により神々の場所に在らしめます。在ることも、無いことも神々の愛そのものとするなら、その愛は縁起そのもの。

在るものを在らしめる神々よ

在るものを無さしめる神々よ

無いものを在らしめる神々よ

無いものを無さしめる神々よ

空や山や川や海を、鎮めたまえ。町や建物、生きものたちの暮らしを平安に導きたまえ。》

結局災害がないようにと祈るほかにないことに気づきます。それは、人間の思い上がった心を見つめて、無力さからの力強い歩みを促すことでもあると気づきました。

《そして、この世界にあって、慈悲と智慧をつかさどるもろもろの仏たちよ。

思い通りに行かぬ苦しみを救うよう、どうかわたしたちの祈りや願いを 聞き届け給わんことを。

そして、慈悲と智慧を、人々に巡らせるもろもろの菩薩たちよ。

仏は、きびしさや一途さという我が心の鬼を造り、我が心の鬼は、優しさや受け容れるという我が心の仏を造ることを導き給え。

そして、この世界のすべてのひとたちの命を与え、家族から、仲間から、この地上から旅立っていった多くのひとたち。

また、さらにこの世界のあらゆるところで、お腹をすかせている人たち、お腹をすかせて亡くなった人たち。

欲張りな人たち、欲張りなままに亡くなった人たち。

不幸な人たち、不幸なままに亡くなった人たち。

怒っている人たち、怒ったままに亡くなった人たち。

悲しんでいる人たち、悲しんだままに亡くなった人たち。

すべてのいのちが 満たされて、やすらかになりますように、共に、真実に目覚めることができますように。

そして、この祈りにより、わたしたちの心に、慈しみ、あわれみ、共に喜ぶ心、とらわれのない心を巡らせたまわんことを》と、年頭に向かって回向いたします。

◎それぞれの足もとに、幸せが見つかりますように、気づくことを祈念申し上げます。◎昨年の一月護寺会便りNo.119に、落語の『らくだ』をのせました。そして最後の落ちは立川談志の、らくだがじっと雨を見つめるシーンに寂しさを重ねたものでした。怒り、悔しさ、情けなさ、必死さに、最後は涙と笑い。古典を現代の人情に仕立てた人でした。

陽岳寺護寺会便り 平成24年2月1日No.135

福は外、鬼は内

白隠禅師の著した「白隠禅師坐禅和讃の冒頭に、「衆生本来、仏なり。水と氷の如くにて、水を離れて氷りなく、衆生のほかに仏なし。」と説きます。

私もそうでしたが、自分のどこが、何が仏なのだろうかと問いが、含まれています。自分の境遇や持っているものを比較したり、その比較したものに振り回されてばかり、欲しい、うらやましいと。その欲しいとか、うらやましいの中身は、多くは金銭にかかわるものであるし、また、病気であったり、身体的なもの、生まれによるものもあるかもしれません。

2月3日は節分ですが、「福は内、鬼は外」と、まるで、節分のような自分自身の心の葛藤が見えるようになってきました。

小さい頃もそうでしたが、大人になっても、節分は「福は内、鬼は外」です。でもよく考えてみると、それを言わせているのは、自分の中の鬼ではないかと考えたこともありました。

もっとも、「福は内、鬼は外」と見えるようになっても、相変わらず自分の心の中には、「福は内、鬼は外」と染みついたモノの見方が住んでいるようです。

だからこそですが、例年の5月の陽岳寺のお施餓鬼でも、「仏は、きびしさや一途さという我が心の鬼を造り、鬼は、優しさや受け容れるという我が心の仏を造ります。このことが施餓鬼会をおこなう理由となるのでしょうか。」と言いつけています。

考えてみると、本当は福も鬼も心の中に一体として生きていることを思うのです。だから、いわせているモノは誰なのだと問うことに意味があると思っています。

何故なら、「福は内、鬼は外」と言わせ続けることで、人間の心の内に善と悪、綺麗なものと汚いもの、量の多いもの、質の高いもの、高価なもの、綺麗なものなどの選択を知らぬうちに染みこませている気がいたします。えり好みする習性を植え付け指すのではないかとです。

しかし、禅宗の世界に入って、そんな心の葛藤を見ることができるようになって、「福は内、鬼は外」であるものの、ただ、内と外にわずらわされていると、考えることができるようになり、幾分かは、楽になり、物事が見えてきたような気がいたします。でも錯覚かもしれませんが...

...

初期仏教のスッタニパータ、初期といっても、もっとも釈尊の生の声を反映したのですが、そのスッタニパータに、『慈しみの経』があります。

一切の生きとし生けるものは幸福であれ、安穩であれ、安樂であれ。

いかなる生きもの生類であっても、怯（おび）えているものでも、強剛なものであっても、悉く、長いものでも、大きなものでも、中くらいのもので、短いものでも、微細なものでも、粗大なものでも、目にみえるものでも、見えないものでも、遠くに住むものでも、近くに住むものでも、すでに生まれたものでも、これから生まれようと欲するものでも、一切の生きとし生ける

ものは幸せであれ。

何人も他人を欺（あざ）いてはならない。

たとどこにあっても他人を軽んじてはならない。

悩まそうとして怒りの想いをいだいて互いに他人を苦痛を与えることを望んではならない。

あたかも、母が己（おのれ）が独り子を命を賭けても護るように、そのように一切の生きとし生けるものどもに対しても、無量の慈しみの心を起こすべし。

また全世界に対して無量の慈しみの意（こころ）を起こすべし。

この『慈しみの経』こそ、どこにいても祈りの言葉となるものです。それこそ、仏壇でも、怒りや寂しさに覆われたときでも、自分の心を癒やしてくれ、そして自分の心を見つめさせるものです。

仏教の目指すものは、私もまだできないけれど、「福は外、鬼は内」ではないかと思います。そして、「誰もが幸せであるように」と、祈ることができるようになれることが、今、日本も世界も必要としていることではないかと思ったいます。

さて、釈尊仏陀は、誕生したとき、七歩、歩いて天を指さし、地を指し、「天上天下唯我独尊」と伝えられています。

人間一人一人、世界にあって個人の絶対の自由さを宣言するものです。しかし、自分の自由さなんて何もない。いつも他人の言うことばかり気になって、一つも自分らしきなどないぞと、思っていないでしょうか。このことは、自分のどこが何が絶対の個人の自由さなのかの問いにつながります。

鎌倉時代、栄西禅師の著した興禅護国論の序に、「大いなる哉、心や。天の高きは極むべからず、しかるに心は天の上に出づ。地の厚きは測るべからず、しかるに心は地の下に出づ。

日月の光はこゆべからず、しかるに心は、日月光明の表に出づ。大千沙界は窮むべからず、しかるに心は大千沙界の外に出づ。それ太虚か、それ元気か、心はすなはち太虚を包んで、元気を孕（はら）むものなり。天地は我れを待って覆載（ふさい）し、日月は我れを待って運行し、四時は我れを待って変化し、万物は我れを待って発生す。大なる哉、心や。」

人間の心は、だれでも、この自由さを秘めています。だから、正反対の心もあるのだと思っています。そして執着からくる不自由から脱するため、人はこの絶対の自由を手にいれようと、もがくのですが、この作業をやめたときこそ、実は、得ることができるのだと禅は主張しています。

2月3日の節分という節目、分け目は、そんな人間の心に、「福は外、鬼は内」こそが、天上天下唯我独尊と、切り替えるヒントを与えてくれるものでもあります。（和尚）

◎お彼岸は、3月17日(土)から23日(金)の期間です。

◎今年のお施餓鬼は、5月19日(土)第三土曜日です。今年は住職がお話しをいたします。皆様の参加をお待ちしております。

◎本山妙心寺団体参拝を考えています。日程は4月13(金)~14(土)、現地集合・現地解散です。13日の夕方、花園会館チェックインできるのは少人数。参加される方はお電話ください。先着数名です。

陽岳寺護寺会便り 平成24年3月1日No.136

昨年3月11日の東北地方太平洋沖地震から、約1年。人は、年単位で思い起こす生き物です。親しかったあの人がいなくなって何年でしょうか。現地にいるかたも、現地にはいないけれど日本という国にいるかたも、思いをめぐらし、般若心経をお読み下さい。 (副住職)

ゆるゆると、ゆるぎないところ、ゆるすところ ～3.11東日本大震災1周年回向

2011年3月11日午後2時46分。モーメントマグニチュード9.0の大地震が起きました。日本の三陸沖を震源とする地震と、その地震に伴う津波によって、多くの命が奪われました。

津波は、岩手、宮城、福島、茨城、千葉などの広い範囲に及びました。命を落とされた人々は、阪神大震災のときよりも多くなりました。戦後最悪の災害です。

その東日本大震災から一年が経ちます。

3月11日から、一日一日。1、2、3ヶ月、百日と過ぎ、半年が過ぎて。一年という時間は長かったでしょうか、短かったでしょうか。人が生きるということは、自分という経験で裏打ちすることとも言えます。その自分という経験は、時間という揺らぐ心そのもの。あるようでない、ないようである、揺らぐ心そのものですから、自分・人が生きるということは、確かなものだと自信を持って言うことが難しいことです。

人はいろいろなものに思いを馳せます。あの場所。あの匂い。あの音。あの時間。

その理由は、どうしても何かしらの意味をつけたがるからでしょうか。人は自分という思いを起こす生き物です。

大震災から今日までの時間の流れを、「もう」一年と考えるか、「まだ」一年と考えるか。どんな意味を見いだそうとしているのでしょうか。

私たちが感じるその時間の長さ・短さは、私たちの命から溢れる思いのたけです。

風評が流れようと、放射線が降ろうと、生きるのは私たちの命あってこそです。石にかじりついても、この心臓は、この身体は動こうとします。

考えもつかない事でした。映画や小説にあるような出来事。今見えているこの世界は何なのか。テレビやラジオや新聞で、私たちの目には見えるけれども、どこか遠い国のことではないか。

これからも続いていく人生のなかで、どうしても無視できないことはたくさんあります。

次から次へと目の前を過ぎ去っていく時間は、ひとつひとつ片付けていかないと、たくさんの宿題となって戻ってきます。どうしたらいいか。この問いこそが生きる力です。命そのもの。

大きな宿題となって私たち個人個人の判断に迫ってきます。新聞をとるにも、就職をするにも、お店で何か買うにも、人と知り合うにも。すべては、無関心ではられません。

しかし、どうすればよいのでしょうか。誰の言っていることが本当で、信じればいいのか、行動

すればいいのか。生きていけばいいのか。あまりの情報の多さに目を背けることも、逃げることもできず。どこかに正解があるはずだと、求め、彷徨う。

だれでも不安や恐怖を持っています。「目に見えない」「いつ来るか、いつ終わるか分からない」。自分にとっての拠り所を求め、彷徨う旅は、いつ終わるのでしょうか。

ここに一つの答えがあります。それは、「絶対の答えはない」ということです。同時にそれは、「人それぞれに、答えがある」とも言えます。

ある一定の答えが出るまでには時間が掛かります。何度も話し合い、聞くことです。話すということは、道を進むことだからです。そして、その道を進むまで、進む途中を、静かに見守りましょう。そのためには戒めを持って暮らしていくことです。

仏教では人が生きていくなかで戒めを持つようにといます。そして禅宗では今という一瞬一瞬を生ききるように！といます。

過去の歴史を学び、未来の暮らしを見据え、いまを生活すること。過去と現在と未来。過去は過ぎ去った事実であり、未来は未だ来ない事実ですが、いま目を閉じて思い出し、想像してみれば、過去も未来も現在という一瞬の時間に現われることに気がきます。この時間は、過ぎ去った事実も、未だ来ない事実も、私という存在のなかにいるということです。そこで戒めを持たなければ、振りまわされて自分という経験を積み重ねることさえ出来ず、捨て去ることも出来ない。

大地が揺れて、建物が揺れて、海が揺れて、世界・すべてが揺れました。考えても考えても、想定外のことは起こります。人が変わることは本当に難しいことです。いくら想定内を求めても、心の揺さぶられる力が働きます。そして、もとに戻ろうと、良くなったり、悪くなったりを繰り返していく。この揺り戻しがあるからこそ、人も町も強くなる。

失ったこともあるならば、得たこともあるでしょう。

揺れる心があるのだと。ゆるゆると生きていくのだと。それは、ゆるぎないところ。

人を・自分を思いやるところがあるのだと。それは、ゆるすところ。

ゆるゆると、ゆるぎないところ、ゆるすところ。

あまりの情報の多さに目をとらわれないで。目先の優しさにとらわれないで。

生きることに真剣に向き合っていれば、人間は自ずと変わっていく存在です。

すべては単純なことです。この身と心をもって、生きているという事実です。

生きることへの問いは、手近にある優しさだけでは説明できません。死への問いも含まれます。

もちろん安心と信頼は生きる糧ともなります。

なぜ生きるのか。偶然にも受けたこの生は、なんなのか。この命・人生は自分から生まれたいと望んで受けたものか。この命・人生をどのように受け取るのか。この偶然を素直に受け入れるだけでいいのか。その問いを、認識する機会を得たのだと。

この一年という区切りは、旅立った多くの人たちの命を通じた、大きな問いかけです。

オーストラリアの洪水も、ブラジルの洪水も、インドの寒波も、ニュージーランドの地震も、あれから一年です。過ぎ去った一年は、どこへもいきはしません。

いろいろなことが起こります。しかし具体的には知らないことばかりです。時は過ぎていきます。それでも私たちにとっては、毎年毎年、その日その日を暮らしていただくだけです。

そしてこの時間という事実には、人は思えることがあるのだと思います。ふと立ち止まって、言葉にしてもいいし、胸にひめて置いてもいい。もやもやしてもいいし、筋を通してもいい。

たしかに大きな出来事です。世界が変わるでしょう。そんな変わる世界を諸行無常といい、諸法無我を変わる自分といえ、目指すところの涅槃寂静とは私たちが戒めを持って暮らすこと。

それでは、これから般若心経をお読みします。この読経にのせて、この想いにのせて、ゆるゆると、ゆるぎないところ、ゆるすところを思い起こしてください。

この読経は、先に逝った多くの人達のためにです。そして、生きているものたち、日本・世界のすべてのためにです。みんなの、みんなにより、みんなのため、ご冥福、ご多幸、ご無事をお祈りいたします。 <読経 般若心経>

◎お彼岸は、3月17日(土)～23日(金)の期間です。◎今年のお施餓鬼は、5月19日(土)第三土曜日、今年に住職がお話しをいたします。皆様の参加をお待ちしております。

陽岳寺護寺会便り 平成24年4月1日No.137

悲しみの木

ユダヤの寓話に『悲しみの木』がありますが、その木は天国にあるのではなく、日本という国中にも、あるような気がしてなりません。

この寓話は、人が亡くなって最初にたどり着くところが、天国の入り口にある大きな木の下です。そこで天使が、生前にたどった人生のうちの多くの悲しみを書きしたためて、大きな木の枝に結びつけるようにと告げます。

死者は、過去を思い出して、その時々的人生の悲しみを思い出し、きっと意味を考えるのだと思います。そして、改めてその悲しみを書きしたため、木の枝に結びます。次に天使は死者に対して、他者が結んだ悲しみの内容を読むようにと告げます。死者は、きっと何日もかけて、人々の物語を読みふけるのでしょう。

そしていよいよ、死者が読み終わってみると、再び天使が現れ、「来世に生きたいと思う人生を、この多くの死者の悲しみの中から選ぶように」と進めます。

天使から進められる意味は、「悲しみの少ない人生」を選ぶことです。しかし、どの死者の魂も、最後には、自分の人生を、もう一度選ぶというのです。

人生とは、誕生から死に至るまで他者から限定され、他者を限定し続けた記録とも言えるものです。その他者は場所も時間も含まれていることに気づけば、。その場所で生きた自分であり、与えられたすべての時を含めての私といえます。

正月の門松である依（よ）り代（しろ）も、お盆による帰省も、亡くなられた祖霊・祖先たちの帰郷も、生き切ったその場所への里帰りです。

日本全国の祭礼も、すべては感謝祭でもあり、祖霊たちへのねぎらいでもありました。死者たちも、その死者たちに連なる生者も、その場所と、時間との営みは、一回性という命を生ききった営みです。

陽岳寺の法要の内容に、「百万回いきたネコ」がありますが、百万一回目にして一回性の生と死を手に入れた猫の物語でした。それだけ自覚しなければ、一回性の生として、命を見ることが難しい例えです。

一回性という特別な与えられた命は、過去の祖先たちから、未来のこの国に、地域に住むだろう人たちから、与えられた命です。生ききったからこそ、帰ってくると……

今、そのことを強く意識しなければ、この基本的な与えられた命であることを、そして与えられた命こそが、絆や縁という、世界との関係性の中に今を生きる自分の立ち位置であることを、忘れてはならないと言っているように思えてなりません。

生きるということは、それだけでも、責任の重さのほうです。何故なら、過去のそして未来の多くの人に支えられて生きるということだからです。

東日本大震災があり、人と自然に向かって襲う災害を、更に考えました。そして改めて、導いたことは正しいと思うようになりました。その言葉は……

《 仏教は神々を、縁起の法により神々の場所に在らしめます

在ることも、無いことも神々の愛そのものとするなら、その愛は縁起そのもの。

在るものを在らしめる神々よ

在るものを無さしめる神々よ

無いものを在らしめる神々よ

無いものを無さしめる神々よ

空や山や川や海を、鎮めたまえ。

町や建物、生きものたちの暮らしを平安に導きたまえ。》

この東日本大震災にて、祈りしかないことを思います。もちろん、災害に対する備えとか、人の知恵で備えをすることは、必要なことです。それでも、どうにもならないものが、在るものを無さしめる、津波も地震も在るものを無さしめました。

気づいたこともあると思うのですが、在るものが在るということが、亡くなった命を目の当たりにして、生き残って、何故と悩んだ人が多くいたことが在るものが在ることです。こんなに不思議なことはない。

ただ、ただ鎮めたまえと、人の知識と科学、全身全霊をかけても、どうすることも出来ないとき、人には、祈りしかないことが、はっきりと示されたのではないのでしょうか。

祈りとは、求めることでもなく、お金で買えることでもない、祈りが私たちを助けてくれるとは、祈られていることの自覚です。

仏教用語として、「阿吽（あうん）」があります。「阿」は万物の始まりであり、一として最初、あるいは一より上はないものとして無限、根源として、宇宙や天地の根元として意味をもたせています。理念の本体ともいわれています。「吽」は究極であり、終わりに相対する意味です。

阿吽は、創造・維持・破壊、始め・継続・終わりとして、ものごとの根本の原理であるという。その他に、阿は悟りを求める心、吽はその結果として涅槃があります。また出入の息として、阿吽の呼吸として、阿は吐く息、吽は吸う息もあります。相撲の仕切りは、阿吽の呼吸が立ち会いに求められます。

阿吽は、相対する二つのものを、一つとして表現する語として、始めと終わりという非連続の連続です。その最たるものが「出る息は、入る息を待たない」です。また、過去と未来という時間を含めて創造・維持・破壊を含んでいます。

《 そして、この世界にあって、慈悲と智慧をつかさどるもろもろの仏たちよ。

思い通りに行かぬ苦しみを救うよう、どうかわたしたちの祈りや願いを 聞き届け給わんことを。

そして、慈悲と智慧を、人の心に巡らせる、もろもろの菩薩たちよ。

仏は、きびしさや一途さという我が心の鬼を造り、我が心の鬼は、優しさや受け容れるという我が心の仏を造ることを導き給え。

そして、この世界のすべてのひとたちの命を与え

家族から 仲間から この地上から旅立っていった多くのひとたち

すべてのいのちが 満たされて、やすらかになりますように

共に、真実に目覚めることができますように

今、祈るわたしたちの心をなごませてくれますように

そして、供養するわたしたちの心に、慈しみ、あわれみ、共に喜ぶ心、とらわれのない心を巡
らせたまわんことを。》（和尚）

◎5月19日第3土曜日、お施餓鬼会は、午後2時からです。参加をお待ちしています。

◎今年の春彼岸は、「暑さ寒さも彼岸まで」とはいきませんでした。季節の気まぐれな
のでしょうか。それでも、ほとんどのお墓は、お花が春の訪れを告げていました。

陽岳寺護寺会便り 平成二十四年五月一日 No.138

本山妙心寺 団体参拝

4月13日～14日、京都妙心寺へ団体参拝をしました。

13日夕方、妙心寺隣の花園会館ロビーに集合。

翌朝、午前9時 微妙殿にて妙心寺住職 河野太通師を導師に迎え、法要を勤めました。

法務御多端のなか、宗務本所の和尚様方にもご出頭頂きました。

法要後、案内係の和尚様に導かれ、山内参拝へ。庫裡（住まい）・方丈・浴室（明智風呂）のなかを見学。

そして、通常は入ることが出来ない場所を案内していただきました。

ひとつは、妙心寺の開基 花園法皇さまの御殿である玉鳳院。

もうひとつが、隣接している妙心寺山内で最も古い建物で、妙心寺の開山 無相大師を祀るお堂である開山堂。

檀家総代の宮坂氏の推薦により、その後、伏見へと移動。昼食をとり、酒蔵・寺田屋などを見学しました。

そして天明 伏見義民伝のご縁がある御香宮神社へ。

33代目宮司の三木善則氏にご祈禱、またお話しをうかがいました。

平成に入ってから修理をして、極彩色が復元された本殿。神輿祭の期間のみ特別公開される通称「千姫神輿」など拝見しました。

なお御香宮では、「伏見義民顕彰碑」があり、毎年5月18日、慰霊祭が伏見義民顕彰会などの方々により執り行われています。

陽岳寺の本堂前にある碑は、京都伏見の町人七人衆の代表3人（文殊九助・丸屋九兵衛・麴屋伝兵衛）のお墓です。

たいへん有意義な二日間でした。第2回 団体参拝をお楽しみに！

すなお

人は生きている限り、多くの刺激を受けています。

その刺激の「差」を比較して優劣をつけず、ただあるがまま受け止めるにとどめよ！と仏教は説きます。

人生山あれば谷あり。良いこともあれば、嫌なこともあるでしょう。
自分の気持ちがコロコロと変わるように、自分のまわりも変わってしまうものです。
それでも、どうか自分の思うようにと願ってしまうのが人間なのですが。そして思うようにいかないが為、苦しむ。

では、どうしたらいいかと考えます。
その答えの一つは、私たちが本来持っている、素直さを思い出すことではないかと。「差」を「差」として認めるということ。

『ダイバーシティ』という言葉があります。その意味は、『多様性の受容』、アメリカが発祥だそうです。

人種や宗教、性別などの差を「差」として認めつつ、全体として調和のとれた世界をめざそう！という理念から生まれたと考えられています。

素直になれ！と言われても、素直になれないものです。それでも、私たちは素直であったはずなのです。

その素直さを思い出せば、人間の生活への見方が変わります。

仏教の語る世界観は、私個人だけで存在するものなど無いと示します。
そこにあるのは関係性、縁起です。

自分と家族。日本と外国。地球と宇宙。人間と自然。内と外。
関係性のつながり、その境はあいまいなものです。
だからこそ時と場合によって、それぞれ同じ場所が際立って見えたり、違う場所が際立って見えたりします。

すべては全体を含めてのことです。
ものごとの本質は、周辺事情でしかないのではと思います。

あいまいな境は区別することで分かりやすくなるかもしれませんが。しかし、感情や理性を超えたところを見ると。

想定外と想定内の境は明確でしょうか。スイッチのオンオフ、0か1、正解か不正解。
以上の関係性は互いがあってこそ存在します。では、グラデーションと見ては。

私個人だけでは存在できないからこそ、関係性によって形作られる。

その姿を素直な気持ちで見れば。

どうしたらいいか。素直さから起こる、その問いこそが生きる力なのでしょう。

(副住職)

◎陽岳寺史上、初の団体参拝でした。

◎ご意見・ご感想お待ちしております。

●訂正●No.137裏面17行目『「始め」→「終わり」に相對する意味です。』

陽岳寺護寺会便り 平成24年6月1日No.139

魚は水を出づれば忽（たちま）ち死す

道元禅師の、正法眼蔵現成公案という文章の中に、「魚は水を出づれば忽ち死す」と書いてあります。魚を人に、そして魚に相對する水を、空気や人の生きる条件のものに当てはめると、かえって平凡な言葉こそ、真実を現していると思うのです。人と空気、人と環境、人と自然と言葉を代えれば、生命論の決まりごとが見えてきます。

気象庁は5月16日に、岩手県大船渡市の二酸化炭素の濃度が、月平均400PPMを越えたと報じていました。この結果は森林破壊や地球環境をより悪化させ、化石燃料の消費を強く抑制しないと、地球全体の温度の上昇を抑えることが必要です。だからといって、原子力に頼ることはできませんので、世界は節電を考えなければなりません。そのためには資本主義や功利主義の考え方を変えることが、未来の世界に対する私たちの責任と思っています。そして一人一人が、「これは地球にとって善いことであろうか」……と考えることが必要なのだらうと思っています。もしかして、人間の存在が地球を痛めていると思わないためにも。

中央公論の平成24年5月号に、作家の高村薫氏が、『だからわたくしは仏教に期待する』と、提言していました。

内容は、仏教の「縁起」という原理に、改めて注目することでした。世界は永遠の事象の連なりによって生成している。なぜ私は生き残り、「あの人」が死んだのか。そこに決定的な理由など存在しないのだと。

こう考えてみて、「縁起」の観念によって、発想の転換が起こったという。生きることと死ぬことが表裏一体だからこそ、「この命を大事にしない法はない」と感じるようになったといっていました。

お施餓鬼にもお話しいたしましたが、仏教の論理は、世界は相反して相對してあるという相即（そうそく）の論理です。

人は世界や環境の要素として含まれていると同時に、世界や環境を含んで人は、誕生し存在します。この関係の中は、含んでいながら含まれているし、含まれていながら含んでいるという事実です。

人間が地球に生き続けるかぎりは、環境を、世界を、地球を守らなければいけないことは自明の理です。自然に優しく、いたわることは、また自然から人間への優しさやいたわりに触れることだからです。何よりもこの事実気づくこと、ここからもう一度考えてみたいのです。

人間は、環境、世界、地球そのもの自身です。このことに気づけば、含むことによって、また含まれることによって、各々の人間が独立とした存在であることが理解できると思います。

人間の生きる根拠は環境にあり、同時に環境も人間の存在を根拠にしています。そしてその根拠の場所は、今とここにあります。その今とここは、今は過去と未来を含んで、ここは空（そら

)や地球内部、もしかして太陽や宇宙をも含んでいます。人間が如何に、そんなこと知らなくとも、一人一人の命は、こういう関係の中にあるということが、仏教の縁起論です。仏教の時間論は、今しかありません。

過去や未来、今にしかありません。これは現実です。このことは、過去は今をより所としてあり、未来も今をより所としてあるということです。

同時に、今は過去をより所としてあり、そして未来を寄りどころとして、今は在り、現在においてあるということです。

今しかない時間に、過去や未来が含まれているなら、過去も未来も変化するということです。

これは当然、放射線による汚染や二酸化炭素の400PPMは、地球を汚染していることだと注目すれば、電気代が安いとか、高いとか、石油や天然ガスがよいとか、考える前に、我々の未来も過去も、いまここにあることに気づけば、今、考えなければならぬことばかりです。

今しかない、だから、今楽しまなければならないとすれば、当然、何年、何十年、何百年、何千年後の未来は消滅した姿になっているでしょう。これは過去私たちが生きていた事実も生滅し、今の根拠である未来が無くなることでもあります。時間の生滅という破滅は、場所の喪失になつがってしまうでしょう。

今しか無いからこそ、考えて行為する自己を自覚することが仏教の縁起です。

仏教の縁起は、あれ在ればこれ在りは、あれ無ければ、これ無しです。事実の連なりというのでしょうか、でもですよ、一人一人、地球にとって、一つでも役に立つことを、汚している人間としては、徹底して考える時間を持つことは必要なことです。

お釈迦様は、本当にすごいです。

「人間は、その行為によって自己がある」と、「生まれによって、職業によって、育ちによって自己があるという考えはない」と。「行為によって自己がある」と。

手を洗う私、食事をする私、もちろん、私が手を洗うことなのですが、私が食事をするのですが、でもいつも、行為によって自己私があると、放射線の汚染を考え続けることによって自己があると。ボランティアするところに自己がある。

雑踏を急いでいて、肩がぶつかり、頭にきたからと、人をナイフで刺すところに自己があるでは、悲惨です。

だいたいナイフを所持して日常成り立っている自己も悲惨に思えるのですが、すべては行為によって自己、私があるわけですから、その私は、縁起によって成り立っている私であり、縁起をさらに動かす私です。反省というもつぐなうということに於いても、すべては、自己以外のものと相対する関係の中に流れる思いです。その思いは自分がつくりあげるものですが、仏教は、それを”我”とって、根源悪といたします。

縁起的に言えば、自己の人格も、自己が対象とする人格を認めるところに、あるはずなのです。真の人格とは、他者を含んであるわけですから。自己の人格の例から言えば、実は、自己を無にして、他者を認める、あるいは聞くこと、そのことによって自己の人格が成り立っている現実を悟ることもあります。

「魚は水を出づれば、忽ち死す」この言葉は、自己の有り様をまた語っています。

◎お施餓鬼の法要は、今年から5月の第3土曜日と変更になりました。大勢の皆様の参加により、お施餓鬼会ができましたこと、嬉しく思います。歴史の勤めですから.....私は。

陽岳寺護寺会便り 平成24年7月1日No.140

我性（がせい）

人の我は、もともと強いものなのでしょうか。釈尊仏陀は、「人は生まれによってあるのではない。行為によってある」と話されました。

そこにひそんでいる言葉を探せば、過去における生まれや育ち、環境において人は在るのではない、今ここに生きる行為によって在るのだと理解できるでしょう。だからこそ、今ここの行為を大切にしたいと.....

その行為に於いてある私は、単なる私でもなければ、単なる私で無いものでもありません。私と私でないものが矛盾を含みながら、同時に結合するところに、我々の行為があり、それが私となります。

法句経というお経の言葉です。

『施しても施したという思いを起さず、ことをなしてもなしたという思いを起さない。それは母親が一枚の着物を愛するわが子に与えても、与えたという心を起さず、病む子を看病しても、看病したという思いを起さないのと同じである。ただそれが賢いことであり正しいことだからするのである』と。

この一文から「看病するときは看病に徹して、人にもものを与えるときは与えることに徹して、行為に徹して生きなさい」と聞こえてまいります。それが賢く、正しいことだからなのですが、看病に徹する一つ一つに行為の中に、大丈夫だろうか、元気になって欲しい気持ちは既に含まれていると思えるからです。判断・吉凶・運命・善悪・損得による行為は心を起こしたものだ、禅宗から言うと「無心」ということでしょうか。

釈尊自身は、行うことは行うことに徹して、そこに何のものにも左右されない自在なる心があると指摘しながら、しかもその自在なる心には、動かされて行うことを含んでいることをも指摘するものです。

仏教に、随順因果（ずいじゅんいんが）という言葉があります。釈尊仏陀のことを、「大因果人」とお呼びいたしました。

因果とは、原因があって結果があるですが、これは小学校や中学で、理科の実験をした通りです。しかし、仏教の因果は少し違います。原因は結果という根拠を以っての原因であり、結果は、原因というものを根拠として結果であると考えます。

原因が先か結果が先かでは、結果は後ではなく、同時です。結果に於いて原因も成立していることが現実の有り様だと仏教はいいます。

男女が結婚したことによって、夫と妻になるわけですが、結ばれることでこの二人は、別々の妻と夫に分かれると解釈すれば理解できると思います。いつも、同時です。

さて因果に随（したが）って順ずるですが、“順”という言葉に反するものは、“逆”です。逆を根拠にして、却って順があると考えます。しかもこの随うという意味は、因果による行為を、好きや嫌い、損得勘定等々、心の中に思い描くことなしに、ただ随う、ただ動く、ただ作る、ただ聞く、ただ見る、ただ生きる、ただ助ける、ただ手伝う、ただ考えるということです。

因果に随うとは、今この文章を書いているさ中に、お寺の玄関のピンポ〜ンと、お墓参りのお檀家さんが訪れます。

お墓参りの方々は月命日、家々の亡くなられた方々の年に一回の祥月命日にお参りされる方もあります。毎週何曜日と決められて来られる方、思い出してときに来られる方々、孫が受験で、自分が入院して退院したので、父母が入院したのでと、各家庭の出来事の折々の吉凶の祈りの場所としても、思い出したもので……とさまざまです。

これを、随順因果のお墓参りと言ってもよいと思います。

外出しようと、今日の天気予報を見れば、お天気マークにより着ていく洋服を考えるものです。雨が降るから傘を持ったりと、外出を控えるのも、随順因果です。

出会う相手により服を着替えたり、お通夜に黒服を着せるのも、随順因果です。

自在に私の行為を変えさせるものと言ってもよいかもしれません。これを深信因果（じんしんいんが）とも言い、台所でネギを刻み、子供が受験勉強をする、ワイシャツを洗濯し干す、食事を頂き食器を洗う、薬を飲む、すべて随順因果にして、深信因果です。

お茶を飲むことも、電車に乗るのも、歩くのも、すべて随順因果であり深信因果です。

今あげたこれらの行為はすべて、私を動かすものに於いて動かされた私があります。子供が勉強するのですが、受験というものが子供を動かし勉強をさせます。行為は同じでも、随順因果とは自在でなければ、随順因果とは言いません。

しかも、この随順因果の交わる場所に時間があります。それは過去と未来が同時存在しているといえるでしょう。過去が今を動かし未来も今を動かし、今の行為に過去は変わり未来も変わります。しかも常に同時因果です。深信因果とは因果歴然（いんがれきねん）であり、明かな理だと……ここに因果必然の理があり、不昧因果（ふまいいんが＝因果をくらまさず）とは、因果の真理を明らかにするという意味です。明らかにするわけですから、断念するのでもなく、決めつけるわけでもなく、暑くなればTシャツを着て、冬になればセーターを着ることは、因果をくらまさずに、随順している姿です。

「お元気ですか」に、「おかげさまで無事に過ごしております」こそ、随順因果を語る言葉です。

昨年3月11日東日本大震災があり、想定外という言葉が脚光を浴びました。小泉純一郎「世の中には、マサカの坂がある」とも。これは世の中何があるか解らないし、一寸先は闇という言葉もありましたが、成るようにしか成らないし、成らないようには成らないものです。

火宅無常の世界に生きる智慧は、自己の内の我性に気づくことです。

白隠禅師や盤珪禅師も「我が身びいきをするな」と説いています。道元禅師は「わが心を先とせざれ」いい、聖徳太子は「それ事をば独断すべからず」といいました。

古人は「自見すれば必ずあやまる」いい、良寛禅師は「水の上に数書くよりもはかなきは、おのが心を頼むなりけり」と詠っています。

龍樹菩薩の悟りの言葉は「欲は苦の本、集禍の根、敗徳の実を危くすること、皆これより起こる」といい、「求むれば苦あり、求めなければ苦なし」と。臨済禅師は「求心やむところ、すなわち無事」と説きました。

「なりたいと幸せねがう人あれど、今の幸せ思う人なし」とありますが、真の生きがいや幸せとは、常に、今ここに在る私においてです。それは時計の針は回りますが、デジタルの時は数字を数えますが、実際の時は、現在から一歩も動かずに、時は流れて、流れないからです。

◎東京のお盆は7月13日～16日です。8月12日は富岡八幡宮神輿連合渡御です。

陽岳寺護寺会便り 平成24年8月1日 No.141

皆様にお送りしている小冊子「花園」は、臨済宗妙心寺派の宗務本所が編集発行しているものです。

鎌倉にある円覚寺も小冊子を編集発行しております。わたしのもう一人の師匠、管長・横田南嶺師が寄稿していました。

平成二十四年うらぼん号の全文を掲載します。

(中略～読みたい方は～お寺にお越しください～)

無事是れ絆

前にも書いた記憶がありますが、この護寺会便りが皆様のお手元に届くまで、寺族によるチェックがあります。

この141号は書き直して、三回目。まったくオッケーをもらえません。

えーこんな文章を載せるの？ちょっと重いんじゃない？話の筋が通ってない！本の目次を見ているようだよ！

ひどい言われようです。ごめんなさい。

それならばと、老師のお言葉を紹介することとしました。

円覚寺の夏期講座での、老師の言葉です。

『よく自殺の問題があると「いのちの尊さ」「いのちの大切さ」が声高に叫ばれます。けれども、ああいう言葉は、残念ながら叫べば叫ぶほど無力に思われるのです。』

昨年震災や、今年のいじめと、「いのちの大切さ」が問われます。

しかし問われれば問われるほどに、叫ばれれば叫ばれるほどに、本質がどこか置いていかれている様な気がします。

横田南嶺老師は、「無事是れ貴人」という言葉を紹介してくださいました。平素な言葉で分かりやすくです。

何かがあったとしても、ああよかった、無事だった。また、まわりの人のそんな思いに気づくことができれば。

すでにそもそも自分も皆も貴い人間なのだと。感謝の気持ちを手を合わせることで確かめます。

(副住職)

お知らせ

円覚寺管長 横田南嶺老師のDVD

が出来ました。

| インタビュー・私がいた修行道場 |
| の風景も紹介されています。 |
| (検索「臨黄ネット御用達市場→禅 |
| 文化研究所」) |

|
|
|
|
|
|
|
|
|

| <http://shop.rinnou.net/shop/A125> |
| [/QSgyt6ZbX/syoinfo/692](http://shop.rinnou.net/shop/A125/QSgyt6ZbX/syoinfo/692) |

|_____|

陽岳寺護寺会便り 平成24年9月1日 No.142

名前

仏教の開祖である「お釈迦様」は、いろいろな名前をお持ちでした。

「ガウタマ・シッダールタ」は、出家前の名前。

「仏陀（ブツダ）」は、サンスクリット語で、目覚めた人・体解した人・悟った者などの意味が、個人名化したもの。

「釈迦牟尼（しゃかむに）仏」は、釈迦族の聖者という意味の尊称。

「釈尊（しゃくそん）」「釈迦如来」「世尊（せそん）」など。

仏教という視点を外してみれば、彼は「（シャーキャ族の）王子」でしたし、「（妻子持ちの男）夫・父」でした。

なぜ彼はこのように色々な名前と呼ばれたのでしょうか。

それは彼が、私たちと同じ人間だから、縁という世界に生きる者だからです。

どんなものにも、名前や呼び名があります。

しかし、その名前や呼び名は、状況によって変化します。

たとえば、私は副住職ですが、「副住職」「新命（しんめい）さん」と呼ばれます。

住職は、「ご住職」です。

陽岳寺の和尚への視線のなかで、違いを探ろうとすると・・・こうした違いが呼び名にあらわれます。

しかし、和尚という視点を外してみれば、二人とも「向井さん」でもあり、「父と息子」ともなります。

名前や呼び名は、状況によって変化します。

相手を結びつきのなかで認識することによって、私も、相手も、お互いの存在が具体的になるからです。

相対することによって、はじめて名前が付けられるといえます。

会社なら、部下がいて上司がいる。店員やバイトがいて、店長がいる。

役割が名前となるもの。

さいたるものは家族の一員としての自分でしょう。

人は、親と出会えば息子・娘となり、祖父母と出会えば孫となり、兄と出会えば妹・弟となり、子どもと出会えば父親・母親となり、と名前や呼び名を変えていきます。

しかし、その関係性にある自分を見れば、親の前では息子・娘でしかなく。息子・娘の前では父親・母親でしかない。

夫婦も同じことがいえます。

妻と夫の関係はお互いがいてこそ、夫婦として認められます。

お互いを尊敬し、感謝をせずに、夫婦というかたちを取り続けることは難しいことです。

うつりかわる自分という存在を、確固たるものとして持ち続けることは大変なエネルギーのいることです。

尊重しあい、支え合うことは、その誰かと生きることを楽にしてくれるかもしれません。

韓国の法頂和尚の詩「存在に向かう生き方」、はじめの部分です。

命をあたかも所有物のように思いなすから

われわれはその消滅を恐れる。

命は所有物ではなく

瞬間瞬間にあることだ。

自分の名前。自分の役割。自分の命。

たしかに名付けられはしたが、世間の人は母親はこうあるべきだ父親はこうあるべきだとそう言うけれど。

命をあたかも所有物のように思いなすから、その消滅を恐れる。

このことは、私たちがある癖を持っていることを教えてくれます。

自分が自分であることを疑わないために、なんでも自分中心に考えてしまう癖です。

その癖とは、私たちと自然はどうやって共存してきたか、今日の私たちの歴史から地球の歴史を考える等の行為を断じます。

いろいろな名前や呼び名を持つということ。

生きるということは、姿や形を変えていくことです。

そのことに気付けば。

世間の言う、こうあるべきだという言葉に振り回されたりしないでしょう。

しかし、母親として父親として、自分として。瞬間瞬間あるように、なすことができるのではないかと。

思ったことがあります。

夫は朝行ってきますと仕事に出かける。妻は子育てに忙しく家にいる。夜、お腹はペコペコで、疲れて家に帰ってくると、ご飯の用意がない。

こんなとき。妻は家にいるのだから、外で仕事をしていないのだから、夫のためにご飯くらい作るべきだ・・・と非難するか？と。

子育ては大変です。家事も大変です。週に数日くらいなら仕方ないか？出前でも取るか？でも、ご飯くらい用意してくれよ・・・。そう思うのは人情でしょう。

でも、私たちは生きています。人情に動かされるのも私たちですが、考えることができるのも私たち。

さらに、そんな思いも超えることができるのも私たちです。

その命、役割、名前は、所有物ではない。あたかも所有物のように思いなすことを止めよと法頂和尚は教えてくれます。

私たちが自然にひかれるのは、こういう点なのだと思います。

風は「風の存在意義は云々」と思って吹いているわけではないでしょう。それでも、風は風自身ビュウビュウと吹く。風は風に没入しながらも、風としてあらねばならない姿にくらまされていない。

自然はもともとひとつです。

風によって種が運ばれ、雲がわき、雨を降らす。そよ風、はげしい風、冷たい風と徹します。

だから、その名前や役割に固執しても、無関係だと意気込んでも、自分ではない。

風は「自分は風だ」と思わないように。

名前は、物事を区別すると同時に、結びつけることでもあります。世界は一つ。

名前や役割を抛り所とするなかで、置かれた場所に徹することが自分となる。

名前や呼び名に没入しながらも、「こうあらねばならない姿」に自身を振りまわされない。「生きるわたし」でいたいと思います。

(副住職)

陽岳寺護寺会便り 平成24年10月1日 No.143

お彼岸の月（三月と九月）の護寺会便りには、お彼岸の期間はいつですよというお知らせを入れるのですが、先月号は忘れてしまいました。

今年の秋のお彼岸は、お中日が二十二日でした。

例年秋分の日は二十三日なわけですが、今年は百年以上ぶりに九月二十二日がお中日だったわけです。

みなさん、よくお参りいただきました。墓地は色とりどりの仏花により、お花畑のようでした。もちろんお参りいただけなかった方もいらっしゃいます。ご安心を。代参いたします、ご連絡ください。

みなさんがお参りされるのは、なんとはなしに・・・という方もいるかもしれません。でもきっと、畏敬の念からかと思えます。その畏敬の念とは。

畏敬の礼の心

言い間違えてしまう言葉ってあると思います。

私がよく言い間違えてしまうのは、「お見舞い」と「お参り」。

「ちょっと病院へお参りに行ってくるよ」なんて、言ってる側としては笑い話になりますけれど、言われる側としては笑えませんね。

全然違うものではないか。どうやっても間違えないだろう。とおっしゃる方もいるでしょう。

でも、私はよく言い間違えてしまう。どうにか直せないものかと。ここは一つちゃんと考えてみましょう。

「お見舞い」と「お参り」の違いって？

お見舞いにも色々あります。挨拶としてのお見舞い（暑中見舞など）、選挙の陣中見舞い。

一般的には、災難や事故などによる怪我を負った人・病人のところを訪れて、慰めることでしょう。「ちょっと病院へお見舞いに」という具合で。

お参りは、神社・寺院・教会・墓廟などの宗教施設を訪れて、神仏や先祖に拝んだり、祈ったりすることです。

慰めたり、拝んだり、祈ったり。その行為の違いもあるのでしょうけれども、ここで注目してほしいのは、その行為の向かう相手です。

お見舞いは、生きている人間に対する行為です。お参り・参詣・参拝は、神仏や先祖に対する行為です。

向かう相手が生きている人間か、神仏・先祖かというのは、大きな問題です。

後者は一方的な行為であり、相手の返事がないことがいえます。

かえって前者は、双務的で、お見舞いにたいして「ああよく来てくれたね」などと必ず返事があることが特徴です。

この点が、お見舞いとお参りの大きな違いでしょう。

行為から向かう相手を考えましたが、作法を考えてみます。作法とは、礼です。

礼や儀礼といった形式的な行為には、おおよそ二種類があります。一つは畏敬の礼、一つは和平の礼です。

畏敬の礼とは。

強いものや恐れおおいものに対する畏敬・尊敬の思い。この思いが形となったものが尊敬の礼です。たとえば、平身低頭し、三拝九拝したりする。神仏に対しても行いますし、人間に対しても行います。

和平の礼とは。

敵対する二者のあいだのもので、そして、休戦や平和協定をむすぶ。意見交換、交易をするとかたち。たとえば、警戒をゆるめている表現として、かぶとを脱いだり、頭を下げる作法。

そしてこの畏敬の礼と和平の礼は、時代を経るとともに、相互に交流し、同一になり別れては、発達していきます。

礼といえば孔子『論語』です。

孔子は『論語』のなかで礼の大切さを述べています。また、しきりに礼はその形よりも心が大切であるとも話しています。

あるとき弟子が孔子に聞きました。礼の心がけとは何ですか？と。孔子こたえていわく。

礼は、それ奢らんよりはむしろ儉め。喪は、それ易まらんよりはむしろ戚しめ。（八佾篇）

礼といい礼という。玉帛をいわんや。楽といい楽という。鐘鼓をいわんや。（陽貨篇）

人にして不仁ならば礼をいかにせん。人にして不仁ならば、楽をいかにせん。（八佾篇）

礼儀が大切だと言うのは、祭礼に用いる玉や織物のことではない。礼儀に付随する音楽もそうで、りっぱな楽器も太鼓を用意すればいいというわけでもなく、うまく演奏できればいいというわけでもない。

心がけのなっていない人ならば、礼をしたって無意味であり。すばらしい音楽を奏でてでも無意味である。

謙虚な心が肝要であること。心がけのなっていない人は何をしても無意味である。と。

祭礼を重んじることで敬虔の心をそだてるのが大切なのだと言うのです。

孔子のいう「礼」は、畏敬の礼としていました。人間同士の関係。君主と臣下との関係であってもです。

君主は臣を使うに礼を以てする（八佾篇）

ただそれは、畏敬の礼を君主は持つべきだということではなく。君主が自分を律するためのもの
でした。

孔子は礼は形よりも心であること。その心とは、「畏敬」であることを述べています。

後世、礼にとっての最要はなにか、と相互に交流し発達していきました。

礼は心が大事である。その心は和平の礼だ。いやまずは形あってのことだ。孔子にしか本当のところは分からないのだから、形だけしていればいいのだ。など。

そもそも孔子の礼楽尊重は、形ばかりにとられる政治から、文化的・徳治的政治を盛行するためでした。

肝心なことは、自分を律するためにも、祭礼をおこなう心は畏敬の礼であることです。また、人間同士においても、やりたい放題にならないように、敬の心をもつほうがいい。自分のためにと

礼の第一は、天と宗廟に対してです。恐れおおいもの、神や精霊や靈魂に対する畏敬の念です。畏敬や感謝の気持ちの大切さを、孔子が述べてくれているような気がいたします。

そう考えると、お見舞いもお参りも、たいして違いはないのではないかとも思うのですが・・・
でも、病院へのお参りはちょっと変ですね。（副住職）

陽岳寺護寺会便り 平成24年11月1日No.144

「こわれゆくもの」

私の母は、父が元気だった頃から、洋裁に刺繍や編み物など、手もとで黙々と進む針を見つめながら日々を過ごしていました。私が幼かったころ着ていたものは、みな母の手作りでした。

その頃、私は、陽が落ちるギリギリまで原っぱや河で遊んでいたことを思い出します。 中学校の国語教師をしていた父の帰りを待つ家族にとって、それは普通のことだったと記憶しています。母は、料理に掃除とこなしながらも、家計を助けるためもあり、洋裁で親しかった方の洋服も含めて、ミシンを踏む音が、母がいることの安らぎそのものでした。幼かった頃、その母のそばで、寝転びながら洋裁雑誌や本などを読む私がありました。もっとも和服だけは、母の妹の幡屋と染め屋から、姉が仕立てたものを母は着ていました。

母の姉や妹が来ると、長い時間、お茶を飲みペチャクチャ、ペチャクチャ話に切れのなかったことを思い出します。そんな母の兄弟姉妹も、父の兄弟姉妹もすでにいません。

そして父や母も居なくなり、今年は前住職の宗直和尚の27回忌、母八重子の13回忌に当たります。私の姉たちと家族だけの法事となります。

母が父を亡くしてから、刺繍や編み物の縫い針の一目一目に、時間が進む日々を過ごしていました。編み物は、ほどいては編み直しの、その一目一目は、編み物が出来上がって時間と共に、父と遠くなっていく時間だったことを、母のメモを見てハッとした、私の時間でもあります。一目一目、ほどく時間は一瞬ですが、思いだして見ればアッという間の時間です。

そのアッという間の時間は、今「こわれゆくもの」考える時間でもあります。そしてその「こわれゆくもの」は考えることは創造の時間でもあります。

何が人を動かすのか、動かされた私から考えて思うことは、文章を書き出した私は、今日は副住職が鎌倉円覚寺に出かけたことが動かしたのか、すでに2回、副住職が陽岳寺便りを書いたことによるものか、父母の思いが、今を書かせるのか、すべてがつながって今を動かせる縁起を考えるのです。

その縁起からいわせると、今モノがここに有るということ、この事実は疑いようもない事実なのですが、父や母がいなくなって見えてくることは、「こわれゆくもの」として有ることが在るということなのです。

言葉を変えれば、滅びるもの、砕けるもの、傷むもの、消耗するもの、現在するすべてのものは移りゆくことにおいてある。だから、こわれた時にこわれたのではなく、こわれることを含んで今ここに在るということが、有ることの在るという気づきです。

思い出そうが、思い出さなくても、世界の時間はこうして、一針一針の動きに世界という空間を織りなしていますが、そのことが、こわれることに於いて、創造を成り立たせていることも見えてきます。

10月半ば過ぎ、27年ぐらい前でしょうか、お会いしたことがあったのは。93歳にして亡くなった女性の訃報を頂きました。そして息子さんの奥さんに、93歳で亡くなられ方の話を聞きながら、お話しの内容は、義理の母への感謝の言葉ばかりでした。

葬儀の内容の一部を記します。

《 関東大震災では芝で、三河島に転居し、錦糸町の家のあるじに嫁いだものの、三月十日の東京大空所は、リヤカーに荷物を満載して、錦糸公園に逃げ、火の粉を払いながらも生き抜いた強さをひそめています。

この生き抜いた芯の強さは、この頃の年代にとっての青春とは、貧しさと震災と戦争の中にあつたことを忘れてはならないと思うのです。

そんな義理の母にとって、戦災の記憶は、「母にはないのです」と奥さんいいます。「憶えていないのです」と。

焼けただれて真っ黒になった死体がゴロゴロと転がっていたり、戦火に逃れたものの亡くしたものを探して漂う人々、炎がおさまっても煙や灰、匂い、河に漂う悲惨な風景など……

ひどかったのだろうか、憶えていないと。あえて記憶を消そうとして消したのか。友達は、戦火の惨状を語るが、お母さんは話さない。

三月十日と言うけれども、それ以前、日本は十五年にわたり戦争をしていました。新聞は戦争を勝った、進んだと報道するけれど、庶民の生活は苦しくなるばかりでした。

そして戦火に焼かれて、浜松に疎開して、ご主人の復興への踏ん張りとお母さんの支えがなかったら、今の子ども達や孫たちひ孫達の運命はどう変わっていたでしょうか。

そして、あつという間に、三十九年が経ち、ご主人が亡くなりました。当時六十九歳でした。

お母さんは、きっと心の中で「ずるい」と思っていたに違いない。その時、お母さんは六十五歳でしょうか。子ども達も成長して、孫たちにも囲まれていても、これから老後を二人で、楽しく過ごせると思っていたのではないのでしょうか。

あの関東大震災、そして十五年にわたる戦争、戦後と、日本が復興へと歩むなか、二人はがむしゃらに働いてきました。

たとえ大勢の家族に囲まれても、寂しさは表裏一体に影をひそめていたはずです。

ご主人亡き後、お母さんは、家族の中で自分の居場所を定めて、やさしく、家族を見守るとことに、自分に課したのでしょうか。それが、ご主人亡き後の自分の勤めだと。

時は、五年、十年、二十年と休みなく進みます。家族にかこまれての生活が続きます。あれから二十八年です。

お嫁さんが言いました。「お母さんは、本当にやさしく、子ども達や孫達、曾孫達が集まると、ニコニコ、ニコニコ、楽しそうに見つめていました」と。》

お母さんは、そのご主人を亡くしてから、家族の中であらためて自分の居場所を探しました。その場所は、お嫁さんを活かす場所だった。そして亡くなってみれば、活かされたお嫁さんの口から、感謝ばかりが口に出ます。

そんな家族の孫たちやひ孫達の子ども達に、この祖母がいて、祖父がいて、今の君たちの命があることを伝えたかったし、人は、ほろび、こわれるものを含んでいるから、力強く生きること

ができると伝えなかったのです。お母さんは奥さんを活かすことにおいて、新たな命を与えられ、生ききったといえないでしょうか。過去と未来からの縁起という贈り物を真摯に受け止めることで、人は輝くと……。こわれゆくものを自覚した美しさは活かされて生きるという姿なのだ、つくづくと思うのです。 (和尚)

◎ご祈祷会は、平成24年11月25日(日)午後2時から法要です。その後、落語となります。お寺はお檀家さんの喜捨により成り立っています。よろしく願います。

陽岳寺護寺会便り 平成24年12月1日 No.145

平成二十四年度 ご祈祷と演芸会無事円成

ご祈祷と演芸会（三遊亭円橘師匠による寄席）、今年も皆様のおかげで無事円成の運びと相成りました。本年の感謝と、来年の無事とご多幸を祈念して、法要を行いました。

十一月最終日曜のご祈祷と、五月第三土曜日のお施餓鬼は、陽岳寺にとりまして大切な行事です。

大勢のお檀家様がお集まりいただきましたこと、誠に有難く、厚く御礼申し上げます。有り難うございました。

一家に一冊ということで、「いろはにほへと」をお土産にお持ち帰り頂きました。
わたしのもう一人の師匠である、鎌倉 円覚寺管長・横田南嶺師が毎月第二日曜にしている説教、在家の方向けの坐禅会での講座の内容等をまとめたものです。円覚寺山内の様子や、僧堂の風景を写真でも紹介しています。

年忘れ

もういくつ寝るとお正月～♪
十二月に入りました。あと一ヵ月で二〇一二年も終わります。
年末、会社や地域の忘年会に参加される方もいらっしゃるかと思います。
忘年会には、家族や仲間と、この一年の労をねぎらったり。仕事納めの納会的な意味合いがあるようです。無礼講といって、羽目を外しすぎてしまうことも。

禅宗の寺院には、玄関にこういった文字が書いてあることが多いです。
『照顧脚下（しょうこきゃっか）』
『看脚下（かんきゃっか）』
陽岳寺の本堂にも、この言葉の書いてある板が置いてあります。この言葉には、ひとつの逸話があります。

とある老師と弟子たちが、夜道を歩いていました。
灯していた明かりが風によって消えてしまい、どうしたとか。老師は弟子達に「さあ、どうする！」と詰め寄ります。
一人、また一人と答えますが、老師は認めてくれません。この暗闇に満ちた世界をどうやって歩んでいくか。

そして最後の一人。彼はただ「看脚下」と言ったのでした。暗いの中から、足下をちゃんと見て歩いていけばいいではないか、と。老師は、その答えに頷いたのでした。

後に、この弟子 圓悟克勤禪師は、『碧巖録』という書物の第一則に、「知らず、脚跟下に大光明を放つことを」と著わしました。

この逸話。なにを当たり前なことを、と思うでしょう。頼りになる明かりが消えてしまったのなら、つまづかない様に気をつけなければいけないかと。

お天道様のもとでなら、そう思うことができるかもしれません。人間は暗闇を恐れます。知らない、分からないという闇です。お先真っ暗とはよく言ったものです。

昨年三月におきた震災、原発や日本の行方。また、悲しみにあふれ、一体これからどうすればよいのかと途方にくれるような時。立ちすくんでしまうこと、身動きがとれなくなってしまうこと。多々あるはず。応分にして、こういう事は忘れたところにやってくる出来事です。

そしてそれは、必ずやってくる出来事でもあるのです。それが今・このタイミングでやってきたということ。

そんな時。今・ここですべきことは何か？立ち止まって考えるべきことは、つまづかないように気をつけて行くということです。今しかないことです。

『照顧脚下』、足下を照らし顧みる。

この足下とは、今、ここ（に立っている）、わたしです。そこから、今・この場所までの歩んできた道のりをも指します。そして、これからの道についても。

足下だけを指さないのです。足下ばかり見ているはダメで、世界全体を指す。

年忘れ・忘年会。忘れることで人間は生きていくことが出来ます。忘れることは力にもなり、忘れないことの大切さも力となります。

しかし、大事なことを忘れてしまうことだってあるはずで。

即今只今、足下を見よ！と。禪宗は、日常の中で真理を具体的に見ます。

べつに年末になったからといって、一年を振り返らなくてもよいわけです。いつの間にか、もう年末。そんな時、せめて年忘れを、という願いなのかもしれません。

今年一年を振りかえり、したこと・したかったこと。ちょっと待てよ、と・・・立ち止まる。そうして、心にゆとりが出来れば自分自身の姿もよく見えてくるでしょう。

来年もよい年でありますよう、祈念申し上げます。（副住職）

◎ご祈祷会にて祈願した御札と、来年の年回忌のお知らせを、後日郵送します。

陽岳寺護寺会便り 平成25年1月1日No.146

花となって咲き、山となってそびえ、川となって流れる

《東北地方太平洋沖地震と津波の影響で、この世と引き裂かれて亡くなられた方々、今も多くの悲しみを秘めた心から苦しんでいる方々、未だにどうしてよいのか立ち直れない方々、そしてあれからずっと時が止まった方々、その方々のために「忘れない、東北！」という思いが寄り添うことになると思っています。

今も避難している方々、除染、復興にたずさわる多くの方々、津波にも地震にも被災しなかったけれど、痛みとして心がふるえ、見守ってくれる方々。その方々のために、今も「頑張れ東北！」という思いが必要と思っています。》

2011年3月11日を一週間ほど過ぎて、昨年12月まで、一般の法事はすべて、毎月内容を変えながらですが、震災をテーマにした内容にて法事をおこなってきました。

年回を迎えて、或いは先祖供養追悼法要の中に、2万人という死者と行方不明者の無念を込めたためです。もちろん、回忌に該当する方に感謝を捧げるとともに、ご冥福を祈ったことはもちろんのことです。

陽岳寺の法要の始めのお経は般若心経です。その般若心経は、私たちを含めて世界の一切の成り立ちを説いた縁という結びつきと、その結ばれ方を説いたお経です。これは、生きている人にも亡くなった人にも唱えてよいはずだと強く思うようになりました。そこで、参詣された家族・親族のためにも、ご多幸、ご無事、ご健闘を般若心経にてお祈りすることを続けました。

東北に親戚をもつ家族は、この法要に参加して驚き喜び、涙を流した方々もいました。津波や地震で亡くなられた家族・親族を持つ方々、被災地の復興除染の遅れを手を貸せずに見守る方々、非難したままの方を親戚に持つ方々とさまざまですが、東北に生きる方々のためにもです。

時間の経過は早く、この正月で1年と10ヶ月になります。被災地にも平等にお正月は訪れます。けれども、東北の森や川や海、そして町が元通りとは言えないが、安心して暮らせるように復興を終えて正月を迎えられなければ、私たちの暮らしも、震災以前の普通さで過ごすわけにはいけないことだと思っていることを伝えたい。

さて、ノートルダム清心学園の理事長であり、シスターである渡辺和子氏が、若かりし頃、自信を喪失し、修道院を出ようかと思いつめたとき、一人の宣教師が一つの短い英語の詩を渡してくれたそうです。それが、「置かれたところで咲きなさい」という言葉だったそうです。キリスト教では、「始めに言葉ありき」というように、絶対の神と、揺れる心の私との絆こそが、置かれた場所で咲く私となります。これは神との契約です。それは私を絶対に越えたものです。

しかし仏教では、「如是我聞（ニヨーゼーガーモン）」というように「聞く」という受動的な行為をまず中心にすえます。良心の声、自然の声、声なき声を聞く、あるいは真理という具体的事実として世界を見ることこそ東洋の智慧として、仏教の縁起を諦めるということが根底にある

と考えています。それはつながりによって生きることですから、その繋がりには横の広がり、時間の関係において変化する置かれた場所で咲いていることを意味いたします。

そして、仏教の縁起は、「私は私でないことによって、私である」と論じています。それは、絆という関係の中で、私の根拠は、私にないことによって、私であるということです。聞くということは、本当の私の有りようとして、「有から無へ、無から有へ」ということです。

絆は、結ぶことです。縁起の縁も結ぶことです。絆の根拠とは、結ぶことで、同時に結ばれている自覚を持つことでもあります。しかも、絆の中身は、お互いが独立とした関係に於いて、別の言葉で言えば、認め合うことにおいて、または、他者に於いて成り立っている自分を知ることでもあります。そして、その関係は、相反するものが、互いに独立して限定し合って、縛られない関係の事実が、現実の姿のはずです。

人は世界や環境の要素として含まれていると同時に、世界や環境を含んで人は誕生し存在します。

この関係の中身は、含んでいながら含まれている。見守っていながら見守られている。包んでいながら包まれている。部分で在りながら全体である。結ばれているから分離そして独立している。離れていても連帯している。選んでいながら選ばれている。失っていながら得たモノが有る。生きていながら生かされている。無心となっていながら満ち足りている。色即是空・空即是色。この矛盾する関係の中の、有り様の同時という視点こそが、揺れる心の無常世界を生きる仏教の智慧です。

仏教は、現実の今の具体的事実を考えます。人が生きることには関係を結び結ばれて生きることですから、その関係の中は、縁起に於いて成り立っている事実を知ることが、仏教の生きる視点になります。

つながりの中の一と全体という関係です。

山田無文老師はそのつながりという全体の中で、花となって咲き、山となってそびえ、川となって流れるといい、或いは、腹がへった、眠たくなった、憎い可愛いと咲いている私を表現しました。

震災より、1年と10ヶ月がたとうとしています。未だに余震のような地震があり、関東や南海地震、西日本地震が近い将来必ず起きると言われています。

今年も法要の結びとして、『神々、佛、美薩たちへの祈り』の廻向を唱えます。

《 在ることも、無いことも神々の愛そのものとするなら、その愛は縁起そのもの。

在るものを在らしめる神々よ、在るものを無さしめる神々よ

無いものを在らしめる神々よ、無いものを無さしめる神々よ

空や山や川や海を、穏やかに安んじたまえ

町や建物、生きものたちの暮らしを平安に導きたまえ

そして、この世界にあって、慈悲と智慧をつかさどるもろもろの仏たちよ

思い通りに行かぬ苦しみを救うよう、どうか私たちにとって、苦しみの根源を見極める祈りや願いを 聞き届け給わんことを

そして、慈悲と智慧を、人の心に巡らせる、もろもろの菩薩たちよ

仏は、きびしさや一途さという我が心の鬼を造り、我が心の鬼は、優しさや受け容れるという我が心の仏を造ることを導き給え

そして、この世界のすべてのひとたちに命を与えられ、

家族から 仲間から この地上から旅立っていった多くのひとたち、

すべてのいのちが 満たされて、やすらかになりますように、

共に、真実に目覚めることができますように、今この法要に集い、祈るわたしたちの心をなごませてくれますように

そして、供養するわたしたちの心に、慈しみ、あわれみ、共に喜ぶ心、とらわれのない心を巡らせたまわんことを》

(和尚稽首)

◎旧年から新年に変わっても、国の借金がなくなるわけではない。であるけれども年号の 数字が変わることで、この国の誰もが、何か新たな暮らしを夢見ることができるのです。

陽岳寺護寺会便り 平成25年2月1日 No.147

聞く力

聞く力とは、自然や大いなるものと一つになる力のことです。

そして、その力を私たちは皆持っている、そう思います。

寄物陳思、きぶつちんし。

物に寄せて思いをのべる、という心理があります。万葉集にみえる、和歌の技法のことです。

これは、恋心を自然の情景にたとえてうたうこと。人を恋しいと思う気持ちを、波や花に託してよんだそうです。

単純に「好きだ！」と言葉でダイレクトに伝える。強い主張をこの技法からは感じられません。

自分はこのような気持ちでいたのだ、という証明が奥に見えます。

ひとつ例として紹介いたします。

「夏の野の 繁みに咲ける 姫百合の 知ら得ぬ恋は 苦しきものぞ」（大伴坂上郎女 巻8～1500）。

「夏の野草の繁みに埋もれて咲いている姫百合の花のように、相手に知られない恋は苦しいものだ」

現代の我々にはまわりくどいように感じる寄物陳思。

この和歌をみますと、聞いてほしい、わかってほしい、あなたに聞こうという姿勢になってほしい。という願いを感じないでしょうか。

また、人間という小さな存在の発する、少ない言葉よりも。自然という大きな存在に重ねること、表現に深みや厚みを出すことができるようにも。

なにか大いなるものの声を「聞く力」を持つ日本人だからこそ。この和歌を詠むことが出来たのでしょうし、和歌から自然の声をきくことができるのだと思います。

この「聞く力」の大切さを、お釈迦様は説いている。そう考えたことがあります。

二月一五日は御釈迦様の命日とされています

入滅の前、弟子たちに請われ、最後の説法をしました。それが有名な『自灯明、法灯明』です。

『汝らは、みずからを灯明とし、みずからを依処として、他人を依処とせず、法を灯明とし、法を依処として、他を依処とすることのないように。』

『身体について...感覚について...心について...諸法について...（それらを）観察し、熱心に、明

確に理解し、よく気をつけていて、世界における欲と憂いを捨て去るべきである。』

他への依頼心を捨てよ、とおっしゃったのです。

法を、仏の教えととるか、世の理ととるか分かりますが、これで絶対だ・ずっと手をかけずにいてもよいというものはない、ということです。

究極に言えば、いままで学んできた仏教の教えに頼ることさえも止めよ、と。

私は御釈迦様の教えを聞いて実践している、だからこのまま行じていけば大丈夫という慢心が生まれるかもしれない。

お釈迦様は、そのように危惧したのではないかと。

諸行無常、世の中はすべてうつりかわる。うつりかわるどんな時代においても、暮らしていく真理はある。世の理をあるがままに見よ、聞けよ、と。

その時代時代の声を聞いていきなさい。そういう見方ができないでしょうか。

聞く力は、もっと些細なことにも当てはまるわけです。

たとえば、茶室へと続く露地にある留め石。竹をつかった柵。

「これより立ち入り禁止」と書かれていませんが、そのサインをうけとめることができるのは日本人だからです。

鎌倉にいたとき、外国からの観光客はみんな理解できず、またいで中へと入っていました。

線引きがされている、ここから先は何か違う空間ではないかという感受性です。

外国からの観光客だけではなく、日本人がサインに気付かない場合もあります。

ただその感受性も、使わなければ磨かなければ、くもっていくばかりかもしれません。

テレビでは、CMも番組もうるさくて仕方ありません。あなたが聞かなくてもいいから話しますとばかりに。作った笑いは際たる例です。CMでは、なぜ貴方が・・・と出てこなくてもいい社長が悪目立ちしています。

「三方よし」といいますが、買い手・売り手、そして世間の三方がよかったよかったと納得できなければ商売ではない、という考え方があります。

本当にうるさく、短い時間だから我も我もと言葉や音楽をぶつけてくる印象しか持てません。世間は眼中にないようです。私と貴方が良ければ、別にいいじゃないですか、と。

慣れてしまえば楽かもしれませんが、作られた笑い声にひきづられた笑いは、本当に自分のものと言えるか・・・。

静かなメッセージを聞く耳を持っている私たち。

言い換えてみると、静かなメッセージに気付くことができる。気付く心を持っている。その心と身一つにすることができる人間。つまり、静かなメッセージと一心同体になることができる私

たち、とも考えられないでしょうか。

はじめに挙げた寄物陳思とは、恋の感情を自然のものに例えての表現です。自分を自然に重ねるわけです。

しかし、本当にそこには「いまの自分」があるのでしょうか？

言葉がものや自然に魂を与える、と言えますが。そのなかに私はいるのでしょうか？

自然に託した和歌の中の私から、恋心を抜け出ているのいまの私です。そうでなければ、自然と一体にはなれないからです。

「相手に知られない恋は苦しいものだ」という感情は、苦しいと思う自分を俯瞰している状況がなければ出てきません。

「恋は苦しい」の真っ只中にある人は、自分の苦しきをはかることも、気付くこともできないでしょう。

詠み人は、どこかで自然や大いなるものからのメッセージを聞いたのかもしれませんが。

そこに苦しいの真っ只中にいる自分を見つけた、聞いたのでしょう。苦しいと一つになっていた自分を、自然と一つになっている自分に重ねたのです。

お釈迦様は聞くための気付き、聞いたのちの確認も大切だと仰っています。自然や大いなるものの存在に気付き、声を聞いて、どうなのかと確認する。

聞いて分けるばかりではいけないようです。

昨年二月号、住職が節分によせて書いていました。

二月三日は節分ですが、「鬼は外、福は内」と豆を投げます。

外と内、どこかで分けることをしているわけですが、その結界はどこにあるのでしょうか？また、鬼と福とは、どのように違うのでしょうか？

留め石や、竹の柵は、こちらとあちらを分ける結界です。結界により違いはあるけれども、分かれる前を考えれば自然と私たちの違いなどありはしない。

その感受性ゆえの弊害をも、お釈迦様は『自灯明、法灯明』と説いています。（副住職）

陽岳寺護寺会便り 平成25年3月1日No.148

2011年3月11日の東日本大震災。あれから二年が経ちます。

また、親しかったあの人がいなくなって何年経ったのでしょうか。時間が経つにつれて、人の心は動き、変わっていくものです。その確認のチャンスが墓参や法要にはあります。もちろん、この護寺会便りにもです。そのチャンスを活かして、現実の生活を豊かにしていくために、諸行無常を「受け入れる」ことの意味を考えてみました。「受け入れる」とは、つらいときも、楽しいときも、すべてを日常という幸せに変える、私たち人間がもつ力のことです（副住職）

赤い風船 ～ 東日本大震災三回忌によせて

赤い風船が針にさされて破れても、心配はいらないよ

こわがることはない

目に見える風船はたしかに消えてなくなってしまう

だけど

中の空気は、お外に行って、このお空の空気とひとつになるだけだ

風船がやぶれて、風船の姿かたちは見えなくなるけれど

中の空気がお空の空気とひとつになるだけだ

我々の命も

死んでも終わりにはならない

大きな命と合流をして

また新たな命になってうまれてくる

だから、心配はいらないよ

病に伏せる子どもに、こう言ってきかせた父親である和尚さんがいました。

子どもながらに、この子は自分の命が短いと分かっていたようです。

この自分が消えてなくなると言われた時に、死というものをどう受け止めることができるでしょうか。まして子どもですから、きっと不安があったはずです。そんな時、こわがる子どもを見て、父親は優しく声をかけたのでした。

自分なんていうものは、風船と同じで、はじけて消えてなくなる。

しかし、その根本は、中の空気と外の空気とひとつになる。そして大きな命と合流して、また新たな命となってうまれてくる。この永遠なるものに気付いたとき、人は死の恐れから解放されるのだと。

おとしの3月11日、この自分が消えてなくなるんだということを、日本中の人々が、同時に、思い知らされました。まるで病に伏せる子どものように、死という事実をつきつけられたのでした。波にさらわれた人、地震や津波のニュースを見た人、私たちのことです。

そして東日本大震災の事実の大きさを、人々は受け入れることができませんでした。その副作用として、私だけは大丈夫だと買いだめに走り、情報は大切だとデマが横行しました。

二年経った今。問題は山のようにありますが、時が経つにつれて、人々は受け入れるようになりました。受け入れなければ生きていけないからでもありましょう。受け入れることとは、生きることだと言い換えられるほどにです。それはつまり、受け入れることには、現実を豊かにしていく糧というチャンスがあると考えました。

生きることとは、受け入れることだと言えます。それでは、人は何を受け入れていくのでしょうか？それは、縁・出会いと言ってもよいのですが、“出会ったものごとすべて”とします。たとえば、取捨、順逆、喜びと悲しみなど。私たちの出会うものごとには、対照的に見えることがあるようです。比べてみたときに、だいぶ違ってみえることです。その出会いの中から自分に良いことだけを受け入れること。それは同時に、悪いことの受け入れない癖にもなります。受け入れない癖のついた人は、喜びや楽しみを受け入れることができません。片方だけしか受け入れようとしないのは、両方を見ないようにしている現れだからです。「喜びがあるから悲しみがあり、悲しみがあるから喜びがある」という事実を認めなければ、どちらも得ることはない。

生きるとは日々を暮らすということであり、それを日常と言うわけですが。3.11の東日本大震災は非日常でした。しかし波にさらわれた人にも、ニュースを見た人にも、日常はやってきます。たとえ悲しみにくれている、笑ってしまうこともあるでしょう。その光景は、不謹慎ではなくて、日常が返ってきた証拠。喜びも悲しみも、両方を受け入れることができている証なのだと思います。辛いことがあっても、かならず日常性は強くなる、という助けがここにはあります。

しかし、受け入れることを目的や前提にしたり、課せられた受容というものは、人生を豊かにしていく糧とはならない。受け入れさせられることは、人生のゴールではないからです。無条件に肯定するのではなくて、自分で考え自分で受け入れること。それが日々を暮らしていくということ、さらに言えば自分自身を大事にすることです。

ただ自分自身を大事にしようと思っても、自分の心に入りきれないものを受け入れざるを得ないとき、楽勝だと思っていたら心のなかで大きくなっているとき。無理するときがあるかもしれません。取り返しのつかないことになるときもあると考えたならば。受け入れなくてもいいものもあるという救いも必要です。

受け入れるということは、答えることの難しい問いを保持しつつ、閉じないでいることです。どのように向き合うか、自分ですこしずつ答えを出していくということです。

それが、諸行無常といわれるこの世界を生きる智慧です。諸行無常を受け入れることです。

すべては動き変化するというこの大きな真実を、東日本大震災は、巨大な自然の変化として私たちに実感させました。

それはつまり、私たちはあの東日本大震災に加担しているということです。3.11のことを気遣い、配慮をし、関心を持つということです。責任を持っているのです。俯瞰することは難しいけれど、みんなで共有することで、この世界を良くすることができるということです。

普通の暮らしの大切さは日常の中にあったのですが、みんな忘れていたわけです。すべては動き、変化するという自然。その自然を受け入れることが生きるということに、気付かされた。

変化を人が受け入れるとき、自分が愛すべき存在だと気付きます。愛すべき存在であることの幸せ、日常の幸せ。幸せとは、変化する今・ここ・わたしが基点となります。

幸せを私たちが考えるとき、それは自分自身、また家族のことが第一なはずです。それが自然なことです。そして、自分の幸せを誰かと共有するために、幸せな私が誰かのそばにいることが誰かの生きる力となるのだと、私は思います。

“寄り添う”ということですが、永遠なるものと私たちは寄り添っているのです。変化するこの世界を受け入れている。二年経った今、「受け入れる」ことの意味を確認することです。

不幸と言われるかもしれないけれど、絶望はしない。死とは、この世に別れを告げるとき、赤い風船が割れるときだと考えてみれば。針にさされて鳴るパチンという音は、別れを告げる音でもあり、永遠なるものと一つになる「さようなら」「ありがとう」という言葉なのだと思います。

すべてのものが絶え間なく動き、変化するこの世界。

諸行無常という、この大きな真実を受け入れるとき。人は、自分が変わってしまうことを楽しむのだと思います。そして、他人が変わることを許すことだってできる。「受け入れる」とは、諸行無常とはポジティブなことなのです。◎お彼岸は、3月17日(日)～23日(土)です。◎今年のお施餓鬼は、5月18日(土)第三土曜日です。皆様の参加をお待ちしております。

陽岳寺護寺会便り 平成25年4月1日No.149

今年も春彼岸に多くの方が墓参されました。もちろん、まだお骨の入っていないお墓にお参りされる方も。

さて、今回の護寺会便りの内容は、陽岳寺の本尊について、です。

何かのテレビ放送で「お墓参りする前に、ご本尊にお参りしましょう」と言っていたそうです。そういえばよく知らないということで、陽岳寺のご本尊は何ですか？と、何人かの方に聞かれたのでした。

陽岳寺 本尊『十一面観世音菩薩（じゅういちめん かんぜおんぼさつ）』

一般には「観音さま」といわれますが、この観音さま。じつは変身します。その変化身の一つが『十一面観世音菩薩』なのです。『十一面をもつ観音さま（観世音する菩薩）』。

ここでの『菩薩』とは、成仏をめざす途中にいて、人々と共に歩み、教えへと導く象徴のことです。成仏をめざしているので、仏さまではありません。が、成仏しているけど、成仏を認められていない菩薩もいます（ややこしいですね）。

観音さまは自分の成仏をおいてでも、みんなと一緒にいたい、という願いを持っています。現世利益や救済の信仰が出てきて、観音信仰は日本で広まりました。

つぎに『観世音』についてですが、もとはサンスクリット語。日本語訳が他にもあります。般若心経のはじめ「観自在菩薩行人般若・・・」とあります。「観世音菩薩」「観自在菩薩」「光世音菩薩」「観音菩薩」と、いろいろあるんですね。

『世』の人々の『音』声を『観』じて、その苦悩から救済する菩薩。ゆえに『観世音』。智慧をもって『観』ることにより自由『自在』の力を得、救済する菩薩。ゆえに『観自在』。諸説ありますが、ほぼ似たような意味のようです。おこった順番はよく分かっていません。

そして、頭部にかかげる『十一面』。はじめに、観音さまは変身すると言いました。観音さまが世間を救済するのに、人々の条件に応じて、いろいろな姿形になります。観世音菩薩普門品第二十五（観音経）では、33の姿になると言われていますけれども、三十三間堂の33は、ここからとのこと。ちなみに、深川にも江戸三十三間堂とあって、京都のものを模したものがあつたそう。

観音さまは変身するようになったわけですが、その一つが『十一面観世音菩薩』なのでした。ほかには、千手観音・馬頭観音・如意輪観音・水月観音などがあります。

仏教の教えそのものの象徴が如来で、より身近な存在として現世利益や救済の信仰の対象が菩薩

。みんな、求められて存在していると言ってよいでしょう。

仏像という存在自体、はじめは無かったものが、像として崇拜されるようになったことを考えても納得できることです。

さて、仏像安置のかたちとして、本尊の両脇に脇侍を起くことがあります。お釈迦さまのとなりに、普賢菩薩・文殊菩薩を置くようにです。

じつは観音菩薩は阿弥陀仏の脇侍なのですが、観音信仰の隆興により独尊として崇められるようになりました。なので、本尊として観音さまが崇拜されているのは普通のことなのです。

そんな十一面観世音菩薩が陽岳寺の本尊です。脇侍として、地蔵菩薩と毘沙門天を安置しています。彼らを引き連れての意味に、智慧と慈悲、勇みと情け、を住職は考えています（No.110）。

この十一面観世音菩薩の頭部には、十一の顔があります。その顔は、正面は慈悲の3面、左には怒る瞋面（しんめん）の3面、右には菩薩の面にして牙や角をした3面、後には大きく笑う面、頭の頂上には阿弥陀仏をいただいています。

それぞれに、母の顔や父の顔、先生や子ども、親切にしてくれた顔、怒ってくれた顔、励ましてくれた顔、心配してくれた顔でもあります。

私たち人間にもいろいろな顔があるわけですが、観音さまにも血の通った部分を感じます。

ただ、人間味あふれる部分だけではないのが、十一面観音菩薩です。人間に、十一も顔があったら怖いですし、変身するのも怖いです。

観音さまは、その人の想い・置かれた場所・悩み・悲喜こもごも。それぞれに姿形を変え、言葉を変え、見守り、語りかけてきます。その声を見てほしい、聞いてほしい。そのためには。・・・その機会のひとつが、陽岳寺での法要です。年回忌、お施餓鬼やご祈祷などの法要に、檀信徒のみなさんに参加してほしい理由の一つです。

先日、奈良の東大寺に行ってきました。ご縁をいただき、二月堂でのお水取りにお参りしてきました。ここにも十一面観世音菩薩の姿があるのです。

奈良時代から毎年かかさず行われてきた法要、修二会（しゅにえ）。修二会の正式名称は「十一面悔過（じゅういちめんげか）」、東大寺二月堂の本尊・十一面観音に罪過を懺悔して除災招福を祈る、悔過という儀式のことです。

その法会の期間は長く、2月18日～3月15日で2月中は別火といって支度期間。3月に入ってから本行となり、3月12日の夜中に行われるのが「お水取り（おみずとり）」。いつからか、修二会そのものをお水取りと呼ぶようになったそうです。おたいまつ、とも。

知っていようと、知らずにいようと、私たちは日々さまざまな過ちを犯しています。その過ちを、二月堂の本尊 十一面観世音菩薩の御前で懺悔するための、悔過会です。

その内容は、鎮護国家・天下泰安・風雨順時・五穀豊穰・万民快樂。自分たちだけのために行をするのではなくて、自分とは一見関係ないように見える人やもののためです。

功德を振り向けるところが大切です。

日本全国の各寺院では、年回忌、お施餓鬼やご祈祷などの法要を行っています。その法要は、有縁無縁三界万霊、参詣される檀信徒や地域の方々のためでもあります。

人々の幸福、罪過の懺悔を願う私たちの心はもとより、縁というこの世界の理解を進めることが大切です。本尊を迎えるということは、その本尊の声を聞くということ。陽岳寺での法要は、十一面観世音菩薩の物語でもあるのです。

今年のお施餓鬼は、5月18日(土)第三土曜日2時～です。

副住職がお話します。皆様の参加をお待ちしております。

山門大施餓鬼会は、近隣の和尚様方を呼び、陽岳寺にとって長い過去をさかのぼっての有縁無縁の亡くなられた方々を、みんなで感謝し祈りを捧げようとする集まりです。

また陽岳寺檀信徒の縁につながるご先祖様も供養しようと催される法要です。今回も、東日本大震災津波等で亡くなられた方々、被災された方々、何らかの形で被災地に添ってかかわっている方々に対しても、ご冥福や、ご無事、ご多幸の回向をしたいと思います。

後日、施餓鬼についてのお知らせを、郵送いたします。

参加にて、当日に出席の方は人数を明記して、欠席の方は「欠席」と明記して、はがきか、ファクスにてお早めにお知らせください。不参加・欠席の方は、はがきの投函およびファクスとも、ご遠慮願います。参加はするけれども、当日欠席の場合、和尚が代わってお参りいたします。

参加費1万円に卒塔婆1本含まれますが、さらに追加の方は1本につき3千円申し受けます。お塔婆に戒名を記入ご希望の場合は、戒名を明記して下さい。無記名の場合は、その家の先祖代々各霊位といたします。

陽岳寺護寺会便り 平成25年5月1日No.150

Have(ハウ) A(ア) Nice(ナイス) Day(デイ)!

ここ数日、日本の方ではない人々とお話する機会が多かったのですが。別れ際、かならず言われる言葉がありました。それは・・・

「Have A Nice Day!」

さようなら程度の意味で使っているのでしょうか。

「よい一日を」という意味ですが、この言葉は相手のことを気遣う優しさの表れのようにです。

挨拶とはなんとなく聞き流してしまう言葉ですが、ここですこし考えてみたいと思います。

「よい一日を」のよい一日とは、どのような一日なのでしょう？

わたしにとってよい一日なのか、あなたにとってよい一日なのか。わるい一日で無いなら、よい一日といえるか。

仏教には、西洋の人間観とは大きく違う部分があります。

それは、絶対と言えるパーソナリティなど考えられない、としていることです。

なればこそ、仏教は絶対ではないもの、つまり人間の心の動きの中に興味を見出します。

心の動き＝人間らしさ、だと仏教は考える・・・と言ってもいいかもしれません。

仏教は人間の心の動きの中に興味を見出すと言いましたが、よいわるい両方ともにです。

むしろ、わずかでも心の動きが生まれるのならば、老いも病いも、花も美味なる料理も、“よい”と考える。

こう考えてみると、「よい一日」とは・・・よいわるいを超越した一日のことだと捉えることが出来ると思います。かといって、とても大きく動かされる出来事が頻繁に起こってもらっては困るわけですが・・・

災難に逢う時節には災難に逢うがよく候 死ぬる時節には死ぬがよく候

是はこれ災難をのがるゝ妙法にて候 かしこ

新潟の三条市にて起こったかつての地震。被災した山田杜臯に宛てた良寛の手紙の一文です。

頑張れ！と言われるまでもなく十分に頑張っている、そんな人間に宛てた一見冷たすぎる、しかし温かな言葉。

災難に遭う時節も、死ぬる時節も、Nice Dayに通じていると思いました。そして、つぎの禅語を思い出したのです。

唐の時代、雲門文偃（うんもんぶんえん）という禅師がいらっしゃいました。彼による禅語や逸話は現在も有名です。ひとつには、茶掛けにもあります、「日日是好日」という言葉です。

【白文】

示衆云、十五日已前不問爾、十五日已後道將一句來。代云、日日是好日。（雲門匡真禪師廣録）

【書き下し文】

（雲門が）衆に示して云く、十五日已前は爾に問わず、十五日已後一句を云い將ち來たれ。

（雲門が）代わって云く、日日是好日。

【現代語訳】

雲門禅師が修行者たちに言いました。「これまで（十五日以前）のことは、あなたたちには尋ねないぞ。これから（十五日以後）のことについて聞くのだ、さあ何か一句を言え。」

修行中、禅問答は日常茶飯事。いろいろな問いが、いろいろな時に投げつけられます。さあ雲門禅師の問いかけに応えられるものはいたのでしょうか？

～この間が存在しています。誰も答えられなかったのか、誰の答えにも満足いかなかったのか分かりません。雲門禅師はしびれを切らします～

雲門禅師が修行者たちに代わって言います。「日日是好日」と。

これからの日々は好日である。

いいことも、わるいこともあるでしょう。それでもどんな時も現実なのだと思えたと見据えた上で、生きていくしかない。うつろいゆく世界に身をゆだねる自分を、よりどころとして生きていくしかない。現実が残酷であるからこそ、そのまま救いともなると考えます。

雲門禅師の言う「日日是好日」とは、良寛の「遭う時節」、「よい一日を」のよい一日、と考えることが出来ないでしょうか。

2011年3月11日、東日本大震災。そのほかにも凄惨な出来事は、日々地球上で起こっています。そのような、万が一の不幸をも「よい一日」。

気休めの「日日是好日」ではありません。ちょっと嫌なことがあつての「日日是好日」ではないのです。市販の風邪薬、栄養ドリンクや点滴ほどのものではないのがこの言葉です。

それゆえに私たちが「日日是好日」だと言うことは、なかなか出来ないことでしょう。しかし実際には、私たちは考えもせずに口に出してもいるのです。それは挨拶のことです。

「Have Nice A Day!」日本語ではどうなるでしょう。「いいお天気ですね」「ええ本当に。おかげさまで」。これからのことを、挨拶はみなに問うているのだと考えてみたのでした。

◎4月下旬に、本堂等外壁の塗装をしました。護寺会より273万3千円、陽岳寺より300万円支払いました。熱交換塗料タフコートというもので、照りかえし無し、室温上昇の抑制、保温効果があります。万年塀は光触媒塗料ハイドロカラーテクトというものにて塗装、太陽の光と雨

の力によるセルフクリーニング効果があります。◎墓地へつづく地下道の壁も塗りましたので、明るくなりました。塗装については、お施餓鬼会でも皆様にご報告いたします。

No.151 ノアの方舟（はこぶね）

陽岳寺護寺会便り平成25年6月1日№151

ノアの方舟（はこぶね）

『3. 11後の思想家』（2012年1月30日左右社発行）という本に、ジャン＝ピエール・デュピュイというフランスの哲学者の書いた、『ツナミの小形而上学』という本の内容を、社会学者の大澤真幸氏が執筆していました。

『ツナミの小形而上学』には、旧約聖書創世記第六章に書かれていたノアの方舟を、ノアを預言者として登場させ、洪水を、「世界の破局」とした逸話として書かれてありました。

旧約聖書の方舟の逸話は、神エホバは、民への怒りを顕した洪水により、地球上のすべてを滅ぼそうと考えます。そして、神は、ノアに方舟を造らせ、種の保存をノアに命じて、契約を結びます。その内容は、報復そのものです。

「あなたがたの命の血を流すものには、わたしは必ず報復するであろう。いかなる世界のすべての生きものにも報復する。兄弟である人にも、わたしは人の命のために、報復するであろう。人の血を流すものは、人に血を流される、神が自分のかたちに人を造られたゆえに」と。

陽岳寺では、平成25年3月11日が近づくにつれて、福島原発の悲惨な事故と、その後の顛末から、万が一被災が収束に向かったとしても、使用済み核燃料という終息の道が見えないことを考えていました。将来にわたって決して終わることのない問題として、法要に、どう表現すればよいのか、『ツナミの小形而上学』を参考にしたのでした。

《 ノアは預言者となって、毎日街に出ては、洪水により、人も動物も植物も亡びることを人々に訴えます。しかし誰もノアのいう言葉を真実とは思いませんでした。

ノアは、どうしたら人々が興味を示してくれるか、信じてくれるのか考えました。そこで、彼は、愛する子供か配偶者を亡くした者にしか許されていない行為として、古い粗末な衣をまとい、頭から灰をかぶりました。そして、街に向かいました。

すると、ノアのまわりには野次馬たちが集まり、口々に質問を浴びせます。

「誰か亡くなったのか？どうしたのだ、と人々は尋ねます。

ノアは、「多くの人が亡くなった」、「しかも亡くなったのは、あなたたちだ」と答えます。聴衆は、笑います。

「その破局は、いったい、いつ起きたんだ！」と尋ねられると、ノアは「明日だ」と答えます。

人々はどよめきをまじえながら、おおぼら拭きか、嘘つきの眼差しでもって、ノアを見つめます。そこで、ノアが語りました。

「明後日（あさって）は、洪水はすでに起きてしまった出来事になっているのだ。洪水がすでに起きてしまったら、今あるすべては、まったく存在しなかったことになっているだろう。洪

水が、今あるすべてと、これからあるだろうすべてを、流し去ってしまえば、もはや、思い出すことすらかなわなくなる。なぜなら、もはや誰もいなくなってしまうのだから。そうなれば、死者と、死者を悼む者の間にも、何の違いもなくなってしまう。私が、あなたたちのもとに来たのは、その時間を逆転させるため、明日の死者を今日のうちに悼（いた）むためだ。明後日になれば、手遅れになってしまうのだから」と。

こう言って彼は自宅に戻り、急いで、身につけていた衣服を脱ぎ、顔に塗っていた灰を落として、方舟づくりにとりかかります。

晩になると、一人の大工が扉をたたき、ノアに訴えます。「方舟の建造を手伝わせてください。あの話がウソになるように」。

さらに夜が更けてくると、今度は屋根職人が、「手伝わせてください。あの話が間違いになるように」と言って二人に加わりました。 》

この寓話は、未来に起きる確かな破局から、今何を考えなければ、そして実践としなければと、我々に警鐘を与えるものです。

さて、仏教の具体的な時間の考え方は、今という時間を持つことによって、時間は、過去と未来という相反するものとして、分離することを見つめます。しかも、分離することにより、却って、結びつけられている事実を見据えます。このことは、直線的な時間の流れがあるのだと考えるのではなく、今は、過去と未来を根拠として在り、しかも同時に、過去も未来も、今を根拠として在ると気づくのです。

そして、その同時性を持つが故に、その今は、次々に過去に流れ込んで、現在に生まれると見えてきます。ここから過去は不滅となることができます。そして、未来は、次々に現在となって消えてゆくと現実をとらえます。

しかも、時は現在から現在への流れしかありません。このことから、今という現在の意味は、現在が、限りない過去を含んで、今にあり、未来は現在として消えることから、未来は常に現在として顕されるものとしてあります。

過去・現在・未来とは、時の全体の流れでありながら、現在から現在へと、時の流れは、流れながら、現在にいて流れない現在でなければなりません。絶対の現在、現在の永遠性、また、時間の前後際断とはこのことをいいます。現実の時間は具体的に、流れないものが流れ、流れるものが流れないとなります。

さて、『ツナミの小形而上学』によるノアの方舟の寓話から、洪水によって世界が流される意味は、人間にとって過去・現在・未来がなくなることを示唆しています。

それは意味の記憶とエピソードとしての歴史という記憶が生まれることもなく、現在から現在へという、永遠の未来の流れも失われると語っています。

このノアの物語は、現在を変えなければならない。そして過去を変えないためには、洪水という未来からの視点で、現在の選択肢を選ぶことが、いかに大切かと説いています。

だからこそ、原発事故の必然性を徹底して考えることで、その事故を回避する自由を我々は常

陽岳寺護寺会便り 平成25年7月1日No.152

じえ！じえ！じえ！

NHK朝の連続小説を、楽しく見えています。そこで、たまには、朝ドラで感じたことを、護寺会便りに書いても良いのかと思いつつ、書いてしまいました。

海に潜って、海女シーズンの最終日に、やっと一つのウニを捕獲したアキは、それまで、ウニが捕れなくて、夜な夜な眠れず、眠ろうとして、「ウニが1つ、ウニが2つ、ウニが3つ、……」と、数えていたのが印象的でした。

その連続テレビ小説『あまちゃん』も、北三陸の故郷編から、後半に、2009年の夏、東京編となりました。

主人公のアキは、母春子の春、夏ばっぱの夏から離れて、この物語の行き着く先は、いつのまにかアイドル誕生の物語だったのかな？と、少し興味をそがれつつも、主人公の表情の豊かさ、懸命さに、久しぶりにテレビの1チャンネルを押させられています。

後半に入るや、東京上野に一人出てきたアキは、何やら戦後の「ああ～上野駅」のように、眠れぬ夜を迎えて、いくらウニが1つと数えても、ウニが500を越えたら、限界です。

故郷の北三陸の名産である琥珀を、洞窟で一人掘る小田勉（おだべん＝俳優塩見三省）さんは、駅側にあるお店のカウンターの隅で、一人琥珀を磨いていました。

アキは、ウニの次に、カウンターに座る、「勉さんが1人、勉さん2人、勉さんが3人、勉さんが4人」坐らせていました。

母春子から常套句のように、「いじめられ、引きこもりで……」と言われているアキにとって、「春子が1人、春子が2人、春子が3人……」と「トンがった春子」が出てくれば、益々眠れなくなってしまいます。

祖母夏が登場して、「夏ばっぱが1人、夏ばっぱが2人、夏ばっぱが3人……」も、眠れなく理由もありそうです。

面白いことに、夏ばっぱの眠る姿も、眼を半分開いて眠るのですが、アキも同じまぶたを閉じずに眠ります。

まぶたを閉じずに「ウニが1つ、ウニが2つ、ウニが3つ……」と、姿勢が横臥しているか、座っているかの違いがあるけれど、共に、雑念が入らぬことを考えれば、何やら坐禅の姿に似ています。

坐禅には、数息観（すうそくかん）といって、「1～つ、2～つ、3～つ」、あるいは「ひと～つ、ひと～つ……」と数えながら坐る方法もあります。息は、1～つと、静かにですが最後まで息を吐き切ります。姿勢は、坐禅のように足を組んでも、椅子に座っていても、正座でも、立っていても可です。経行（きんひん）と言って歩いてもよいのです。

しかも、腹式呼吸で息を3秒吸い、7秒長く息を吐くことを心がけたら、なんと「美木良介のロングブレスダイエット」に通じることもあるかもしれません。

そのとき舌先を上あごに軽く付けばなおよく、さらに「無～」と意識しながら鼻で息を吐くことも、呼吸法は身体を維持管理する基本であり、長生きのもととは長息なんて、しゃれていると、心も統一、そのことは、吐き出すものが意識の中に埋もれている汚物のような気もいたします。

始めは「1～つ」あるいは「無～」と意識するのですが、意識せずにできるようになれば、それが、坐禅です。「動中の工夫」といって、自分なりに考えて、自然に自分のものとなったら、それでよいのです。

呼吸や言葉に徹するのですが、きまりは、眼が半眼です。目を閉じれば寝てしまう経験から、布団に就いたら、「1～つ、2～つ、3～つ……」と、息を深く吸い込んではいけません。数字には意味がなくて最適の、就寝グッズです。このグッズは、ウニもいいけれど、連想をさせないものがよいでしょうか。選ぶモノによっては妄想をおこすからです。

さて『あまちゃん』の脚本家である宮藤官九郎（くどうかんくろう）という人は変な人で、「歩いているときも、やたら、妄想を巡らしている」と、インタビューで答えていました。

仏教からいうと、妄想は対立概念を持っていて、どちらかという、否定されるべきものですが、宮藤官九郎の言う妄想は、否定されるべきものではなく、自分を際立たせるもののようです。

願いや思い、あこがれや希望は……、引きずられなければとても大切なものです。妄想もそうですが、妄想にとりつかれるのではなく、生活の中で、妄想という思いを断ちながら、思いを歩む、そこに自己があるのでしょうか。

アキが言いました。「アイドルの衣装を着て、お座敷列車や海女ソニックで、歌を歌ったとき、自分が頑張ることで、周りのみんなが勇気づけられたり、元気になってくれたみんなが喜んでくれたことが嬉しかった」と、そこに新しい自分を発見したということなのでしょう。

考えてみれば、「アイドル」こそ、妄想の頂点という現実であり、ドラマには、それ以外に「居なくていい人」が数多く登場して、アイドルを創り上げてゆくように思えます。

宮藤官九郎は、中高一貫して「小泉今日子」がアイドルだったと、インタビューで話していましたが、その好きなところは「トンがっていたところ」と言っていました。まるで『あまちゃん』の春子のキャラクターであり、見ている私にとっては、一番違和感の原因です。あえて、「トンがっている」キャラは、何に？ どうして？ と意味はなく、「トン」に意味があるように思えます。

さて、朝ドラの食卓は、故郷編で、忠兵衛、夏、春子、アキ、家族の食事をしている風景に、今の時代を見るようでした。現実の故郷も同じように変わっているのでしょうか。1人1人、パンやうどん、おにぎりに、そば、スパゲッティに、ハンバーグと、食べ物が違うし、食べる時間もまちまちでした。まるで、スーパーやコンビニで買ったものをテーブルに乗せたようです。それでいて、台所で菜っ葉を包丁で刻んでいるのです。

このドラマの季節は、三世代の女性、アキ、春子、夏の名前の通り、春から夏、そして秋へと

、忙しく駆け抜けていくのでしょうか。

◎人にとって何よりに増して一番の記念日は、誕生日です。命をいただいたことへの感謝への思いはそれぞれ違うものです。では亡くなった人にとって、命日とは、「日限をきめる」とあります。与えられた命を全うしたことを意味しますが、そこには残された者にとっては、悲しみもあり、慈しみもあり、やはり喜びもあり、それが法事として表現されます。命日は、月々、一年一年、そして回忌となって廻ってきます。その廻ってくる日は、やがて自分にも廻ってきます。その日を逃さないことも生きているものの勤めです。

☆ようがくじ坐禅会「不二の会（ぷにの会）」7／23（火）19：30～21：30☆

HP→ <http://www.puninokai.com/> Facebook→ <http://www.facebook.com/puninokai/>

陽岳寺護寺会便り平成25年8月1日No.153

盂蘭盆経～目蓮尊者の伝説

いま日本でのお盆のおこりは、「盂蘭盆経」というお経です。このお経から、「縁」「恩」という現実的な考え方を私たちは得ることができる。そう私は思っています。

ナザレのイエスに12人の使徒（高弟）がいるように、お釈迦さまにも10人の弟子（十大弟子）がいらっしゃいました。そのうちの一人、目蓮尊者に注目したのがこのお経。

登場人物は、三人。目蓮尊者、（目蓮尊者の）亡きお母さん、お釈迦様です。

夏の修行中、目蓮尊者は「神通力」が身についたことに気付きます。

そして、神通力の一つ。「天眼通」という真理を見通す目で、死んでしまったけれども、いま自分の母親はどうしているのかを見ることになります。

すると・・・亡き母親は餓鬼道に堕ちていたのです。

「天眼通」とは真理を見通す目のことですから、なぜ母親が餓鬼になっているのかも分かります（餓鬼とは、いつもお腹ペコペコの鬼のこと。だけれども、食べ物を食べたくても手に取ると燃えてしまう、水を飲んでも砂になる等、求めても手に入らない状態）。

その理由はなんだったのか？お母さんが目蓮尊者のことを大切に思ったがために、慳貪（けんどん・物を惜しんでむさぼること）の行為をしていたから・・・なのでした。

たとえば・・・他人の子どものことまで考えがおよばず、自分の子どもの健康だけを考える。成長するにつれ、小学校・中学校・高校・大学と良いところへ入ってほしいと思い、他人の子どもを排してでも、無視してでもと、必死の努力をする。しあわせな結婚をしてほしい、安泰な会社に就職してほしいと、一生懸命に願う。

普通の母、健全な母のすがたに見えますが・・・仏教ではひとつの慳貪の姿と見ます。

目蓮尊者は「神通力」を持っていますから、なんとかお母さんを助けようとしています。

でも自力で助けることができません。そこで目蓮尊者はお釈迦様に相談します。母を救うためにはどうすればよろしいでしょうか？・・・するとお釈迦様は、

『7月15日、夏の修行の最後の日。すべての修行僧に施し（もてなし）をすれば、母にも先祖にもみんなにもその施しは届くであろう』と答えました。

目蓮尊者は願いをおこし、施しをすることで、修行僧たちによって母を救ってもらうことができたのです。・・・めでたしめでたし。

このお話には色々な教訓を見ることができそうです。

ひとつ目、亡きお母さんが餓鬼になっている設定。ちょっとあり得ない話ですが（死後の世界は不識、分からないものですから）、『もしかしたらそうなっているかもしれない』という想像力を持って！と私たちにすすめます。

ふたつ目、本人が気付いている・気付いていないに関わらず、やったことの結果はすぐか・いつか分からないが、なんらかの形となって出る。

みつつ目、自分以外の人・これからの人間に、わたしたちは頼む・たよることが出来る。

よつつ目、同時にたよらざる得ないし、たよることへの感謝・敬いの気持ちの大切さ。

そして、この伝説の底辺にある言葉が「恩」「縁」です。親がわたしのためにしてくれたことへの「恩」、親・わたし・これからの人という「縁」。

仏教は「関係」という視点でものごとを見ていきます。私とまわりには色々な「関係」がある。

「関係ない」という「関係」もあるでしょう。それが「縁」です。

「恩」とは、“今につながる「縁」について考えること”。

「命があって当たり前」「金はらってるんだから良いだろう」という考えかたは関係そのものを否定するもの。今につながる「縁」を考えていないようです。

「関係ない」という関係性まで大切に作る、縁を大切にすること。それが「恩」です。

「関係」という視点にたつと、「ある・ない」という境界の不思議さに気付きます。本来はグラデーションであることに“便宜上”区切りをつけている不思議さに、です。

ふだんの生活のなかでは気付きにくいことです。“便宜上”の区切りが本物の区切りになっている。そこで特別に意識する期間を設けたひとつが、お盆なのではないかと。「ご先祖様が帰ってくる」「関係ない人のことも考える」・・関係あるないの超越、という現実的な考え方を得る“ゆたかさ”がお盆です。

仏壇は仏さまと、私達と「関係がある」ひとたちを祀ります。精霊棚は私達とは「関係がない」ひとたちを祀ります。“ゆたかさ”がかたちとなって私達の前に現された姿です。

また、このお経のポイントのひとつは、“ゆたかさ”を得る方法を具体的に教えてくれていることです。それは・・目蓮尊者が修行僧（これからの人たち・自分の子どもでもない人たち）に施しをしているところ。わたしたちは「だれかから受け取った恩を」「誰かに（その恩を）送る」ことが出来る、ということです。

かといって、自分が恩を受けたかどうか気付かないこともあるでしょう。だれかに恩を送ることが出来ないことも。恩のバトンを受け取ったときにどうするか悩むこともある。

そんなとき、まったく同じことを、相手に返さなくてもいいようです。ぜんぜん違うことを、ぜんぜん違う相手にパスすることも恩を送ることになるはずです。

『受けるより与える方が幸いである』これはナザレのイエスが発した言葉として、使徒パウロ登場の近辺で出てくる言葉です。さらに言えば、「与えることによって、なぐさめを得る」「与えることとは許すこと、なぐさめとは出番のことである」。

恩を送る、与える。すると、なぐさめを得ることが出来る。与えることが、させてもらったという出番になる。あらたな関係をつくることができた喜びが、なぐさめである。

お盆とは「縁」「恩」の結晶です。私達の出番によってお盆は風情や季節感のたまものとなるのでしょうか。でもそうになると、もしかしたらみんなが出番を発揮しない（実家に帰らない等）とお盆そのものやお盆休みはなくなってしまうかもしれませんね。（副住職）

◎夏は暑いものです。熱中症・脱水症状に気をつけてください。冷房、こまめな水分補給、スタ

ミナ料理。頑張ることも大切ですが、無理をしないことも大切です。

☆ようがくじ坐禅会「不二の会（ぷにの会）」8／23（金）19：30～21：30☆

HP → <http://www.puninokai.com/> Facebook → <http://www.facebook.com/puninokai/>

No.154在りし日の 背を洗うごと 墓洗う

陽岳寺護寺会便り平成25年9月1日No.154

在りし日の 背を洗うごと 墓洗う

奥さんを亡くされた方が、「和尚さん、なんであのポスターをはがしたんだい？」と言ってきた。「たしかに、あいつの背中を流したことはないよね」と。そのポスターには、

『在りし日の 背を洗うごと 墓洗う』と書いてありました。在りし日を思うと、たしかに奥さんの背中を流したことはないよねと。

この方はお墓参りを通じて、亡くした奥様に、アチラ側に意識を向けていらっしゃいました。洗うときには背中を洗っているのだとは思いません。なにも“心”に思っても“無”いのでしょうか。それをわたしたちは「無心」と言います。考えてもきりがないので落ちつくところが、「無心」です。

お彼岸は、一年のなかでも特別なお墓参りの期間です。

お墓参りとは、わたしたちがアチラ側に意識を向ける作法のひとつ。墓前にて目を閉じて手を合わせる。そうやって誰か・なにかのために祈るけれども、こころの中では自分がただひたすら祈っているだけ。不思議なことです。誰か・なにかのために祈ることが、かえって無心になる。アチラ側に意識を向けることが、自分のためにもなる瞬間です。

母の日の花がカーネーションに対し、父の日の花はバラだそうです（ひまわり等も）。どちらも今年は終わっていますが・・・では、お彼岸の花はなんでしょうか。彼岸花？

母の日や父の日は、母・父に感謝をとくにあらわす日。お世話になっている人に感謝をあらわすことの大切さを考えれば、お彼岸は亡き人に感謝をとくにあらわす日となるでしょう。墓参候補日は祥月命日、月命日、誕生日、結婚記念日、思いたった日などありますが、お彼岸は盆暮れ正月に並んでの墓参週間。

9月といえば、中秋の名月。運動会。秋のお彼岸です。彼岸とは雑節（ウナギを食べる土用も雑節）。お彼岸はお盆と同じく、季節の移り変わり・風情をかもしだすものです。

先月号、お盆休みを取らなければお盆は無くなってしまいかも・・・と書きました。今月はさらに言ってみます。ちょっと強引ですが、わたしたちがお墓参りをしなければ、お彼岸（アチラ側）も無くなってしまいかもしれませんか？

彼岸は季節の移り変わり・風情ということで、陽岳寺も春・秋のお彼岸を盛り立てています。みなさんも墓参にいらっしゃいます。とても有難いことだと感じています。秋というとお彼岸なのだ、という意識は自然なことなのでしょうか。

彼岸とは「かの岸」、アチラ側のことです。向こうにアチラ側が見えるということは、此岸「この岸」コチラ側に私たちはいる、ということになります。ではアチラ側とはなんでしょうか？仏教的に言うと、悟っている状態・極楽浄土のことです。

春分と秋分の日、夕日が真西に沈みます。その延長線上にあるのは西方極楽浄土、その彼岸に

行きたいのでどうするか？修行をする。そんな期間がお彼岸だったのです。春と秋は気候がいいので修行をするのに適しているから・・・という説もあります。

ただ・・・いまの時代、修行といってもピンときません。修行＝アチラ側に意識を向けることとしたなら、分かっていただけだと思います。

臨濟宗では、亡くなるとお浄土に行くんだよ、とは言いません。しかし、「アチラ側」とは申します。靈魂の存在云々は置いておきます、話しても分からないことは分からない。では分かっていることはなにか、「それでも、やっぱり」という心情が大切ということ。

7月や8月のお盆にくらべると4日間ではなく、お彼岸は一週間。長いです。長い分、最初の日を「彼岸の入り」、春分・秋分の日を「お中日」、最後の日を「彼岸明け」といって大切にします。また、お彼岸前後の土日にお墓参りされるかたは多いですね。

お彼岸のような季節の移り変わり・風情とは、何かに付けてはお墓へと人を導くものです。それは何故か？そのお墓のしたに眠るものたち、親しかった亡き人、アチラ側、もちろん今生きている人への「追慕」のため、彼らに「出会う」ためだと思うのです。

追慕しなければ、想ってあげなければ、出会わなければ・・・その気持ちが皆さんを墓前へと導くのかと思いました。

修行も、墓参りも、共通するテーマは「意識をアチラ側に向ける」ことのようにです。お彼岸に動かされる私達の心はここに 있습니다。

一期一会という言葉があります。あなたとの出会い（一会）は人生のなかで一回きり（一期）という意味です。茶事からのことわざで、チャンスは一度きりなのだから最高のおもてなしをしましょう、となるわけなのですが。

かといって、目の前にいながらも出会っていないことがあるかもしれません。同じ空間にいるのに生返事、いてもいなくても同じ状態のことです。お茶をお出ししても、気持ちが通じていない。せっかくのチャンスなのに活かさきれてない！と・・・普通ならなるでしょう。しかしそれもまた、一期一会ではあります。

さらに言えば、お茶をお出ししてお話しもして、お互い笑い合えたなら一期一会をやりきった！ことと言えるかも知れないことです。

出会えていなかったのなら、それもそれで一期一会、よいではないか・・・と言えたら素敵なことです。無心の思いやりからの、最高のおもてなしがあつてこそ。

一期一会は一回きりの出会いの状況を言いますが、無心の思いやりそのものも一期一会。

お墓参りも同じことが言えそうです。「追慕」のため、「出会う」ため、とは言うものの、本当に会うことができるかは分かりません。こちら次第のことです。でも、無心になって墓参りすれば一期一会となり、それはつまり出会ったことになるのではないかと。

【墓参りの作法】墓石を洗い、拭き、清める。花入れもキレイにして、花・水・好きなものやお線香をお供えして、目を閉じて手を合わせる。

・・・そのとき何も考えていない時間は数秒はあるはずですが。ここで私はアチラ側に出会っていると考えます。相手を思いやるということは私心がないということ。無心であることが一期一会の前提条件でもあり、一期一会そのものとなるのですから。

ただ・・・一期一会だとしても、会えなくても、会うならば何かを話したいものです。子どもが生まれたから、亡くなっているけれども盆暮れ正月の挨拶に、進学・就職・結婚の報告。なにかの度の墓参は、わたしたちの心情のあらわれでした。

仏壇に手を合わせることも、お骨の眠る墓前にたたずむことも、お骨はないけれども家の象徴として石塔にお参りすることもです。

それにしても不思議なことです。出会うため、追慕・報告のため、何かのために私達は墓参します。何かのためにと頑張ることで、かえって無心となることができるのですから。

墓参しても会話ができるわけではありません。会うことができるわけではありません。それでも、話したい、出会いたい。失った言葉や出会いを求めて、墓前にたたずむ人間を私達は理解できます。

仏道修行の目的はコチラ側からアチラ側に行くことですが、なんのことはありません。コチラ側もアチラ側も隔てなければ全部一緒です。そう考えれば、すでにアチラ側に自分はいたわけですし、コチラ側に亡き人もいるわけです。

すでに与えられていた他者の言葉のなかに、私達は生きている事実気づく。その人の言葉ではないものに、その人の言葉を聞くことができる。アチラ側に意識を向けること、無心となることで、私達の人生はもっと豊かになる。

お寺も皆さんとのかかわりを大切に思っています。墓参の際は立ち寄って欲しいと思います。（副住職）◎9月23日がお中日。20～26日が秋のお彼岸です。

☆ようがくじ坐禅会「不二の会（ぷにの会）」9/28（土）19：30～21：30☆

HP → <http://www.puninokai.com/> Facebook → <http://www.facebook.com/puninokai/>

No.155縁に随って、心法を忘す

陽岳寺護寺会便り平成25年10月1日No.155

縁に随って、心法を忘す

「踏翻（とうほん）す七十九余霜、万事縁に随って心法（しんぼう）を忘す」

陽岳寺として、9月29日、部内（ぶない）のお寺さんでご不幸があり、葬儀に参列いたしました。部内とは、臨済宗妙心寺派にとって東京周辺の区域を東京教区といい、陽岳寺は教区内の第5部に所属しています。その5部は、江東区、墨田区、葛飾区、神奈川の三浦半島の一部を含むエリアに当たります。

うかがった葬儀のお寺さんは、お寺からいえば、「となりのとなり」という近さです。そして京都南禅寺僧堂の大先輩でもあることから突然の訃報は、「6月にお目にかかったときは、足の運びに不自由はあったものの、どうしたのだろう」と疑問が浮かびました。しかし疑問は浮かぶものの、現実として、亡くなったという重さが身に染みます。

葬儀は、住職である息子さんの修業した鎌倉建長寺の管長、吉田正道老師でした。その老師の葬儀での引導の冒頭が、「踏翻（とうほん）す七十九余霜、万事、縁に随って心法（しんぼう）を忘す」でした。

79歳で遷化されたのですが、お寺を守ることを含めて、79年の人生はすべて所縁に随って歩んだものであり、その一步一步の歩みは自己を忘れての歩みだったと、禅宗の境涯をほめたたえたものでした。

79年の人生を集約して「縁に随って」と、「心法を忘す」という重みを、あらためて深く思い出します。

修行の道場では、修行僧として365日、生活の中で所作の繰り返しにおいて学ぶのですが、すべては縁起の故の行為です。その行為に、道場での師匠は、山門に至れば、食事をいただければ、食事がすめば合掌と。朝起きたら顔を洗い、食事をしたら食器を洗い、会社に行く。人と談じたら笑い、考え、按じて、愁い、祝いと。不自由なものなど何一つないではないかと。心を外に求めるなど。

さて、江東区では、今年の4月から、全小中学校に対して「学びのスタンダード」に取り組んでいます。その内容は、前日に必要な学習用具を準備し、授業の始まりの時間を守り席に着き、授業の始めと終わりに挨拶をし、背筋を伸ばして姿勢で座り、声の大きさを考えて丁寧な言葉遣いをし、話している人を見て最後まで静かに聴きますと。

名前を呼ばれたら「はい！」と返事をして、提出物の期限を守り、学年ごとに時間を決めて自ら計画を立てて家庭学習に取り組むことを、「学びのスタンダード」として実践し始めました。

これらスタンダードの一つ一つは「縁に随って」であり、実践そのものが「心法を忘す」となっているかと、自己への問いかけにつながっています。

仏教で「心法を忘す」とは、「無念、無心、自性、自己、心性、真人、真仏、真如、法身、仏、あるいは神」とも言い替えています。

しかし、どうしてこんなに言い方がいろいろあるのかと考えれば、心法も法も同じ内容でありながら様々に言い方、呼び方が替わるということから、言ってしまえば、あるいは呼んでしまえば、固定的対象的なものとなって独立して戸惑いを誘うことから、本来は、「言えば違う」ということが正しい認識なのでしょう。しかも、認識すら認めることと考えれば、それすらも拒否するものです。

その「縁起の故に空、」と、「縁に随って心法を忘ず」を、うまく説明した和尚がいました。沢庵禅師です。

不動智信妙録に、「かように心を忘れきりて、よろずのことをするのが上手の位なりといい、舞の例をあげて、舞をまえば手に扇とり足を踏む、その手足をよくせん、扇を能くまわさんと思つて忘れきらねば上手とは申さず候。

いまだ手足に心が留まらば、わざは面白かるまじき也。尽く皆心を捨て切らずしてする所作は皆悪しく候」という。

道元禅師から言わせれば、「仏法とは自己を習うことなり。自己を習うとは自己を忘ることなり。自己を忘るとは、万法に証せらるるなり」です。

古人は、これを「物となって見、物となって聞く」と、含蓄ある言葉として残しています。このことは「私」となっていないということです。

縁に随っての行為の中に、第一人称の私が存在しないことを考えると、日本語の言葉遣いに共通するから不思議です。

つい口にて、「思うのだけれど」に、識者は、「誰が」と私を指します。そこで「私は、思うのですが」に、仏者は「私とは誰か」と問いかけます。その私は昨日の私か、さっきまでの私か、「今の私は過去の私ではないし、未来の私でもないはず」です。

言えば違うことを考えれば、私とは、絶え間なく行為から行為する私であって、行為を離れて私というものはないはずです。

行為によって私と規定される私こそ実体的な私であり、同時に、行為を規定する私ともなるのですが、この私は考えられた私となります。行為を離れて私はないことが現実の姿であり、時は今です。その今の私こそ、もっとも具体的にして個性的な私です。時は今から今へと考えれば、対象的に捉えられた私は、先ほどの私であり、昨日の私ともなり、未来にいるであろう私となって、「作られたものから、作るものへ（私）」、空の故に縁起となって、西田幾多郎により哲学された私となります。

仏教は、昨日の私、先ほどの私、未来の私と考えるそこに、迷いの根源があると言います。行為し続ける一瞬一瞬に私があることを思えば、生き続ける、その一瞬一瞬に徹することは、自己を忘れて、生きろと肯定的です。しかも、その肯定されたものは、否定的なものの裏付けによって成り立っていることが、具体的です。

否定しなければならないのは、抽象的に思い描いたものは考えられた自己の独断、断ずべきは対象的に考えられた自己への執着であるのである。我々の自己が宗教的になればなるほど、己を忘れて、理を尽くし、情を尽くすに至らなければならない。

道元禅師は、「明らかに行持(行為)の今は自己に去来出入するにあらず。然して、今という道は

行持(行為)より先にあるにあらず。行持(行為)現成するを今という」。

「行持(行為)によりて日月星辰あり、行持(行為)によりて大地虚空あり、行持(行為)によりて依正身心あり、行持(故意)によりて四大五蘊あり、行持(行為)これ世人の愛處にあらざれども、諸人の実歸なるべし」

一切法は行持(行為)の現成にあるという道元禅師は、今から今へと見て行きます。絶対現在の自覚にあるということなのでしょう。

「万事縁に随って心法(しんぼう)を忘ず」と同時に、心法忘ずるが故によく縁起すると見えてこないでしょうか。

◎秋の彼岸には天気が不順にもかかわらず、多くのお檀家さん家族に墓参して頂きました。有り難うございます。忘れられることは僥びがたいことです。(和尚)

No.156代えがたいもの

陽岳寺護寺会便り平成25年11月1日No.156

【お知らせ】十一月二十四日（日）ご祈祷と演芸会です

陽岳寺が大切に思っている年中行事。

五月第三土曜日のお施餓鬼と、十一月最終日曜日のご祈祷と演芸会。

今年は十一月二十四日（日）です。時間は、午後二時から法要。午後三時から演芸会（漫才と落語）。姉妹漫才 ニックス・落語 三遊亭道楽（どうらく）師匠です。どうぞお楽しみに！

ご祈祷と演芸会については、護寺会費のお知らせに同封しています。

はがき、またはファクスにて「参加人数」を記し、

【十一月十九日】までにお知らせ下さい。

会費5千円（一家族）です。護寺会員でない方もお知らせください、ご参加いただけます。お待ちしております。

【コラム】代えがたいもの

わたしがお話ししたいことは二つです。ひとつ、お寺に来たらお寺の者と話をしてほしい。ひとつ、それとともに、となりの人とも話をしてみしてほしい・・・ということです。

ご祈祷と演芸会は、陽岳寺が大切に思っている年中行事です。ではなぜお寺として大切に思っているか？

法要も大切です。でもそれだけではありません。なによりの理由は、私たちお寺に集まる人々が交流できるからです。

親子やきょうだいとは家族という集団で見れば一心同体です。しかし、血のつながりはあるけれども、他人は他人。家族ではありませんが。

家族とは他人の集まる場と考えてみたのですけれども、お寺も他人の集まる場です。みんな仲良く並んでいますよね、・・・お墓のことです。

お墓のなかの亡くなった人だけではありません。生きている人、私たちについても同じです。

お施餓鬼もご祈祷も、本堂に集まって、となりの人の肩を気にするだけの時間ではない。その工夫はお寺の責任ですが（すみません！）、一緒に考えていただきたいとも思うのです。

お寺が年中行事を大切に思うことができるのは、他人の集まる場としての可能性があるから。

家族のかたちとは何でしょうか？血縁もありますが、ほかの理由付けができるはずです。

同じ空気を吸い、同じ釜の飯を食べ、同じニオイをかいで、同じまわりの音を聞いて、と。

家族とは、同じなにかを共有している人たち・・・と考えてみました。そして、その経験は何よりも代えがたいもの、かけがえのないもの。まさに“有り難い”ものです

その家族と同じことが「わたしたち（檀信徒）」にも言えると思うんです。

袖振り合うも多生の縁。お寺の年中行事に毎年参加できる方、できない方がいらっしゃいます。

僧侶・お寺のものも含めて、「わたしたち（檀信徒）」です。

お金で買えないものを育てほしい、楽しんでほしい。

私たちがふだん生活のなかで自然と重きを置いていることは「人間（ジンカン）」。人との間、関係性です。人と人との関係の中に、人は育まれている。

わたしも、育てていただいていると日々感じます。お坊さんとして、人間として。

お彼岸や盆暮れ正月、月命日、なんでもない日の墓参。そして、十一月二十四日のご祈祷と演芸会するとき。

となりに座った方と、どうぞお話しなさってみてください。

寒くなってきましたね。どこから来ましたか？いつも来るんですか？お施餓鬼に来たことありますか？落語もいいけど、こういうの聞いてみたいですね。ちょっと言ってみましょうか。あなたどう思います？

十一月のご祈祷と演芸会とは、本年への感謝と、来年の無事とご多幸を祈念しての法要です。

みんなで祈り、願うとは日常に無いことです。良い会にしたいと思っています。（副住職）

【お誘い】 ようがくじ「不二(ぶに)の会」はじめました

今年の三月から坐禅会をはじめています。月に一度、ほぼ平日の夜。会社帰り、仕事帰りの方も参加できるようにと。インターネットと、門に広告を貼って周知しています。

そして今年十月からYOGAもはじまります。先生は門前仲町在住の方。会場は陽岳寺本堂、わたしたち檀信徒・地域のことを思ってです。どうぞご参加ください！くわしくはウェブサイト、門に貼ってある広告をご覧ください。

少しですが、各会についてご紹介します。

『ごほうび坐禅会』について

坐禅会もYOGAも、身体へのごほうびです。体がかたいひとでも大丈夫！短い時間で、やさしい言葉でお話ししていきます。

『ごほうび坐禅会』は、やわらかな坐禅会です。敷居を低く、参加しやすく、無理しなくても大丈夫。スカートでいらっしゃっても、風呂敷で前を隠して参加できます。

内容は、説明と読経をして、5・10・15分と短い座禅にチャレンジ。最後に皆さんでお茶をいただいて解散。身心ともに落ちついた時間を過ごすことは、ごほうびと言えるはず。さらに、陽岳寺近辺のお店のお茶菓子をごほうびスイーツとして。

忙しい日常から、ふと離れる時間。お寺という非日常、いつもと違った夜に、ワンコインの習い事感覚で。ココロとカラダに、ごほうび坐禅。500円です。二時間コース。

『ごほうびYOGA』について

『ごほうびYOGA』は、やわらかな自分に気づくYOGA&タイマッサージュ。

ごほうびYOGAの内容は、お仕事の疲れ解消のためのヨガです。肩こり、腰痛、目の疲れに効果的な、誰でもできる簡単ヨガ。身体の硬い方もご心配なく！十一月は、それまでの内容に東洋医学の智慧もプラス！一時間半コース。

持ち物は、1.身体を動かすので、ヨガ用の着替。2.ヨガマットまたは、バスタオル。3.お水、タオルなど適宜。2000円です。

◎月イチなので無理がないです。ご友人、子ども・お孫さんにお話ししてみてください。

HP → <http://www.puninokai.com/> Facebook → <http://www.facebook.com/puninokai/>

No.157物語を信じる

陽岳寺護寺会便り平成25年12月1日No.157

【コラム】物語を信じる

十一月最終日曜日のご祈祷と演芸会。先月二十四日、無事円成いたしました。参加されました、関心を寄せていただいた皆様のおかげです。ありがとうございました。

ご祈祷の会を始めるにあたり、すこしだけ挨拶をいたしました。

“わたし副住職は修行道場から帰ってきて四年目になる。四年目と言え、言われたことが出来て、言われなくても出来る・・・くらいでしょうか。やっと五月のお施餓鬼や十一月のご祈祷の「意味」が分かってきたように思う。

参加されている皆さん、それぞれに意味を持っていると思います。どうか教えていただきたい、その意味を私たちが共有しましょう”と。

そして当日、わたしの思う「意味」をすこしだけですが語りました。以下はその内容です。

ほんとうに大切なものは目にみえない。しかしほんとうに大切なものは、同時に、この目の前に広がっている、この不思議。この不思議をよく見ると、古人の禅師たちは時を超えて現代の私たちに叫んでいます。

目に見えないけれども目の前にある、ほんとうに大切なものとは何でしょうか？それは、思いやりであり、心の純粹さであり、勇気であり、友情であり、信頼であり、畏敬や感謝であり、今日の集まりであり、愛です。

物語を読むときの約束が一つだけあるとすれば、それは「すべて本当にあったことだ」と信じることです。疑うことは簡単ですが、そこでおしまいになる。わたしたちが興味を持って、身を乗り出し、耳を傾けたならば、その物語の美しさ・豊かさを味わうことができる。

その物語を信じようと決意したとき、わたしたちの目に見えないものが見えてくる。ほんとうに大切なものが見えてくるのだと思います。

今日のご祈祷の会。目を閉じ、うつむき、手を合わせる。ひとは神や仏に祈り願う生きものです。祈り願うとは、物語を信じることと言えないでしょうか？どうか聞いてほしい信じてほしい、私の物語であるこの祈り、この願いを！と。では、誰がその祈りや願いを聞いているか？

・・・それは、わたしたち自身が聞いている。

祈りや願いの本当の意味は、私たち自身が、みずから聞かなければならないということです。「すべて本当にあったことだ」と信じる。その事実気付いたとき。ほんとうに大切なものは、すでにもともとあって、わたしたちのまわりに満ちあふれていることにも気付くはずです。

わたしたちが、これがほんとうに大切なものだと、その気付いた事実はたった一つでもいいのです。たとえば思いやり、心の純粹さ、勇気、友情、信頼、畏敬や感謝、今日の集まり、そして愛。一つでも、ほんとうに大切なものに気付いたならば、包むまわりの世界までもが輝き始めるはずですから。

利己的な存在である私たち。それでも誰かを愛するようになると、目に見えないところで自分と

いう輪郭が広がります。私という物語が、まわりの物語へと広がっていくこととなる。「すべて本当にあったことだ」と信じることは、自分という殻を破ることで、人間の成長といえるでしょう。

愛する人がいることを仏教では縁という。今日のこの集まりの縁を大切にしたいと思います。（以上ここまで）

「物語を信じる」、言葉をかえれば、受け入れる・ありのままに見つめる、と言えます。

うれしいとき、悲しいとき、もうひとふんばりしたいとき、人生とは悲喜こもごもの物語。自分の人生を歩んでいるか？ご祈祷は自分と向き合うことを、わたしたちに勧めています。

ご祈祷会にて祈願した御札と、来年の年回忌のお知らせを、後日郵送します。

【コラム2】お前のものは俺のもの 俺のものもお前のもの

ドラえもんという作品のなかで、ガキ大将的存在のジャイアンが言うセリフ。

「おまえのものはおれのもの、おれのものもおれのもの」

他人の所有物など存在せず、すべて自分の所有物だという宣言です。

とても利己的で独占的な発言に見えますが、新解釈（エピソード）が出てきます。のび太のランドセルが大変な目にあったとき、ジャイアンは我がごととして必死になるのです。おまえのものはおれのものなのだから、お前のために俺が必死になるのは当然だろうと。

これだけで十分感動的と言えますが、私としてはもう一歩すすめてみたい。それが、

「お前のものは俺のもの、俺のものもお前のもの」です。

他人のものを盗んではいけない（不偷盗）と、大人に言われて、ここまで大きくなりました。しかし、本当のところはどうでしょう。

だれかの時間を盗んでいないか？未来の資源を盗んでいないか？いまの幸せのために、将来の自分から希望を盗んでいないか？

たとえば・・・極論ですが、妻は夫にたいして、「私は自分の都合で動けないのに、自由に予定を組んでいるダンナに腹が立つ」そうです。お前の時間も、俺の時間も、二人のもので。この輪を大きく広げれば、家族や日本、地球や宇宙へとつながります。

わたしたちは皆、他人のものを盗んで生きている・・・と言っていいかもしれません。

そしてそれがお互いさまであるならば、「お前のものは俺のもの、俺のものもお前のもの」。

なればこそ、なにもかもが他人からのいただきもの。もういくつ寝るとお正月。一度指折り数えてみてはいかがでしょう。◎来年もよい年でありますよう、祈念申し上げます。

【ごほうび坐禅会レポート】参加者ネット多め&地元民も 男女比は半々

今年3月からスタートした、ごほうび坐禅会。坐禅を体験してもらいたい！地元のスイーツをお茶菓子にを使って地元にも貢献したい！という気持ちで開催しています。

参加者はfacebook（インターネット）経由の方が多くいらっしやっています。もちろん地元民

の方々にも参加していただいております！ポスティングや会場・陽岳寺の門前でのチラシ配布の効果があるようです。（YOGAもやってるよ！）

男女比は半々。会社帰りでも参加できるように、平日・夜。お楽しみとして、スイーツをごほうびに。500円で月イチ開催しています。ご参加ください。（12/19のみ1500円スープ付）

HP → <http://www.puninokai.com/> Facebook → <http://www.facebook.com/puninokai/>

陽岳寺護寺会便り平成26年1月1日No.158

「和をもって貴となす」

西暦604年、推古天皇12年に、聖徳太子が作ったとされる十七条の憲法の第一条は、「和をもって貴しとなす」とあります。

当時の日本は、大という字に、イ偏に、委（ゆだ）ねる（まか）せると書き、「大倭国」と書いて、その意味は、大きく稲の穂が垂れた国という意味でした。

大和（やまと）という国になったのは、十七条の憲法が出来てから150年ぐらい経ってからです。

飛鳥時代から奈良時代の半ばになって、やっと大和という国の基本が調ってきた頃なのでしょうか。西暦757年、天平勝宝時代であり、その頃になると、活発に遣唐使が派遣され、東大寺の大仏開眼、唐の国より唐招提寺の鑑真和上が来日し、聖武天皇の遺品を正倉院に納めた時代です。日本という国が統一に近くなってきたのか、あるいは、統一をしたものの各地区の思いや意見が違ってきたのか。

「和をもって貴し」のあとに、「逆らうことなきを宗とせよ」とあり、「和」を大きな一つという概念にしなければならないと思ったのでしょうか。

聖徳太子は、三経義疏（さんきょうぎしょ）といって、法華経（ほけきょう）・勝鬘経（しょうまんぎょう）・維摩経（ゆいまきょう）の訳注を書かれました。

法華経と勝鬘経は、すべての一人一人が、自らを律することを宗とし、他者を利することを心がけることを共有しての、「普段の生活の中での心がけ」といったらよいでしょうか。

勝鬘経は、王様の娘で勝鬘という婦人が、真理への自覚まではと、生活のありようを釈迦が認めたものです。

こんな内容があります。

《世尊よ、今後、私は自分自身の享樂のために財産を蓄えることはいたしません。ただ、世尊よ、貧乏で苦しんだり、身寄りのない衆生を成熟させるためには、大いに蓄えたいと思います。世尊よ、この第六の誓いを、私は菩提の座に到達するまで厳守します。》

和は、様々な意味を持っていることがわかります。和は他者に向かうとき、敬い、いたわり、思い、自分に向かうときは、誠め、国というものを、真理、菩提、悟り、国が一つになるためにです。

ところで、深川のお祭りで、神輿をかつぐ言葉は、「ワッショイ！」に統一しています。古老は言ったものです。

「子どももお年寄りも、男も女も、貴賤に関係なくワッショイ！だ。このとき地域が一丸となって和を背負うのだ。それは、それぞれの分をもって、各自の担う務めを果たしながら一体となることだ。それが各町の競（きそ）いと言うことで、何も優劣とか一番とか言うことではない」と。

毎日新聞、平成25年5月23日朝刊に、面白いジョークの記事を見つけました。

沈みかけた船に、イギリス人、ドイツ人、フランス人、そして日本人の乗客が大勢乗っています。船長は、乗客を助けるために、それぞれの国の人たちに、海に飛び込ませようと考えました。

イギリス人には「飛び込めば、貴方たちすべて本物の英国の紳士淑女です」と、ドイツ人には「この船はやがて沈んでしまうでしょう。この船の規則では、船長の指示に従って海に飛び込まなくてはなりません」と。

フランス人には「この船は、すぐにでも沈んでしまうでしょう。そうであっても海に飛び込んではいけません」と。

そして日本人には「この船は今、沈もうとしています。あなた方日本人の方々は、みな海に飛び込んでいます」と。

これはイギリス人の固苦しさ、ドイツ人の規律好き、フランス人の傲慢さ、日本人の協調性という国民性を表すものだそうです。

「和をもって貴し」の和を、協調性や、みんな一緒、となり組。極端な内容になれば村意識、一体感、「バスに乗り遅れるな」などと、過去の歴史には、利用されてきたことがありますが、みな片方ばかりからの誤った見方でした。

維摩経が含まれていることから、「和をもって貴し」という発想には、「和して同ぜず」、という哲理も含んでいます。

人の集いは、人種で言うなら、肌の色も様々でありながら、出生も様々、生き方も様々、宗教も、考え方や見方も様々で一つでありながらも、「同ぜずして和す」という哲理を含んでいます。人が、一瞬を生きることに於いては、肌の色も出生も生き方も宗教も考え方や見方もないに等しいにかかわらず、何故、世界は、こうも激しく対立するのか？仏教は、相対することで世界が成り立っていると現状を説きます。

自己と他者も対立することで成り立っていることに、他者を利するとは、自己をなくして他者に尽くすと読めないでしょうか。

そこで、「他者を利して、分を持って生きる」とは、分とは居場所ということですが、その分は関係により時間により様々に変化するものです。その変化する分を徹して一瞬を生きることが、他者を利する行為となります。また利するとは、他者になって聞く、見る、行うことといえますが、そこには、対立するものではありませんし、いさかいやいがみ合いはありません。ここから、それぞれの分というものにおいて生きることとは、「同ぜずして和す」という意味が含まれています。

聖徳太子の講じた維摩経は、不二の法門を説きます。不二とは、相反するものは互いに根拠として成り立っている現象に、その根拠から見れば、根拠を持つこととは、自分に根拠は無いという矛盾を含んで相対立している事実を直視することとなります。

世界の具体的現実、もともと自者は空において成り立っているからこそ、諸々の関係においてスムーズに事が運ぶのですが、その空に我が入り込むことで、とらわれとなって自由に働くことができなくなること考えさせています。

「和をもって貴しとなす」には、「和して同ぜず」、「同ぜずして和す」を含むことから貴いのだと理解できます。（住職）

◎明けまして、おめでとうございます。本年もよろしくお願ひ申し上げます。

◎平成26年より春秋の両彼岸、中日に彼岸法要を考えています。時間は午後2時30分。申し込みなしで、誰でも参加できます。そしてお経は参加者とご一緒に、皆さんの想いで偲んで頂ければと思っています。短いお話しも設けようと企画しています。

陽岳寺護寺会便り平成26年2月1日 No.159

【お知らせ】申し込み不要・自由参加 お彼岸法要、お中日に 3月21日 2時半～

今年から、春や秋のお彼岸に法要をと考えています。申し込み不要、お中日の2時半～です！通りすがりだろうと、親戚だろうと、護寺会員だろうと、参加自由のものをです。年回忌とは、ある意味、節目です。毎年やってくる祥月命日も節目、お彼岸も節目です。ふだん忙しくて法要に参加できない方でも来寺できるようにと考えています。

陽岳寺の法要を体験していない方もいらっしゃるはずです。どうぞご参加ください。

陽岳寺の年中行事、5月第3土曜日のお施餓鬼会。11月最終日曜日のご祈祷の会。両会ともに申し込みが必要です。

昨年のご祈祷の会、午前中でしたでしょうか。お墓参りの方がいらっしゃいました。

お線香に火を付けていると「今日、なにかあるんですか？」とたずねられました。

つまりその方は年中行事についてご存じなかったということ。

たしかに、お知らせは全員に送っておりません。お檀家さんにだけお送りしております。または、そのお子さんやご親戚のかた（お知らせしてくださいね！）。

行事をご存じない方、陽岳寺の法要にいらっしゃる方がない方もいらっしゃるはず。

それならば、申し込み不要・自由参加のものを用意しよう！となりました。

いつがいいか？ほぼ全部のお墓にお参りがあるお彼岸がいいだろう。

通りすがりだろうと、ご親戚だろうと、お施主さんだろうと、誰でも参加できることが目的です。

そんな身構えるような法要ではありません。墓参のついでに寄るような。ふだん墓参だけの方、ご家族の方も誘ってみてください。

【コラム】 ささえる人

節分を迎え、考えたのは「ささえる」大切さでした。「ささえられる人から、ささえる人に。」みんながささえる人になると、らくになる。

そのかわり、ぜったいに強要しない。たとえば戦時中のことです。ぜいたくは敵で、みんな我慢しているんだからわたしたちも我慢しよう、は袋小路でした。我慢しよう我慢しなくとも、世の中はうつりかわる。ちょっと前の論理はもう現代に通用しません。それならば、歴史から学び、次に活かすことが求められるはず。

絶対の安全はないと皆が分かっているのに、安全に使うことを提唱するのもおかしいことです。人間としての矜持をもって、わるいことをしないようにしたい。

ささえられる人から、ささえる人になることを思えば・・・未来を考えて、行動することがうなが

されると思います。（新命）

【コラム】あなたが好き

2011年3月11日、東日本大震災が起こります。その後テレビでは民放のコマーシャルにおいて、ある詩が流れていました。何度も。

「ころ」は
だれにも見えないけれども

「ころづかい」は
見える

「思い」は
見えないけれど

「思いやり」は
だれにでも見える

作詞家・詩人の宮澤章二さん作です。

たしかに、「ころづかい」「思いやり」は見えるものです。席をゆずる、すれちがうときに傘を傾ける、歩くはやさを合わせる、など。

つぎに「ころ」「思い」は見えないものです。席をゆずろうかなどうしようかな？、向こうから来る人の傘大きいな、つらそうだから歩幅小さくしてゆっくりにしようか、など。

でも、じつは一人だけその「ころ」「思い」を見ている人がいると思うのです。

それは、「ころ」「思い」を持っている自分。自分だけが自分のころを深く見つめることができます。

ところが、そんな自分だけに見える「ころ」「思い」が相手にも見える言葉があります。

その言葉とは、「あなたが好き」。

「あなたが嫌い」も「ころ」「思い」が見える言葉ですが、相手に自分のころを見つめることを許しません。

「あなたが好き」とは、見つめられることを受け入れる言葉。

相手のころを深く見つめることができるのも、わたしたち。そのためには相手の視点になって考えることがのぞまれます。

「わたしがわたしであること」を自分で見つめることができれば、相手も同じように「わたしがわたしであること」を考えていることに気付くはず。

するとお互いを尊重しあうことになる。相手の「わたしがわたしであること」を否定できないのですから、「あなたがあなたであること」に価値を見出すこととなります。相手は「かけがえのない存在」なのだ。社会的な価値観など関係ないことです。

それはつまり、ただ隣にいる人が、自分にとって「かけがえのない存在」であることにもなっていく。誰であろうと、です。

親が子を愛することに取引や条件はありません。ただそこに存在すること以上に理由はないはず。だからこそ「あなたが好き」と子どもに言う。そして、この親と子の関係性は、他人との

関係性に置き換えることもできる。

他人との関係性は社会的な価値観によることが多いかもしれません。たとえば、店員と客、先生と生徒、隣人とわたし。

でもその土台には、まず一人の人間としての認識がある。店員と客のまえに一人の人間。先生と生徒のまえに同じ人間。

代替不可能で、誰にとってもかけがえのない存在だという発表。その最たる発言として「あなたが好き」があるのだと思います。

「あなたが好き」とは、自分だけに見える「こころ」「思い」が相手にも見える言葉です。

あなたが私のことを尊いと思うように、私もあなたのことを尊いと思う。社会の価値観が常に移り変わろうとも、ある意味絶対に変わる事のない価値観があるんだという言葉が「あなたが好き」だと考えてみたのですが。（新命）

ごほうび坐禅会：2月26日(水)19:30～

ごほうびYOGA：2月16日(日)15:30～

ゆったり寺ヨガ:2月8・22日(土)17:00～

H P → <http://www.puninokai.com/> Facebook → <http://www.facebook.com/puninokai/>

陽岳寺護寺会便り平成26年3月1日No.160

【お彼岸法要のお知らせ】

申し込み不要・自由参加

お彼岸法要、お中日に

3月21日2時半～

今年から春や秋のお彼岸に法要を、と考えています。どうぞご参加ください。

日時 平成26年3月21日（金・祝日）

午後2時半～ お彼岸法要

備考 事前申し込みは不要です

だれでも参加できます

今年から春や秋のお彼岸に法要をと考えています。申し込み不要、お中日（3月21日）の2時半からスタートです！

通りすがりだろうと、親戚だろうと、お墓がなかろうと、護寺会員だろうと、参加自由のものをです。

年回忌とは、ある意味、節目です。毎年やってくる祥月命日も節目、お彼岸も節目です。ふだん忙しくて法要に参加できない方でも来寺できるようにと考えています。陽岳寺の法要を体験していない方もいらっしゃるはずです。どうぞご参加ください！法要は短い時間です。お待ちしております。

【コラム】4年目

「どうして上司は分かってくれないのだろう。（わたしは頑張っているのに！やきもきしているのに！そんなつもりじゃないのに！タイムリミットがあるのに！）」

「あの人の考えていることは、まったく分からない。（なんでそういう風に思うのかな、バカなのではないか、ものを知らないのではないか）」

人は追い詰められると、自分のパターンにはまって、まわりが見えなくなります。まわりが見えなくなるということは、自分以外のことを考えることができない、自分の世界の論理でものを見るところ。他者の存在が消えるのです。

消えるのは他者だけではないようです。

「自分は、なぜあんなことをしてしまったのだろうか。（自分で自分が分からない）」

自分の存在も見失ってしまう。

《本当の自分はどこにいるのか？》

この疑問にふりまわされて悩むことを『自分探し』と言ったりしますが、どこかに自分がいなければならない、と自分で自分を追い詰めているために出てくる行為のようです。冒頭の上司をこころのなかで責める人も、他者を理解しない人も。ではなぜ悩むのでしょうか、まわりが見えなくなるのでしょうか、自分のパターンにはまるのでしょうか。

ひとつには、自分に自信がないから。

ひとつには、環境や周囲の影響。

これらに共通していることは自覚がない、ということです。自分のパターンが絶対だと信じている人はそのように思い込んでいるのですから、自覚はありません。環境や周囲の影響は目に見えませんから気づきにくい。

人のしぐさや考え方は、環境や周囲の影響でその人に浸透していきます。

『生き方や考え方を変えるには、付き合う人や場所を変えること』と古人は言いました。

わたしたちは、環境に適応する能力を持った生きものです。しかし、この能力は一長一短。パターンにはまれば生きやすくもなれば、はみだせば生きにくくもなる。あちらを立てればこちらが立たずは当たり前なのに、従来パターンでどうにかしようとして失敗する。

解決の糸口は、見えないものを言葉にすることです。目に見えるかたちに自分で試してみることです。習慣（自分で自分を追い詰めている、自分のパターンに逃げ込んでいる、色眼鏡で見る）という自分で自分の見えない持ち物を点検していくと、なに・どこに自分を持っていたのかに気づきます。

2011年3月11日金曜日、東日本大震災が起こり、今年で4年目となります。

キズナという言葉が流行し、地縁に注目があつまりました。しかし、その後キズナという言葉は地縁よりも狭い血縁へと、意味が閉じてしまいました。信用信頼は、家族や血縁にしかないのだというあきらめ。その家族や血縁というキズナは、血が混ざらないと、他人をいれないと広がらないという事実を見ないキズナです。自覚がない。

キズナを血（同じ・変えられようのない・可能性が広がらないもの）というパターンに落とし込んだのは誰でしょうか。

それをしたのは、わたしたちだという自覚。環境や周囲の影響に同調することは楽ですが、キズナを血縁という可能性に狭めてしまったように、わたしたちは自分で自分の首をしめる。自覚がなければ、上司のことも分からず、他人の考えも分かりません。

すべて認識のずれです。自分と他人の、認識のずれ。自分のなかにもある、認識のずれ。

あなたは本当にそう思っているのか。自分はイヤだ、好きだ、分からないことだ、と断じていないか？

認識のずれを自覚して、東日本大震災4年目をむかえたい。そう思いませんか。（副住職）

◎春彼岸は3月18（火）～24（月）日、お中日は21日（金・祝）です。

ごほうび坐禅会：3月26日(水)19:30～

ごほうびYOGA：3月9日(日)15:30～

ゆったり寺ヨガ:3月15・29日(土)17:00～

ウェブサイト : <http://www.puninokai.com>

<http://www.facebook.com/puninokai>

陽岳寺護寺会便り平成26年4月1日No.161

【コラム】はだかの王様

春や秋のお彼岸に法要を、と今年から考えました。申し込み不要のものをです。

お中日（3月21日）の2時半から、ということで三十名ほどの方々にご参加いただきました。ありがとうございました。

陽岳寺の法要は、住職の工夫のたまものです。お彼岸法要用にと住職の回向の後、すこし私がお話しさせていただきました。「なぜ、住職は法要の内容を工夫しているか」。

お寺とは、ひとつにはなにかを得る場所・置いていく場所です。お参りしてスッキリするのは、なにかを置いていった証拠です。得る・置いていく、そのきっかけは人それぞれ。どこかでひっかかる様に法要の内容を工夫していると考えてみました。

そしてもうひとつ。お寺とは、礼拝施設、祈る場所です。お墓も、お仏壇もそうです。ひっかかった後にチェックをする手がかりとしたい。祈ることは、鏡を見て自分の様子をチェックすること、と言っていいと思います。

毎朝わたしたちは、顔を洗うため、歯をみがくため、お化粧をするため、鏡を見ます。点検し、直すところは直す。何もしないと不快で、モヤモヤします。原因不明の悩みです。

付いていて当たり前顔を鏡に見るわけですが、当たり前すぎて気付かないこともあるはず。当たり前すぎて気付かないからこそ原因不明。なにかを得る・置いていくことで、原因不明の悩みの正体に気付くことができる。「当たり前すぎて気付かないこと」に気付くにはきっかけが必要です。童話「はだかの王様」というお話があります。

² 仕立て屋が、さも今ここに珍しい布があるかのように王様へ言います。「賢い人にしか見えない珍しい布です」と。

珍しい布が見えない王様は、見栄を張り、見える振りをして洋服を作らせます。家来たちも見栄を張って誉めそやし、王様が意気揚々と街中に披露しに出掛けると街の大人たちもこぞって見栄を張り「すばらしい服だ」と誉めそやします。

しかし、ある子供が王様を指差して「何で王様は裸で歩いているの？」と笑います。子供の言うことが「真実」なのだとようやく気付かされた大人たちは自分の愚かさを恥じる、というお話。

実力がないのに見栄を張る。やっかみ・比較・思い込み・嗜好をいれる。

『今ここに珍しい布はない』という当たり前すぎて気付く事実を、王様は見栄を張ったせいで、「当たり前すぎて気付かないこと」にしてしまった。さらに、まわりも同調した。

どこかにきっかけが無ければ今いる環境や原因不明の悩みを抜け出せない、というお話です。法要の内容の工夫は『はだかの王様』の教訓のように、いろいろと意味があるのでは、と住職と掛け合いを見せたのですが・・・。

さて、秋のお彼岸にもお彼岸会法要をいたします。どうぞご参加ください！法要は短い時間です。お待ちしております。

【お知らせ】陽岳寺山門大施餓鬼会 5月17日に

陽岳寺が大切にしている年中行事、5月のお施餓鬼は第三土曜日です。今年は、5月17日。4月の中旬にお知らせを別途郵送いたします。お申し込みください。

┆日時 平成26年5月17日（土）

┆内容 午後2時～ （未定）法話
午後3時～ 施餓鬼会の法要

┆会費 1万円（回向料・お塔婆一本を含みます。）

┆備考 施餓鬼会前後のお墓参りは混雑します。余裕をもってお越しください。なお、施餓鬼会に参加で、当日欠席の場合も、会費は1万円とさせていただきます。

【寺社フェス】向源（こうげん）

陽岳寺ではなく、超宗派のお寺イベントのお知らせです。ぜひご参加ください。

┆日時 平成26年4月28日（火・祝日）

午後11時～夜まで

┆場所 増上寺

┆申込 ウェブ上にて、チケット販売中

┆公式ウェブサイト <http://kohgen.org>

『過去に学び、未来を信じ、今を生きる。』をテーマに、2014年は増上寺にて開催！

3.11 震災以降、私たちの生活は大きく変わりました。生活そのものだけでなく、何を考え、何を基準に行動するのかという精神性を重んじるようになり、「お寺」に対する興味が増えています。

心安らかに、未来への希望を失うことなく日常を生き続ける精神の強さ。それは環境など外のものではなく、自分自身の心の内にあることに人々は気づき始めました。そのあらわれの一つが「お寺ブーム」。私たち日本人の心の深いところにある日本古来の文化的なルーツへの関心です。

しかしながら、精神性を重んじるようになった人々の思いに答えるには、ブームという一過性のもものでは足りません。向源は数年前から開催していますが、2020年のオリンピックイヤーを目指して継続開催しています。

向源では、そのような思いに答えられる幅広く多様性に富んだコンテンツをご用意。その中から、参加者に自分の興味にあったものを選択、実際に体験することができます。

お寺という非日常の空間に身をおいて、雑音から脱してゆっくりと自己と向き合った中で見つけた、大切な目標に向かう源となるイベントが寺社フェス「向源」です。

同封したフライヤー・公式ウェブサイトをご覧ください。ご家族やご友人にも、御紹介いただくと幸いです。チケット販売中！（副住職）

『ワークショップ』Deep増上寺・ウルトラ木魚で人形供養・厄除け祈願・写経・写仏・念仏・消しゴムハンコ法話WS・経典をナナメから読む会・仏教プラクティス・死の体験旅行・お守り作り・極楽箸で心と向き合う・坐禅・いけばな・写真教室・書の時間・和綴じ製本・塗香&匂い袋づくり・能体験・水引・戦国武将マルチタスク茶会・お寺de囲碁 『物販ブース』

『法要ライブ』雅楽&舞楽（大本山増上寺雅楽会）、天台声明（天台宗青年僧有志）法楽太鼓（真言宗豊山派有志）

『Live』Haruka nakamura LABO Ambient Session 2・テニスコーツ・小川晃一

『講演』禅僧 松山大耕×脳科学者 中野信子

陽岳寺護寺会便り平成26年5月17日No.162

お施餓鬼会

この4月に作り替えた通夜法要の一部です。

《 陽岳寺の建つ深川は、川と海に囲まれた町です。

その、とうとうと流れ続ける川を、橋の上から眺めた場合、橋の上に立つ私を今の私とすれば、上流の川は私の誕生以前から続く私であり、これより下流の川と海はその後の私であり、川は私の総てであると言え、上流の川は眼には見えないけれど、今も流れて在り、下流の川は海に今流れ込んで同時にあるといえるでしょう。

自分が今、存在すると言うことは、総ての時と空間が、私を表現してくれていることだと、仏教は教えます。

その全ての時間は、今、橋の上に立つことにより、時間の空間化となって、上流と下流に分かれることを意味いたします。

今という時間を持つことによって、時間は、過去と未来という相反するものとして、分けられることを見つめます。しかも、仏教の具体的な時間の特色とする考え方は、分かれることにより、却って、過去と未来に結びつけられている今の事実を見据えます。

このことは、直線的な時間の流れがあるのだと考えるのではなく、今という時間に、ここに立つということで、過去と未来は誕生し、その今は、過去と未来を根拠として在ることになります。しかも同時に、過去や未来は、今を根拠としなければ存在しないと気づくのです。

そして、その同時性を持つが故に、その今は、次々に過去に流れ込み、現在に生まれると見えてきます。ここから過去は不滅となることができます。そして、未来は、次々に現在となって消えてゆくと現実の姿をとらえます。

過去・現在・未来とは、時の全体の流れでありながら、今から今へと、時の流れは、流れながら、現在にいて流れない今でなければなりません。

釈尊仏陀の話される、絶対の現在、現在の永遠性、また、時間の前後際断とはこのことをいいます。

現実の時間は具体的に、流れないものが流れ、流れるものが流れないことにおいて、時間は成立しています。

次に、仏教の具体的な場所・空間の考え方です。川の話の思い出せば、橋の上に立つという行為です。

釈尊仏陀は「行為によって自己・私がある」と語っています。つまり橋の上に立つことで時間と同時に、空間も区別されて、私と空間が誕生しなければなりません。

このことは、私という存在は私以外の空間があって、つまり根拠にして在ることになります。同時に空間も私を根拠にしてあるという事実気づくのです。しかも、今と同じように、私が立つ”ここ”は、必ず”ここ”から”ここ”へです。場所という広がり、時と同じく、”ここ”を根拠にして成り立っていることに気づきます。

このことから、空間とは、世界や宇宙の全体でありながら、”ここ”から”ここ”へと、空間の広がり、広がりながら、”ここ”にいて広がらない”ここ”でなければなりません。絶対の”ここ”、”ここ”の永遠性、また”空間”の前後左右の截断とはこのことをいいます。

》

釈尊は現実の縁起（えんぎ）の法においては、現在生起といい、すべての時と空間は現在において生起するというのが、これは別の言葉で言えば、現在に於いて結びついているということです。このことは、同時に結びつくことで、現在に於いて分かれるのだという事実を見つめます。

その現在とは、今・ここという現実の私に係わっていることが理解できます。過去と現在という相反して絶対に交わらないものが、交わるのは、分かれながらも繋がっている自己の中に自己を映しながら、知る知らないにかかわらず、人は自己自身を形成して行きます。

西田幾多郎師は『場所的論理と宗教的世界観』の中で、「自己の中に自己を表現し、自己自身を表現することによって自己自身を形成して行く。」と記していますが、何がというと、「矛盾的自己同一的世界」ということです。このことこそ、「自己と世界の在り方」ですが、相反するものが矛盾を媒介としてつながっている世界です。

お施餓鬼は、お寺が媒介として、参加する方々の一期一会の総供養となるのですが、今を生き

る私たちの生まれる以前の過去を含めての法要です。

チベット「死者の書」の世界（中沢新一著 角川ソフィア文庫）にある言葉で、
誕生のときには、あなたが泣き

全世界は喜びに沸く。

死ぬときには、全世界が泣き

あなたは喜びにあふれる。

かくのごとく、生きることだ。

世界の世は時間であり、界は空間であることから、世界とは今・ここということなのですが、
今・ここに生起することのみに自覚している傾向に支配されているのが、今の時代の特徴です。

お施餓鬼の経文の冒頭は、「若し人、三世一切の、仏を知らんと欲せなば、まさに、世界の一切は、おのれ自身の心が造ると、観ずべし」です。

この仏という意味は、「矛盾的自己同一的世界」と同意味です。何故なら、おのれ自身の心が造るとは、同時におのれ自身の心が造らされていくということが含まれているからです。

これが現在生起という意味なのですが、現在、様々な起きている事実は、縁起により起こることですが、同時に起こらされての起きるです。動き動かされ、動かされ動く、人は勝手に生まれて、生きていくということではないはず。すべてに因果の法則が支配しています。この法則を飛び越えることはできません。

「誕生したとき、あなたが泣き、全世界は喜びにあふれる」

世界とは時間と空間ですので、ここには過去に連綿としてつながる命からの今の表現という一期一会が記されています。

「死ぬときには、全世界が泣き、あなたは喜びにあふれる」

私にとって喜びあふれた死は、人の生きようとして重たい言葉です。このように生きるためには、一瞬一瞬を悔いなく生きる連続の時間に気づくことだと考えられます。

これはチベットの書に記されている

言葉なのですが、考えてみると、この世を旅立っていったすべての人の、私たちへの問いかけと受け取れることができないでしょうか？

私の中に脈々と流れる尊い血という歴史。今・ここに、いっしょに、いるから……。

ここから、尊い私が、生まれた。

ジテンキジンシュー 我ら、汝等に、この食を、施さん。

たとえ、あの人たちの声が聞こえなくとも、今、話しかけたい。

たとえ、あの人たちが食べなくとも、好きだったものをお供えしたい。

たとえ、あの人たちの喜ぶ顔が見えなくとも、お花をお供えしたい。

たとえ、あの人たちの姿が見えなくとも、手を合わせたい。

もう、あの人たちと巡り逢うことができないから、何度でも、お香を献じたい。

もう、あの人たちと巡り逢うことができないけれど、何度でも、感謝を捧げたい。

お施餓鬼の、餓鬼に施す意味は、私たちの心に潜んで現れる餓鬼という醜さに気づくことです。

。そこで、法要は、「仏は、きびしさや一途さという我が心の鬼を造り、鬼は、優しさや受け容れるという我が心の仏を造りたまへ」と祈ります。

今年も、各家々の時代をさかのぼって、家族から、親戚から切り離された多くの先に旅立たれた人への思いと、すべてを残して旅立っていた人の思いを、そして死者からの問いかけを、お施餓鬼の法要は、結びつけたいと思っています。